
薙野ゆいら
金蘭の王国
約束の日は遥かに
角川ビーンズ文庫

金蘭の王国
約束の日は遥かに

薙野ゆいら

BEANS BUNKO
16265
角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

約束の日は遥かに

薙野ゆいら

16265

角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

約束の日は遥かに

一　章	雪に囚われし姫君と	7
二　章	王都を発つ者たちよ	45
三　章	征け、最果ての地へ	77
四　章	赤と白の戦野で	103
五　章	鷹は羽ばたきをやめて	138
六　章	戦いの果てる刻	180
七　章	君と再会の約束を	211
最終章	約束の日は遥かに	245
あとがき		254


火雷明王(からいみょうおう)
綺理が降臨させた乾ノ神衆。強大な力をもつ。
真羅(しんら)
綺理たちが幼い頃《契約》を結んだ大淵妖。妖王の分身。
翔波(しょうは)
綺理たちの幼なじみの正三位乾術師。冬惺に絶対の忠誠を誓う。

登場人物紹介



冬惺（とうせい）
白桜王家・春怜王の弟。綺理のいとこで、護国大将軍の位をもつ。

綺理（きり）
瑛国の大貴族・玉造家の姫だが、毒薬の調合が趣味の型破りな少女。

本文イラスト／香坂ゆう

一章　雪に囚われし姫君と

薄暗い堂内には、香の煙が仄白く立ち込めていた。

祈禱を終えた冬惺は、静かに立ち上がって正面を見た。雲形の台座の上には、葬送を司る乾ノ神衆の像。その神衆像の前には、真新しい白木の棺が安置されている。

――殯の宮。

貴人を埋葬するまでの間、亡骸を仮に祭る場所だ。

湿ノ力の強い瑛国では、死者をそのままにしておくと亡骸に淵妖が巣食いやすい。そこで殯、つまり仮葬の間に訪れた者が代わる代わる弔いの祈禱を行い、それから火葬に付すことで、亡骸や墓所が淵妖に穢されることを防ぐのである。

殯の期間は、慣例で死者の身分が高いほど長くなる。北部の大家、玉造家の最後の当主影珀の場合は、貴族身分としては最長の七日間となる。

（影珀叔父上……）

冬惺は自分が殺めた男の亡骸をやるせない思いで見つめて、深々と礼をした。

そして退出しようと一歩下がったとき、棺を囲むろうそくの火が揺れた。振り返ると、殯の宮の扉が開かれ、二人の人物が入ってくるところだった。

一人は、冬惺の次兄である夏憬だ。しかし冬惺の視線は夏憬を素通りし、彼と連れ立ってきたもう一人の人物に吸い寄せられる。

「玻璃義姉上」

夏憬の妻であり、綺理の姉であり、玉造公影珀の長女――玻璃。

黒橡の喪服に身を包んだ彼女は、肩のあたりで切り揃えられた髪を揺らしながら歩んできた。そのくすんだ金髪は妹の明るい金髪とは色合いが違う。だが冬惺をまっすぐに見すえる碧玉の瞳は、妹とまったく同じ色だ。冬惺が手にかけた、彼女の父親とも。

「……義姉上。影珀叔父上のこと――」

「お父さまの葬儀のこと、お礼を言うわ、冬惺公」

謝罪しようとした冬惺を、玻璃はさらりとさえぎった。

「謀反人にもかかわらず貴人として葬送するよう取りはからってくれたのは、あなただとか」

謀反は大罪。謀反の首謀者は首をさらされ、きちんとした埋葬を許されないのが普通だ。それが丁重に王都の寺院に――それも玉造家に縁ある玉瑛院に運ばれ、七日間の殯と身分にふさわしい葬儀が行われることになったのだから、異例なほど寛容な処置である。

だがそれを指示した冬惺は、表情を強張らせたまま目を伏せた。

「……私には、義姉上に礼を言われる資格はありません」

対する玻璃は、常と変わらぬ冷めた様子で肩をすくめる。

「それをいうなら、そもそもあなたは私に謝罪する必要はないわ。お父さまはあなたを殺すつもりだったし、あなたは護国大将軍として当然のことをしただけでしょう」

玉造公影珀が謀反を起こし、敵の紅楓王家を玉座に据えようと王都に進軍した。冬惺は白桜王家方の総大将として玉造軍を打ち破り、一騎打ちの末に影珀を討ち取った。――言葉にすれば、確かにそれだけのことではある。

「それに私たちは、お父さまを裏切って白桜方に寝返った身だもの。私にはお父さまのことであなたを責める権利はないし、そうするつもりはないわ。――ただね」

玻璃がふと言葉を切った。

次の瞬間、パァンッ、と乾いた音が響く。

「……っ」

頬に走った衝撃に、冬惺は目を見開いた。

痛烈な平手打ちを見舞った玻璃が、碧玉の双眸を激情に輝かせている。彼女は、驚いてなだめに入ろうとした夏憬を無視し、冬惺をきつく睨んだ。

「――あの子は、あなたならこんなことはしないって信じていたはずよ」

「……」

「話はそれだけ。行って。祈禱の邪魔よ」

玻璃は少し赤くなった右手をひらひらと振った。言葉を失った冬惺は、黙って一礼すると、

おろおろしている夏憬の脇をすり抜けて扉へ向かう。

立ち去り際に、玻璃のため息が耳に届いた。その吐息も、続く独り言も、かすかに震えていた。あの矜持の高い義姉がこんな風に声を震わすのを、冬惺は初めて聞いた。

「……家の縛りが解ければ、もっとせいせいするかと思っていたし……涙なんて、出ないと思っていたのにね……」

肩越しにちらと振り返ると、夏憬が玻璃の肩を抱き寄せているのが見えた。自分と綺理の間では二度と起こりえないその光景から目をそらし、冬惺は静かに扉を閉めた。

殯の宮を出ると、回廊に控えていた翔波が駆け寄ってきた。

平手を受けた頬が赤くなっていたのだろう。こちらを見るなり翔波がぎょっとした顔になったが、冬惺は気にするなと手を振って歩き出す。

しばらく無言で境内を歩いていると、白いものがひらりと袖に落ちてきた。隣で翔波が空を仰ぎ、白い息をつく。

「雪か。王都で雪なんて珍しいね。今夜は積もるかな」

「千紗が目を輝かせる程度には積もるんじゃないか。南部だから数日で消えるだろうが……季節からいったら、北部ではもう雪が厚く積もる頃だしな」

ため息混じりに付け加えると、翔波が口調を改めて言った。

「閣下。北部へは、雪解けを待ってから進軍するんですよね」
「ああ。今から北へ向かっても、着く頃には雪が厚くて軍が身動きできないからな。当分は休戦だ。……不本意ながらな」
本当は雪に閉ざされる前に北部に入りたかったのだが、南に急進した玉造軍を食い止めるため王都近郊まで取って返したせいで、それはかなわなくなった。北の戦線は二月近く膠着状態に入り、玉造軍を失って大打撃を負った紅楓方も、その隙に態勢を立て直してしまうだろう。
そしてその間、綺理はずっと紅楓方の手の中だ。
紅楓家当主朔秋。綺理に興味を持っているらしい敵将、鷹居の空騅。地上を淵海に沈めんと企んでいる悪しき妖王万宵――。敵ばかりの陣営の中で、彼女は無事でいるだろうか。
（それに、きっと綺理は泣いてる）
冬惺は北の空を見上げて、綺理とつかの間の再会をしたときのことを思う。
――《契約》相手の大淵妖に乗っ取られた影珀を、冬惺が殺した。綺理が現れたのはまさにその直後だった。真羅の話によれば、万宵が綺理を魂だけ戦場に連れてきたのだという。
あのとき綺理は、冬惺が玉造を滅ぼし、綺理の父親を殺したのを見た。それでもなお彼女は冬惺に手を伸ばしてくれた。それが冬惺の救いだった。けれど、綺理は。
（……きっとあいつは俺を恨むこともできないで、独りで痛んでる）
綺理が泣き暮らすばかりの少女とは思わないが、だからこそ彼女が泣いているときはそばに

ついていたかった。だが今の冬惺にはそうすることはできないし、その資格もない。

『――あの子は、あなたならこんなことはしないって信じていたはずよ』

冬惺は綺理のいる地を遥かに望むように、琥珀の瞳を細めた。

「……早く、雪が消えてしまえばいいな」

約束をした。

必ずおまえをさらいに行くと、そう誓った。

待ってると、綺理はそう答えてくれた。

あの伝言はまだ有効なのだろうか。

もちろん自分は必ず綺理を紅楓方のもとから解放するし、彼女もきっと助けを待っている。

――だが果たして綺理は、まだ冬惺を待ってくれているだろうか？

「――それから綺理さま。玉造公のご遺体のことですけれど、奏……『梨英』が言うには、御首級がさらされるようなことはなかったそうです。なんでも冬惺さまの命で、王都輪瑛の寺院で葬儀が行われることになったのだとか」

「……ん、そっか。王都ならお姉さまもいるし、ちゃんとしてくれるよね」

寝室の鏡台の前に座る綺理は、侍女の桂鈴の言葉にほっと息をついた。

桂鈴がいう『梨英』とは、綺理の侍女梨英に変装した間者の少年――奏珠のことだ。

奏珠は自由に動き回れない綺理に代わって、離宮中の情報を集めてきてくれる。おかげで綺理は、あてがわれた殿舎にこもっていながら、この離宮に届く報せのほとんどを把握していた。

「そうですわね。……ただ、埋葬場所がどうなるかまでは、まだ伝わっておりませんので……」

綺理の髪を梳かし終えた桂鈴は、櫛をしまいながら言葉を濁した。大罪人の骨は、乾ノ神の加護の外――淵海に捨てられてもおかしくないのだ。だが綺理は小さく首を横に振る。

「心配しなくても、冬惺ならきっとしかるべき埋葬場所を選んでくれるわ。冬惺は捕虜になった玉造の兵への処置も、ずいぶん寛容なものにしてくれたみたいだし……」

綺理は桂鈴に髪を結い上げられながら、目を閉じた。

――冬惺は戦の始まる前、影珀を生かして捕らえるよう自軍に命じていたらしい。その彼が、なぜ影珀を討たねばならなくなったのだろう。綺理の守り袋を受け取ってくれていた影珀が、なぜ投降して生き延びる道を選んでくれなかったのだろう。

血まみれの父の亡骸を思い出すと、胸がぎゅっとしめつけられたように痛む。だがそれと同時に、綺理は冬惺の瞳が強い罪悪感に染まっていたことも気がかりなのだ。彼がまた己を責めることに囚われて、心を閉ざしてしまいそうで心配だった。

（ちゃんと聞きたい。冬惺に会って話を聞いて、伝えたい。たとえなにがあったのだとしても、それでも私は冬惺のことが――）

「綺理さま」

綺理の思索を断ち切るように、桂鈴が不安げに名を呼んだ。

「綺理姫さま。冬惺さまのことは……」

「……わかっているわ」

綺理は彼女が言わんとすることを察し、膝の上で拳を握った。

――綺理はあの戦の結果を、この離宮の誰よりも早く知っていた。だから玉造軍の大敗に怒り狂った朔秋が、影珀を役立たずと罵りにきたときも、既に心の準備はできていた。父の訃報を初めて聞いたような顔をして、卒倒する演技で朔秋を追い返すだけの余裕もあった。

それから数日、悲報に取り乱したふりをして自分の侍女以外を寄せ付けないで、悲しみに浸る時間と今後のことを考える時間を稼いだ。

――だからそろそろ、目の前の現実を見すえるときだ。

綺理は一呼吸して、ゆっくりと目を開けた。鏡の中には、正装に身を包んだ自分がいる。氷襲の装束に、喪礼用の黒橡の裳。結い上げた金髪には、やはり喪を示す黒玉のかんざしと、新年祭の習わしである白い花飾りとを挿し、玉造の碧玉の瞳でこちらを見ている。

鏡像の自分に言い聞かせるように、綺理はそうであらねばならないことを口にした。

「玉造の綺理にとって、白桜の冬惺は仇よ」

王位争いの内乱が雪で事実上の休戦となったまま年は明け、正月――。

紅楓方の新年祭は、紅楓家当主朔秋のいる離宮を仮の王宮と定めて行われた。

離宮の正殿は鮮やかな垂れ絹で飾られ、毛皮が敷かれた室内は北部の冬の寒さを忘れるほど暖かい。戦に明け暮れていた武門の貴族たちも、今宵は鎧を脱いで優雅に着飾り、久々の華やかな宴に興じている。

そんな広間の中で、空騅は紅楓方随一の戦功者として人々に囲まれていた。

「空騅将軍。将軍の北での戦果ははるばる我が砦にも届いておりますよ。いや、まさに名将の呼び声に劣らぬ戦いぶりであったとか」

「総大将への任命ももう決定しているそうですね。是非麾下に加えていただきたいものです」

空騅は口々に誉めそやす者たちにそつなく応対し、人好きのする笑みを振りまく。

――玉造軍の大敗を筆頭に南部では敗戦が続き、戦況は紅楓方にとって思わしくない。だがそれゆえに、北部を制圧した空騅の戦功は大きく取り上げられ、これでもかというほどの賞賛と報奨が彼のもとに集まっていた。

そうした意味では、影珀の戦死は空騅にとって都合がよかった。もしあのまま玉造軍が王都を制圧していたら、手柄はすべて影珀のものになり、空騅の戦功はかすんでいたところだ。

それにもとはといえば、玉造家は白桜方の最有力貴族。見方を変えれば、紅楓方が挙兵した際に最大の障壁になるはずだった玉造家が、白桜方と同士討ちして自滅してくれたことになる。紅楓方にとっても単純な損失とはいえない。

欲を言えば影珀には白桜軍にもっと打撃を与えてから退場してほしかったが、自分が好敵手と見定めた白桜の冬惺が生き延びたと聞いてほっとしたのもまた事実。

（それに――）

空騅は会話の途切れ目に、薄紫の瞳をすいと広間の奥に向けた。

「――そういえば、玉造の姫君は新年祭に出席されているんですね」

視線の先では、憂え顔の綺理が朔秋の隣に座っている。しばらく見ないうちに大人びたような気がするのは、喪礼用の控えめな装束ゆえか、その表情ゆえか。

空騅の視線を追った人々が、小声で言う。

「ああ。まだ朔秋殿下の婚約者として出席しているようですがね。さていつまでのことか」

「玉造公亡き今、朔秋殿下はあの姫君をどうされるおつもりやら……」

「あれほどの美しさなら手放すのも惜しいでしょうが、なにぶん乾ノ術を使えない外れ者では、王妃には……」

もともと朔秋が綺理と婚約したのは、玉造公を味方に引き入れるためだ。影珀が戦死し、玉造家の勢力が失われた以上、綺理を王妃に迎えるという盟約条件を果たす必要はない。

「しかし綺理姫といえば……玉造は今後どちら側になるのでしょうな？」

ふと一人の貴族が声を低め、危ぶむように言った。

「いやなに、我が領地にも玉造の民がいますからな。彼らの処遇をどうしたものかと……」

影珀が紅楓王家と同盟を結ぶまで、玉造家は一貫して白桜方だった。現に玉造家の長女玻璃は、夫である白桜王家の王弟と共に白桜方に寝返っている。ならば同盟を結んだ当人が死した今、残された玉造の民は白桜方なのか紅楓方なのか――。

そんな含みの込められた言葉に、別の貴族があっさりと答える。

「それでしたら、綺理姫は紅楓方だと明言されたそうですよ」

「ほう？　そうなんですか？」

空騅が目を瞠ってみせると、他の者たちもわけ知り顔でうなずいた。

「綺理姫にしてみれば白桜方は父君の仇ですからね。恨みこそすれ、今さら白桜方に心を寄せる気にはなれないでしょう」

確かに、と応じて、空騅は酒杯を傾けた。その隣で下卑た笑声が漏れる。

「父君の遺志を継いで……と言えば聞こえはいいですがな。ここで朔秋殿下の歓心を買わねば落ちぶれるばかりと気づいたのかもしれませんぞ」

「いくら高貴な血筋とはいえ、後ろ盾を失った姫では男にすがるしか道はないですからな」
「さて、『どこで』『どうやって』歓心を買うつもりやら――」
カン！　と、空騅は勢いよく杯を卓に置いた。驚いてにやにや笑いを収めた面々に、無作法を詫びてからにこりと笑う。
「綺理姫と殿下の婚約は破棄されていませんよ。姫君はまだ殿下の正式な婚約者でしょう？」
先走って綺理を侮辱すれば、朔秋に対する不敬にもつながる――。言外にそう臭わせた空騅に、彼らはは っとした。慌てて誤魔化し笑いを浮かべ、当たり障りのない話題に転じる。
やがて皆の興味が綺理からそれた頃、空騅は杯の陰から彼女を盗み見た。
奥の席では朔秋が綺理の左手首の銀環を引っ張り、彼女を引き寄せているところだった。嫌がる綺理の口に杯を押し当て、無理やり酒を飲ませる。
「……」
空騅はその様に瞳をぐっと険しくし、酒杯をあおった。

「うー……気持ち悪い……。というか朔秋が気色悪い……」
宴もたけなわになった頃、綺理は朔秋が席を離れたのをいいことに広間を抜け出していた。
人けのない廊下で欄干にもたれ、雪に覆われた中庭を眺める。凍えるような夜気も、酒と人

いきれに火照った頬には心地よい。
「酔い醒ましの薬草茶を作りたいなあ。というか気分転換に毒薬調合したいなあ。新年祭にちなんで、そのへんの植え込みから元日草の根っこを掘ってきて毒薬にしてみようかなあ」
埒もないことをぶつぶつ口にして、ため息をつく。
（去年の新年祭は王都で……冬惺と翔波が一緒だったのにな）
一年前の正月を思い出したら、喉の奥から熱いものがこみ上げてきた。じわりと涙がにじみそうになり、はっとあたりを見回す。
（万宵……は、いないわね。危ない危ない）
これで綺理が泣きでもしたら、どこからともなく鷹の万宵が飛んできて、大喜びで心の傷に塩をすりこんできていたに違いない。
付近に鳥影がないことにほっとしたとき、広間のほうから数人の足音が近づいてきた。離宮仕えの侍女たちだ。彼女たちは綺理の監視役でもあるため、綺理が一人で夜風にあたっているのを見るなり顔をしかめた。
「綺理姫さま、こんなところに……。勝手に出歩かれては困ります」
「人に酔ったのよ。宴の間で私が倒れても迷惑でしょう？」
綺理は欄干から身を起こすと、広間へ戻るよう促す侍女たちに首を振った。
「気分がすぐれないの。どうせもう無礼講でしょう？　部屋に戻るわ」

言って、自分の殿舎のほうへ踵をめぐらす。
そのとき、背後から声がかかった。
「ほう。この俺をほったらかして勝手に下がる気か？」
「！　朔秋！」
ぎくりと振り返ったのと同時に、乱暴に腕をつかまれる。酒の匂いをまとわりつかせた朔秋が、ぎらぎらした琥珀の瞳で綺理を見下ろしていた。
「宴はまだ続いているぞ、玉造の娘。貴様は俺の相手をするんだ」
「気分がすぐれないと言ったでしょう。あなたの顔を見ていたせいで悪酔いしたのよ」
いつもの減らず口で返すと、朔秋の頬が引きつった。
「この……。いつまでそんな口が叩けるかな。来い！」
腕を引っ張られ、綺理は引きずられるように歩き出す。桂鈴や奏珠がいればやんわりと朔秋を押しとどめてくれただろうが、離宮仕えの侍女たちはあっさりと見送る。
「離しなさいよ！……て、どこに行くつもり？」
宴の間に連れ戻されるのかと思いきや、朔秋は途中で廊下を曲がった。彼は答える代わりに口元を嗜虐的に歪め、綺理をそばの空き部屋に引きずり込んだ。
「なっ……。ちょっと、朔秋!?」
部屋の奥に突き飛ばされ、扉に閂をかけられて、綺理はぎょっとした。

そこは使われていない控えの間のようだった。かろうじて明かり取りの格子窓はあるが、窓の位置が高くて外からは見通せない。そもそも宴の最中にこんなところを通りかかる者はいない。――この部屋で何が起ころうと、気づく者はいない。

「生意気な貴様に、主人に対する態度ってものを教えてやるよ」

ねっとりした笑みを浮かべて近づいてくる朔秋に、綺理は思わず後ずさった。すぐに背中が壁につく。朔秋がその壁に手をつき、綺理は彼の両腕の間に閉じ込められる。

「……酔っているの？　主人もなにも、私とあなたの婚約はいずれ破棄されるんでしょう？」

強気で睨み返した綺理に、朔秋は笑みを深めた。その指が、綺理の頤にかかる。

「あぁ、いずれな。――だからその代わりに、寄る辺をなくした哀れな貴様をこの俺の妾妃にしてやるよ」

「……っ！」

綺理はぞくりと総毛立った。

血の気が引き、嫌な汗が背筋を伝う。そうだ。今までは大貴族玉造家の力があったから、朔秋も綺理にさほど無体な真似はできなかった。だが今はもう、綺理を守るものはないのだ。

「――願い下げだって、言ったはずよ！」

朔秋の手を強く振り払う。そのまま逃げ出そうとしたが、すばやく両手首をつかまれて壁に押し付けられた。抵抗はあっさり封じられる。絶対的な腕力差を思い知らされる。

朔秋は綺理の両手首をことさらにゆっくりと綺理の頭上に持っていくと、片手でまとめて押さえつけた。空いた右手で、なぶるように綺理の頬の輪郭をたどる。

（い……嫌……っ）

ぞわりと鳥肌が立ち、綺理は顔を背けた。だがすぐにその顎をつかまれて、仰向かされる。

「なぁ、綺理。白桜の冬惺は、貴様にとって仇になったんだろう？　もう誰に操を立てる必要もないんじゃないのか？」

嘲笑に、胸がずきりと痛んだ。

――かつて、鏡作家の最後の一人となった翔波が白桜方に転じたとき、紅楓方は自陣にいた鏡作の民を容赦なく殺したという。それが紅楓方のやり口だ。そして現在、戦禍を避けて各地の紅楓の砦に身を寄せている玉造の民は多い。綺理の意思が白桜方にあると見なされれば、この離宮にいる綺理たちだけでなく、彼らの命も危険にさらされる。

それゆえ玉造の綺理は、自分の意思が紅楓方にあると示さねばならなかった。それには白桜の冬惺を仇として憎んでいるという態度をとるのが一番自然だった。だから、どうかその嘘が冬惺の耳にまで届いてしまいませんように、と祈りながら偽りを口にしたのだ。

「……それとこれとは話が別よ。冬惺への想いが消えたからって誰でもよくなったわけじゃないし、ましてやあなたの気色悪さに適応できたわけでもないもの」

「ふん。白桜方へのくだらない未練を断ち切ったのなら、この俺に取り入っておくのが賢い判

断というものだぞ。せいぜい俺を楽しませてみろよ、綺理」

朔秋が喉を震わせて笑う。

まずい、と綺理は内心冷や汗をかいた。朔秋が綺理の減らず口を意に介さないのは、自分の優位を確信しているときだ。こちらが弱いところを見せれば、ますます反撃の隙がなくなる。

（怯えていると気づかれたら、追い詰められるだけ）

そう自分に言い聞かせて虚勢を保とうとしたが、朔秋の指に唇をなぞられた瞬間びくりと体が震えた。その反応に目をつけた朔秋が、粘りつくような手つきで綺理の唇から紅をぬぐう。

「なんだ？　貴様も、唇を奪われて『初めてだったのに！』とか泣きわめくクチか？」

顎を捕らえられたまま、朔秋の残忍な顔が近づいてくる。

「やっ……」

自分の瞳が泣きそうに揺れたのがわかった。初めての口づけを冬惺としていたのがまだ救いかもしれないが、嫌なものは嫌だ。こんな風に押さえつけられて、大嫌いな相手となんて。

（やだ……っ、――冬惺！）

ぎゅっと目をつぶる。

酒の香の混じった吐息が唇にかかった。

――まさにそのとき。

「朔秋殿下？　こちらにおられますか？」

穏やかな声と共に、扉を叩く音がした。

（！　この声……）

「――空雛か」

朔秋が身を離す気配がする。おそるおそる目を開けると、朔秋は背後の扉を振り返っていた。そちらからまた丁寧な声がかかる。

「お呼び立てしてすみません。雪で到着が遅れていた陶作卿が、たった今宴席に参りまして。是非とも殿下に新年のご挨拶をしたいとのことなので、一旦広間にお戻り願えますか」

「……仕方ないな。今行く」

朔秋は扉越しに応じると、綺理を解放した。部屋を出て行き、廊下にいる空雛と二言三言交わしてから歩み去る。

そしてその足音が遠ざかった頃、空雛が扉口から顔をのぞかせた。布を巻いて細くまとめた褐色の髪の房が、尻尾のように揺れる。

「姫君。……間に合いましたか？」

綺理がうなずくと、空雛は「よかったです」と息をついた。彼は左目の下に走った傷痕をわずかに引きつらせ、やわらかい笑みを浮かべる。

いかにも人畜無害そうなその笑顔に、綺理は不覚にもほっとしていた。この将軍が油断のならない悪人であることは重々承知しているが、助けられたのは確かだ。安堵のあまり力が抜け

そうになったが、空騅が綺理のために扉を押さえているのを見て部屋を出る。
「……ありがとうございました、空騅将軍」
「礼には及びませんよ。急いで捜しに来たのはあなたのことが気になっていたからですけど、呼び立てては本当ですから」
空騅はさらりと言った。綺理が言葉の意味をはかりかねている間に、彼は廊下の向こうにいた侍女を手振りで呼び寄せる。
「姫君、今夜はもう部屋に戻られたほうがいい。本当は殿舎までお送りしたいところですが、私もすぐ宴席に戻らねばなりませんので。侍女を付き添わせましょう」
「……どうも、ご親切に」
親切ごかしにしても騙されませんからね、と綺理は胸中で唱えた。そうやって警戒心を維持しなければうっかり「いい人かも」と思ってしまいそうなのが、空騅の恐ろしいところだ。
やってきた侍女に伴われて、綺理は今度こそ自分の殿舎へと歩き出す。
途中、視線を感じてちらと振り返ると、空騅がじっとこちらを見つめていた。
（……？）
その瞳に言い知れぬ熱が宿っていたような気がして、綺理は内心首を傾げた。
どこかで、鷹の羽音が聞こえた気がした。

――陶作家の当主が宴席に参じたのは、綺理が広間を離れた直後のことだ。朔秋は綺理を追う前に既に彼の挨拶を受けている。

空騅がわざと見え透いた嘘で朔秋を呼び立てたのは、彼が主君の戯れを諫めに来たという暗黙の報せだ。同時に、綺理の前で諫言をされては恰好がつかなくなる朔秋への配慮でもある。

「――さて、と」

綺理の姿が完全に見えなくなると、空騅は廊下の反対側に向かった。

角を曲がると、むすっとした顔の朔秋が腕を組んで柱にもたれている。

「殿下。前にも申し上げましたが、ああいったお戯れは――」

「うるさいぞ空騅。おまえは俺の守り役か！」

朔秋は眉をはね上げたが、おっとりと苦笑する空騅に毒気を抜かれたのだろう。ややあって、言い訳をするように声を静めた。

「……脅かしてやろうとしただけだ。今手出しをすれば婚約破棄が面倒になることくらい、おまえに言われなくてもわかっている」

「婚約を破棄したあとでも、ですよ。彼女は白桜王家の血を引く姫でもありますからね。妾妃にするには血筋が良すぎる。正妃をお迎えして世継ぎをもうけられる前に、彼女のような者を妾妃にするのは、先々のことを考えるとよろしくありません」

「だから世継ぎができるまでは、と？　いつの話になるんだ、それは」
「だからこそですよ。正妃との間にいつ世継ぎができるともしれなければ、万が一綺理姫が殿下の御子を宿した場合、――大きな火種になる」
低い声で言った空騅に、朔秋は「……ふん」と応じて大股で歩き出した。
その後ろ姿を見送りながら、空騅はひそやかに笑む。これだけ釘を刺しておけば当分は問題ないだろう。なんだかんだで空騅は朔秋の信頼を得ているし、朔秋も馬鹿は馬鹿でもこちらの言うことが理解できないほどの馬鹿ではない。
やがて朔秋が広間に消えると、頭上で羽音がした。
屋根の上にいたらしい鷹が、空騅の手元の欄干に舞い降りてくる。
「化け物か。今度はなにを取ってきた？」
空騅が目を眇めると、鷹に憑りついている万宵がくつくつと笑った。くわえていた細長い物をひゅっと放って寄越す。
「君への応援だよ、鷹将軍。使い古された手だがね」
空騅はぱしんと受け取ってから、それが見覚えのあるかんざしだと気づいた。黒玉が垂れ下がる上品な朧銀のかんざしを月にかざして、薄紫の瞳を細める。
「……なるほど」

綺理が黒玉のかんざしがなくなっていることに気づいたのは、自室に戻って桂鈴に指摘されたときだった。

朔秋と争ったときになにかの拍子で落としたのだろう。しかし探しに行こうにも、空き部屋でかんざしを落とす羽目になったいきさつを正殿の家人に勘ぐられては面倒である。

さてどうしたものか——と悩んでいたところ、その翌日、かんざしはある人物の手によって綺理のもとに届けられた。

「……わざわざご足労いただかなくても、侍女に言付けてくだされればよかったのに」

綺理は手ずから渡されたかんざしに戸惑いながら、視線を上げた。

目の前では空雛が穏やかに微笑んでいる。

「つれないですね、姫君。私はこれを見つけたとき本当に嬉しかったんですよ。おかげであなたに会いにくる口実ができましたから」

二人がいるのは庭に面した露台だ。空雛は、今の状況下で若い独身男性が綺理を訪問すれば悪目立ちするからと、表向きは「鷹を庭で遊ばせる途中、落とし物を届けに立ち寄った」とい

う形を取っていた。少し離れたところでは、鷹の万宵が新雪に足跡をつけて遊んでいる。
（口実、ね。空騅将軍がどんな目的で会いにきたかわかったものじゃないけど……どうせならこの機会に探りを入れさせてもらうわ）
綺理は気を引き締めると、そ知らぬ顔で万宵のほうに目をやった。
「またご冗談を。私をからかうより、ご自分の鷹にかまってあげたほうがいいんじゃないですか？　将軍が出陣されている間あの鷹はずっとお留守番でしたし、拗ねてしまいますよ？」
空騅は自分の鷹に大淵妖の魂が憑いていることを知っているのか、いないのか。それを確かめようと鎌をかけると、空騅は今初めて気づいたようにまばたきした。
「え？　ああ……そういえば、しばらくあれを連れていませんでしたね」
一瞬、彼の薄紫の瞳が焦点を失ったようにぼやける。
（鷹がそばにいない違和感に気づいていなかった？　暗示をかけられているの？）
綺理がそれを見極める前に、空騅は元のどこまで本気かつかめない調子に戻る。
「心配しなくてもあの鷹は、私があなたと仲良くしていたくらいでは妬いたりしませんよ」
「あの、私と将軍が仲良くしていたことってありましたっけ……？」
昨夜はともかく、基本的に騙されたり戦ったり脅されたり腹の探りあいをしたり、ということばかりな気がする。それとも空騅は、綺理が本当に紅楓方につく道を選んだのだと信じて、今後は味方として対応することにしたのだろうか。

（……ううん。むしろ疑っていて、それで私の本心を確かめにきたというほうがあり得るわ）

「それに総大将ともなればお忙しいんじゃありませんか？　かんざしを届けてくださったのはありがたいですが、落とし物一つであまりお時間をとらせてしまっては申し訳ないです」

遠まわしに帰るよう促せば、彼はここに来た本来の用件に移るはずだ。そうでなくても、戦況に関する情報をぽろりと落としてくれればしめたものである。

そっけないそぶりの綺理に、空騅は苦笑した。

「姫君とお会いする貴重な時間を惜しむほど多忙ではないですよ。北部の制圧はほぼ完了していますし、当分は雪で休戦。それに今さら策を講じたって、白桜王家と琅公国の同盟にひびを入れるのはもう無理そうですからね」

「琅公国……」

琅の援軍が玉造軍を壊滅させたときの光景が脳裏に蘇り、綺理は思わずつぶやいた。

空騅がうなずき、続ける。

「ええ。白桜の冬惶と琅公国の明花公女の縁談も、また持ち上がっているらしいです。いや、琅公国側がその婚姻を条件に援軍を出したのだったかな？」

（――っ！）

心臓が、はねた。

あくまで噂ですが、と空騅が付け加えたが、動揺はそう簡単にはおさまらない。胸に走った

痛みは消えない。頭がぐらぐらする。

（冬惺が、明花さまと……？）

――父が謀反を起こしたあのとき、綺理と冬惺の縁談は完全に消滅した。綺理は永遠に、冬惺にとってふさわしい結婚相手ではなくなった。そんなことはとうにわかっていた。

けれど、冬惺がいずれ別の女性と結婚するということまでは考えていなかったのだ。単に考えたくなかっただけかもしれない。綺理自身、朔秋と婚約させられた身であるというのに。

胸が苦しい。欄干にのせた両手が冷える。

綺理の顔色の悪さを、琅の援軍と聞いて玉造軍の敗報を思い出したせいだと考えたのか。隣に立つ空騅は、うつむいた綺理から庭のほうに向き直り、話題を鳥に変えた。

真冬にこの地域で見られる鳥のこと。この離宮で飼われている鳩や愛玩用の小鳥のこと――。他愛のない話をいくつか挟んで、綺理がどうにか感傷を封じ込めた頃、ふと空騅が綺理の左手首に目をやった。

「姫君。その痣は……朔秋殿下ですか？」

問われて、綺理は左手を持ち上げた。袖口が少しまくれ、婚約の証にはめられた二重の銀環と、その下にぐるりとついた青や紫の痣があらわになる。

「……ええ、まあ。あの若様がしょっちゅう銀環を引っ張るもので」

綺理は苦々しく答えたが、実を言うとこの痣は全部が全部本物というわけではない。なまじ

痣が消えると、朔秋が強いて痣をつけ直そうとしてくるので、染料で描いているのである。変装術の達人たる奏珠の手で描かれた痣は、さすがの空雛でも偽物と見破るのは難しいはずだ。

綺理が袖を戻して痣を隠すと、空雛がためらいがちに問いを重ねてきた。

「昨夜のようなことは……？」

「あそこまで絡んできたのは昨日が初めてです。朔秋が私の部屋に押しかけてくるだけの間は、桂鈴や『梨英』……私の侍女たちが機転を利かせてくれましたから」

「……そうですか」

沈黙が下りた。向こうで万宵がばさばさと枝に飛び乗る音がする。

あんまり空雛が黙っているので、やがて綺理はもう一度帰りを促してみるべきかと思いはじめた。そして「あの……」と声をかけようとした、そのときだ。

不意に、空雛が真剣なまなざしでこちらを見た。

「姫君。――私に守られてみませんか？」

焦がれるような熱が、なにかを強く求めるような光が、その瞳の奥にあった。綺理はわずかにたじろぎ、戸惑いを口にする。

「……それは、どういう意味ですか？」

「私の妻になってくれませんかと、お願いしています」

その言葉に、冗談の響きは一切なかった。

大きく目を見開いた綺理に、空騅は真摯な声音で続ける。
「もちろん殿下との婚約破棄が先になりますし、返事はすぐでなくてもけっこうです。ですが私と結婚すれば、殿下も二度と姫君に手出しできなくなる。――それに私は姫君のお気持ちを知っていますから。あなたが彼を想っている間は、ずっと形だけの夫婦でかまいません」
「彼、って……」
「白桜の冬惺のことが、まだ好きなのでしょう？　私の前では演技しなくてけっこうですよ」
（――っ）
気持ちを見抜かれていたことに、綺理はびくりと震えた。思わず身を引く。鼓動が速まる。混乱した頭で空騅の台詞を反芻し、ようやっと言葉を絞り出す。
「……なんで、ですか？」
「それは求婚の理由を聞いているんですか？　それともあなたの心が白桜方にあると知りながら、私一人の胸に納めている理由ですか？　どちらも同じ。あなたを守りたいからです」
「だって……だってそれは、私に都合が良すぎます！」
綺理が混乱しきった声を出すと、空騅が微笑んだ。
彼は綺理が身を引いた分だけ歩を進め、ゆっくりと言う。
「以前私は、あなたに特別な興味を寄せていると言いました。今、あなたを守りたいとお伝えしました。――それ以上の説明が、まだ必要ですか？」

（！）

その瞬間、綺理は空雛の『理由』に気がついた。ここにきて急に閃いたその考えは、今までにも一つの可能性として考えに入れておいてしかるべきものだった。

彼の瞳に宿る熱の意味も、今ならわかる。

綺理は薄紫の瞳を見返して、それを確かめる言葉を口にした。

「将軍はあの鷹を、名前で呼ばないんですね」

「――？」

まったく脈絡のない台詞を突然投げかけられれば、人は思わずその意味を考える。

空雛も面食らったようにまばたきながら、とっさに考えたはずだ。考えて――なにかに気づいたように瞳を揺らした。

（やっぱり）

綺理にはそれだけで十分だった。

彼は気づいた。頭のよい彼は、綺理の言葉が意味することを正確に察し、それゆえに不意打ちで核心に踏み込まれたことに動揺したのだ。

「空雛将軍は、知っているんですね」

――かつて鏡作の地で会ったとき、空騅は自分の鷹を『空羽』という名で呼んでいた。人に話すときも『私の相棒』『彼女』とごく親しげな呼称を用い、決して『私の鷹』『あの鷹』『あれ』などといったぞんざいな呼び方をすることはなかった。

空騅は、自分の鷹に万宵が憑いていることを知っている。だからはっきりと呼び分けている。彼は万宵に操られているわけでも、暗示をかけられているわけでもないのだ。

そして彼が万宵と手を組んでいるなら、求婚の理由もわかる。

綺理は確信を込めて空騅を見すえた。

「あなたは私の利用価値を、教えられたんですね」

断言に、空騅がふっと笑う。

彼は今の今までまとっていた穏やかな雰囲気を消し去り、左目の下の傷を凶悪に見せる凄絶な笑みを浮かべた。

「ええ、そうですよ。――世にも稀な降神術の使い手、王妃になるさだめの姫君」

露台に立つ二人の間で、空気はにわかに緊張をはらんでいた。

綺理は手のひらに汗がにじむのを感じながら、忙しく頭を働かせる。

――万宵がどの段階で綺理の力のことを教えたかはわからない。だがとにかく空騅は、綺理が降神術の使い手であると知りながら、それを秘して朔秋から綺理を横取りしようとした。

ならば空騅の瞳にあったのは、野心の光だ。

「だからあなたは私を手に入れようとしたんですね。金蘭王家の血を引かずとも、降神術の使い手を妻にすれば王位を主張できるから。――狙いは、瑛国の玉座ですか」

空騅は肯定の代わりに、いたずらが見つかった少年のように肩をすくめた。

そこに羽音がして、くすくす笑う声が割って入る。

「残念だったね、鷹将軍。せっかく私が応援してあげたのに」

近くの石灯籠に舞い降りた万宵を、綺理はじろりと睨んだ。

「そういえば昨夜も、将軍はやけにいいときに助けに来てくださいましたよね」

今にして思えば、あれも万宵が明かり取りの窓から中の様子をうかがっていたのだろう。もっとも効果的な間合いで空騅が助けに入り、後々綺理を手懐けやすくするために。

空騅は「ばれましたか」とあっさり白状し、余裕を含んだ声で言う。

「で、そうと気づいたところで姫君はどうします？　この私が化け物を連れていることや、いずれ朔秋殿下を排除して王位を簒奪しようと企んでいることを告発して、私を追い落としてみますか？　それともそれを材料に私を脅迫してみます？」

「……いいえ。そんなことをしても意味はありませんから」

いくら綺理が空騅の鷹に大淵妖が憑いていると主張しても、信用されるとは思えない。魂だけで地上に来ている万宵は、普通の淵妖と違って乾ノ術では依代から落とせないし、いざとな



れば別の依代に移ることもできるからだ。

それに空騅の叛意を告発しようと思えば、自分が降神術を使えることを明かさなければならない。それでは己の首を絞めるだけである。

だから。

「――それよりも、取り引きをしませんか？」

「取り引き？」

面白がるような表情になった空騅に、綺理は一つうなずく。

「はい。どうせ将軍が簒奪に乗り出すとしたら、白桜方を破って紅楓王家に天下を取らせてからですよね。だったら、もしそうなった場合は私は将軍に協力します。その代わり――」

「代償として白桜王家の者の助命を望みますか？　それでは本末転倒ですよ。金蘭王家の流れを汲む王位継承者が残っていたら、王族ですらない私が王位に即くのは難しくなる。それにいくら私が総大将でも、後々禍根となるのが明白な白桜の王族を生かしておくように、などと周りを説得するのは無理ですし」

すかさず切り返されたが、その反論は予想内。綺理も間髪いれずに言い返す。

「白桜の冬惺に限っては、王位継承権はないも同然です。出生に疑惑があり乾ノ術を使えない彼なら、生かしておいても障害にはなりえないでしょう。――白桜の冬惺と、鏡作の翔波。その二人の生存が、私が将来あなたに協力する最低条件です。そのどちらが欠けても、私は決し

て将軍に協力しません」

実際には片方が死んでも、もう片方を人質に取られてしまえば逆らえないだろう。しかしもし片方が死んで、もう片方が逃げのびるという事態になれば、空騅はそちらを捕らえるまでは綺理に言うことをきかせられない。確実に綺理の協力を得たいなら、空騅は今後戦場で二人を死なせないよう努めるしかない。

綺理は挑むように空騅を見つめ、じりじりと返答を待つ。

睨み合いの果てに、空騅が口元を笑みの形に歪めた。

「――なるほど。私のほうばかり前払いでは公平な取り引きとは言いがたいですが、心に留めておきましょう」

（……よ、よかった……）

言質、というには弱いが、少なくとも駆け引きは綺理優位のまま終わった。冬惺の縁談の噂と、突然の求婚に調子を乱された後にしては、上出来すぎる結果だ。それに空騅が綺理の存在を必要としている以上、今後の綺理の身の安全も、彼が勝手に確保してくれるだろう。

内心どっと安堵した綺理に、空騅は「それにしてもわからないんですが」と首を傾げた。

「姫君が白桜の若将軍を好いているのは知っていますが……そんなに震えてまで私と張り合って彼を助けようとするその力は、いったいどこから出てくるのでしょうね」

膝がかすかに震えていたことを指摘され、綺理はかっと赤くなった。小娘の精一杯の虚勢な

ど見抜かれていたらしい。

「……ど、どこと言われましても。だいたい私が出した条件には、翔波も入って――」

「白桜の若将軍は、あなたの家を滅ぼし、あなたの父君を討つために、別の女性との結婚を決めたかもしれないんですよ？　そんな相手を少しでも憎いとは思わないんですか？　憎まないまでも……いくら想っても甲斐がないとは思わないんですか？」

（――――）

石灯籠の上で高みの見物をしていた万宵が、そばの欄干にばさりと飛び移ってきた。綺理は万宵が聞いているのを意識しながら、ぽつぽつと答える。

「もちろん戦のことや……お父さまのことは悲しいですよ。でも悲しむことと憎むことは別だと思うんです。それと同じように、きっと、想うことと見返りを求めることも別で……。手が届かない人だから想っていても意味がない、というのは違うと思います。そりゃ私も手が届きそうだったときはいろいろ欲張っていましたけど、今は……冬惺への想いで強くなれる気がして、それだけで、私は……」

言いながら、つきりと胸が痛んだ。

（……違う。ただ想うだけでいいとか、見返りは期待してないなんて嘘）

『――必ずおまえを、さらいに行く！』

彼のくれたあの約束に、自分はずっとすがっている。敵陣の中でも絶望せずにいられるのは、

あの約束があるからだ。そして本当は心の奥底で、あの約束に期待している。

あの約束に、どんな想いが込められていたのか。大事な従妹、大事な幼なじみ――。それ以上の感情があったのではないかと、期待している。たとえ彼が別の女性と結婚したとしても、自分が彼と結ばれることは決してなくとも、彼が本当に好きなのはこの自分なのではないかと――。

（……って、う……ぅわわわ――――っ！　なし！　なし！　今のなし！　ごめんなさい、調子に乗りました！　思い込みの激しい自惚れ女でごめんなさい！）

自分の考えていたことをはっきり悟った瞬間、綺理は恥ずかしさにのたうち回りたくなった。ばっと欄干に突っ伏す。冷気のしみこんだ木とは対照的に、顔や首が燃え出しそうなほど熱い。誰に謝っているのかよくわからないまま、大混乱の脳内で「ごめんなさいいいい――！」と絶叫していると、横から髪をくいくいと引っ張られた。

「あの……姫君？」

困惑した声は空騅で、嘴で髪を引っ張っているのは万宵だ。綺理が急に突っ伏したので、泣き出したと勘違いしたのだろう。とりあえず万宵はそう思って綺理をいじめようとしているに違いないので、綺理はがばっと顔を上げ、わざと鷹を無視して言う。

「空騅将軍こそ、どうして王位を望むんですか？　そりゃあの朔秋の臣下でいるのは嫌かもしれませんけど、紅楓方の総大将といったら護国大将軍相当の地位でしょう。鷹居家の歴代当主

の中でも最高位ですし……そこまで出世してもまだ満足できないんですか？」

半ば仕返しのつもりでずばずば問うと、空騅はちょっと目を瞠った。彼は革手袋をはめた左拳に鷹の万宵をとまらせ、鷹と目の高さを合わせるように拳を上げる。

「翼を持って生まれたからには、どこまで高く飛べるか試したい。野心なんてそんなものですよ。――露台に長居をしては姫君のお体が冷えますから、そろそろお暇いたしましょう」

空騅たちが去ったあと、綺理が部屋に入ると、桂鈴が茶の用意をして主を待っていた。熱い茶をすすって冷えた体を温める綺理に、桂鈴が卓に茶菓子を並べながら言う。

「姫さま。ずいぶん話し込んでいらっしゃいましたけれど、鷹匠の将軍はいったいどのようなお話を？　なにか失礼なことでも言われておりませんわよね？」

彼女は空騅が綺理に妙な真似をしないか、遠くから露台の様子をうかがっていたらしい。

綺理はとりあえずかんざしの件を口にしてから、どこまで話してよいものかと迷った。この部屋には自分と桂鈴と奏珠しかいないが、この二人にも明かせないことを省くと――。

「ええと、鳥の話と、白桜方と琅の同盟の話と、あと……求婚された」

「――――きゅ!?」

桂鈴が頓狂な声を上げ、縫い物をしていた奏珠もこちらを振り返った。

「……それは、妙な話ですね」
「あ、もちろん私と朔秋の婚約が破棄されてからの話だし、返事もしていないけど……」
確かに降神術の件を知らない者には、空騅がなぜ綺理に求婚したか皆目見当がつかないだろう。綺理はそう考えたが、奏珠の言う「妙」とはそういうことではないようだった。
「最近、紅楓の朔秋の周囲で耳にしたことですが……。空騅将軍は綺理さまと紅楓の朔秋の婚約を推し進める際、『白桜の血を引く姫を王妃にすれば、分かたれた二王家が再び手を取り合って内乱を終結させる、という大義名分も立つ』と皆を説得していたらしいです。ですから理由をつけて婚約破棄するにしても、紅楓方が勝利して白桜方の残存勢力をある程度掃討してからか、より政治的価値のある王妃候補が現れてからだと思っていました」
「あ……」
綺理はまたたいた。
確かにそうだ。玉造家の当主位は慣習法により血族の男子しか継げないが、王家は違う。王家は女系相続が可能だし、男性王族が摂政につけば女王も認められるため、女子にも継承権がある。――継承権の順位が低いので忘れがちだが、先代白桜家当主の妹を母に持つ綺理は、立派な王位継承権保有者だ。玉造の姫としての利用価値は薄れても、白桜の姫としての利用価値はまだある。
（それなのに空騅将軍は私に求婚した。まるで、婚約破棄が近いうちに行われるかのような口

ぶりで……。奏珠の言うとおり、朔秋の新しい王妃候補が決まったの？　政略結婚でどこかの勢力と手を結ぼうとしているとか、それとも……、――っ！）

その途端脳裏に閃いたある考えに、綺理は凍りついた。そんな馬鹿な話、と打ち消そうとしたが、考えれば考えるほどありえない話ではないような気がしてくる。

（推測、というか、まだ一つの可能性に過ぎないけど……でも……）

「――奏珠。今調べていることを中断して、最優先で探ってほしいことがあるの」

綺理は震える手で茶の杯を卓に置き、間者の少年を見た。

「もし私の考えていることが正しかったら……なんとかして詳細を調べて、王都に情報を送らないといけないわ」

二章　王都を発つ者たちよ

深更――。

ろうそくの火が一つ灯るばかりの暗い寝室で、綺理は奏珠の報告を聞いていた。

「……それじゃ、紅楓方は本当にそんな計画を立てているのね」

「はい。空雛将軍は、夏憬殿下たちが白桜方に戻ることも想定していたようですね」

「でも決行日がこんなに近いなんて……。急いで冬惺たちに――王都に伝えられる？」

寝台の上の綺理が焦燥に眉をくもらせると、そばに跪く奏珠はぐっと顎を引いた。

「幸い今夜は月の入りが早く、闇が長い。夜陰に乗じて、鏡作の里の者が定期連絡を取りにくる予定の日です。里の者が至急紅楓の勢力圏を抜け、南へ情報を送れれば、あるいは――」

「――間に合う、かもしれない？」

「祈っていてください」

奏珠はすっと立ち上がった。紺装束に身を包んだ彼の姿は、一歩下がれば闇に溶ける。

そしてふっとろうそくの炎が揺らいだかと思うと、寝室から彼の気配は失せていた。

どこかの屋敷の庭で、気の早い鶏の鳴く声がする。
翔波はそれを聞くともなしに聞きながら、南向きの窓に目をやった。
「――が、もっと遅ければ、お見送りに出られたのにな」
すると覆面頭巾の下のそのつぶやきを聞きつけたのか、向かいに座る男が品悪く笑った。
「けけっ。いい娘が今朝早く輪瑛から出て行っちまうのかい、『桐の盾』の旦那？　最近多いからな」
男もまた覆面で顔を隠しており、白い面布の隅には黒いねずみの紋が刺繍されている。昨年の夏、翔波が薬師の会合で伝手を得た、薬師兼情報屋『黒ねずみ』である。
この情報屋は王都輪瑛のことなら市井の噂から闇取引の情報にまで通じているので、翔波は王都に戻ってからたびたび彼と接触を持っていた。今もいわくつきの骨董品の鑑定と引き換えに、二、三の情報を得たところである。
『いい娘』と言いながら小指を立ててみせた情報屋に、翔波は半眼になった。
「そんなんじゃないよ。……主人の姪の姫君ってだけ」
「おお、やっぱり女じゃねえか。貴族のお姫ぃさん相手に身分違いの恋ってやつか？　へっへ、

なんならいつかのために媚薬でも買っとくかい？　それともあっちが元気になる薬――」

翔波がぎろりと睨むと、男は冗談ですまない気配を察して黙った。

下衆なからかいを眼光で封じてから、翔波は男の言葉を聞きとがめる。

「……って、輪瑛を離れるっていうのはそんなによくある話なのかい？」

「ん？　ああ。護国大将軍閣下が玉造の里から生還したときにゃあ、南に逃げてたやつらも一斉に戻ってきたんだがな。この前の戦では、玉造公の軍が王都のけっこう近くまで迫ってたからよ。また臆病風に吹かれて逃げてくやつらもいるにはいるぜ。近いうちに王女殿下が南にお移りするらしいってぇ噂もあるしな」

翔波は鑑定道具を片付けていた手を、一瞬止めた。

春怜王の一人娘、千紗王女が南に移るというのは本当だ。

王位継承権保有者が一所に固まっていたら万一のときに総倒れになりかねないので、危険を分散させるためにも千紗をひそかに南の砦に移すことになったのである。

ただし噂は一つ間違っている。

千紗が南へと発ったのは、今日の未明――ほんの半刻ほど前のことだ。

（私だけよそに行きたくないって、ずいぶん泣いていらしたからな……。せめて寂しい見送りにならないように、僕一人分でも見送りの頭数を増やしてさしあげたかったのに）

聡明で愛らしい八歳の王女殿下の泣き顔を思い出していると、情報屋の男が「まぁ俺には関

係のねえ話だ」と気のない調子で言った。

「たとえ紅楓軍が王都に来たところで、俺はいつも通り商売をするだけだからよ。薬と情報を欲しがらねえ軍はねえからな」

「……君、白桜方と紅楓方のどっちなんだよ」

眉をひそめた翔波に、男はいい質問をしてくれたとばかりに片目をつぶる。

「俺は『黒ねずみ』だぜ、旦那。何色にも染まらねえよ」

なるほど、と翔波はつい納得してしまったが、そのあと男が「あ、これ俺の決め台詞な。なぁ、恰好よくねえ？　恰好よくねえ？」としつこく言ってきたのが、凄まじく鬱陶しかった。

情報屋の裏店を出たとき、まだ夜は明けていなかった。

曇天の空は暗く、街路に人影はない。翔波は情報屋と対面するとき用の紺の覆面頭巾を解くと、長い一枚布になったそれを襟巻きのように巻き、乗ってきた馬にまたがった。

そして乾いた白砂の路地を、並足で王宮に向かっていたときだ。

「翔波さま」

抑えた声が、頭上からかかった。

翔波が馬を立ち止まらせるや否や、紺装束をまとった人影がそばに降り立つ。隠密活動に長けた鏡作の里人――翔波付きの連絡役を務める、佐鏡の沙良だ。だがいくら人通りがないとは

いえ、こんな往来で報告に及ぶとはよほどの緊急事態である。
ひやりとした翔波に、沙良がいつになく焦った様子で問うてくる。
「翔波さま。千紗殿下はもう出立されてしまいましたか？」
（!?）
どくん、と鼓動が大きく打った。翔波は強張った顔で顎を引く。
「半刻と少し前に、南海門から。――なにがあったんだい？」
「奏珠からの情報です。紅楓方が――」
早口で告げられた内容に、翔波は顔面から血の気が引くのを感じた。今まさに王都に持ち込まれたばかりの情報で、沙良は王宮へ走る途上、運よくその手前で翔波を発見したらしい。
「沙良は急いで冬惺公閣下に報せて！　僕の名前を出せばじかに取り次いでもらえるから！――僕は千紗さまを助けに行く！」
翔波はすばやく馬首を返し、馬の腹を蹴った。
馬を駆りながら脳裏をめぐるのは、たった今聞かされた情報と、千紗の顔。
（くそっ……。まさか出立の情報が漏れて、千紗さまが狙われているなんて！）
王女一行は、次の中継地点で十分な数の護衛兵と合流することにはなっているが、出立時は人目を引かないようにわずかな随身しか連れていない。そこを襲撃されれば――。
（――頼むから間に合ってくれ！　千紗さま……っ！）

夜明けを待つ空の下、翔波は砂塵を蹴立てて大路を南へと向かっていった。

（紅楓方は、千紗姫が王都を離れるときを狙って、千紗姫をさらうつもりでいる……）

遠い北の離宮で、綺理は夜明けの迫る空を不安な思いで見上げていた。

――紅楓方が朔秋の王妃候補として目をつけたのは、千紗王女だ。

綺理がそう気づいたのは、紅楓方が『婚姻によって二王家を統合し、内乱を終結させる』という大義名分を掲げようとしている、と聞いたからだった。

もしその目的を貫くつもりなら、乾ノ術を使えないことになっている傍系の姫よりも、直系王女であり王位継承権第一位の千紗を王妃に望むのが順当である。

それでも最初は、まさか八歳の子どもを、と自分の思いつきを一笑に付そうとした。だが考えてみれば、千紗と朔秋の年の差は十一歳。綺理と空騅の年の差と同じである。将来的には決してありえない年齢差ではないし、幼ければ逆にこれから紅楓方に洗脳する余地もあろうというものだ。

（世継ぎがなかなか望めないのが最大の難だけど、空騅将軍にとっては、むしろそれは都合がいいんだわ。簒奪を企んでいる将軍にしてみれば、紅楓の世継ぎなんて生まれないにこしたこ

とはないもの。――それに今千紗姫が行方不明になれば、白桜の陣営に亀裂を入れられる）

綺理は組み紐のお守りを、胸元でぎゅっと握った。

――空騅は夏憬の寝返りを予想して、あらかじめ夏憬の配下に自分の息のかかった者たちを送り込んでいたらしい。その者たちが情報を流したから、紅楓方は白桜王家が秘していた千紗の南行きについて、出立の日時から行き先、経路、護衛の規模に至るまでつかんでいたのだ。

そして夏憬の配下の者が千紗の失踪にかかわっていたとなれば、夏憬は疑惑を免れないし、彼が処罰されれば白桜の陣営内に動揺が広がる。その上、寝返り者の夏憬が寛容に迎え入れられたことに勇気付けられて、白桜方へ走ることを考えていた北部の小領主たちも、「やはり彼は寝返り者ゆえに、冤罪で追い落とされたのでは」と不安になるかもしれない。

次々にわいてくる不吉な予想に寒気を覚え、綺理は夜着の襟元をかき合わせた。

（最悪、私たちが送った情報で夏憬殿下の疑いは晴れるかもしれない。だけど情報が届くのが遅ければ、千紗姫は……。千紗姫、どうか無事で――！）

王宮の裏門に見送りに来た父王に「行きたくない」とさんざん駄々を言って困らせ、大好きな下の叔父にさえふくれっ面を見せて全身で不満を表現していた千紗だが、出発して少しする

と、いつにない早起きのせいで目がとろとろしてきた。

南海道はよく整備されているし、幼い王女の体力に合わせてゆっくり進んでいるので、屋形車でも振動がほとんどない。そのため千紗は中で横になり、うつらうつらしていた。

そうして、王都を発ってからどのくらい過ぎた頃だったか。

夢うつつに、せわしない蹄の音が聞こえてきた。

蹄の音は一行の後方からぐんぐん近づいてきて、すぐ近くで止まった。ほどなくして屋形車も止まり、外で誰かがなにかを大声で話しているのが耳に入ってきた。ひどく焦っているようなその声を、千紗はどこかで聞いたことがあるような気がした。

やがて物見窓の開く音がして、随身が同乗の侍女に説明しているのが断片的に聞こえてきた。

「……王都から急使が……この道は危険だと……」

（危険？）

意識がふっと覚醒する。再び動きはじめた屋形車はすぐに方向を大きく変え、がたがたと揺れる道へ入っていった。

千紗は起き上がると、たった今振動で目が覚めた、というそぶりで目をこする。

「……どうしたの？　急に道が変わっちゃったみたいだけど……」

「あ……お起こししてしまいましたか、千紗さま。予定していた道に少し障りが出てしまって、それで横道を行くことになっただけです。大丈夫、心配することはありませんから」

貼り付けたような笑顔で言う侍女に、千紗はむっと顔をしかめた。――こういう場合、その言葉が「本当は心配なことがあるけれど黙っている」の意味になるということに、大人たちは気づいているのだろうか？

（翔波だったら、嘘を言わないで教えてくれるのに）

「……さっき、『王都から急使が』って聞こえたけど」

「え？　ええ。ちょっとした連絡ごとです。気になさることはありませんよ」

「急使ってどんな方だった？　私の知ってる人？　もう王都に戻ってしまったの？」

「あ、いえ、護衛に加わってくださったようです。私はお顔を見ていませんが」

侍女は自分が口を滑らせたことに気づいていないようだったが、神経を尖らせていた千紗は気づいた。――護衛が一人でも多いほうがよい状況になっているのだ。

「気になるのなら、あとでお名前を確認いたしますけれど……ええと、そうそう」

屋形車は林の中の道を行っているのか、枝葉のざわめく音がして上下にひどく揺れる。侍女は舌を噛みそうになったのか口をつぐみ、ずいぶんたって振動がおさまってから続けた。

「……確か、その急使の方は、王弟殿下のしるしをお持ちだったとか」

「え？　それって――」

千紗が問いただそうと身を乗り出した、そのときだった。

「うわっ、なにを――!?」

唐突に外で悲鳴が上がった。がたん、とひときわ激しい衝撃がして、屋形車が傾いて止まる。次いで怒号と、激しく争う物音とが、屋形車を取り巻いた。

「な……なに？——きゃあっ！」

屋形車の戸が乱暴に引き開けられ、武官装束の男がぬっと入ってきた。

男は、千紗に覆いかぶさろうとした侍女を突き飛ばし、千紗に手をかける。

「やっ、は、離して！」

千紗は小さな手足を精一杯ばたつかせたが、胴に回った太い腕はびくともしない。物見窓の枠をつかんでしがみつこうとしても甲斐なく、屋形車から引きずり出される。

外は、薄くもやがかかった林の中だった。あたりは薄暗く、夜が明けているのかいないのかさえ定かでない。

屋形車のそばでは、数人の随身が倒れてうめいていた。その周囲では他の随身たちが、襲撃者と思しき者たちと斬り結んでおり、千紗の悲鳴を聞いてこちらを振り返る。

「おのれ、王女殿下を！」

「貴様、偽の急使か……！」

彼らが口々に叫ぶのを聞いて、千紗は震えながら目を動かした。自分を片腕で抱え上げている男を見上げ、それが先日の新年祭で叔父の夏憬と共にいた男だと知る。この男が急使のふりをして、千紗たちを街道から離れた林の中におびき寄せた——ということらしい。

男は仲間に合図するように片腕を振り、千紗を抱えたまま馬のほうへ向かった。
「いやっ、助けて！」
「行かせるか！　殿下を返せ！」
随身たちが慌てて追いすがろうとする。だがいくら彼らが厳選された手練とはいえ、襲撃者の一味のほうが圧倒的に数が多い。襲撃者たちに行く手を阻まれ、千紗を追うどころかどんどん押されていく。
必死の抵抗もむなしく、千紗は馬のもとまで連れて行かれた。馬の背に大きな麻袋がくくりつけられているのを見て、あれに詰め込まれるのだと直感的に悟る。
「いや、いやあっ！　誰か、誰か――！」
恐慌状態に陥って金切り声を上げると、千紗を捕らえている男が薬と思しき小瓶を出した。
「王女さま、しばらくおとなしく――」
――声がしたのは、そのときだった。
「――目をつぶってください、千紗さま！」
聞き覚えのある、その声に。
千紗はとっさにぎゅっと目をつぶった。同時に詠唱が響く。

「天滅還海！――爆ぜよ!!」

直後、頭上で凄まじい破裂音がして、まぶた越しに閃光がひらめいたのがわかった。

男のうめき声と、馬のいななき。千紗の拘束がゆるむ。そこに誰かが飛びかかってきたようだ。別の手が千紗に伸びて、男ともみ合いになる。

そして――。

やがてこわごわ目を開けたとき、千紗は自分がよく知る人物の腕の中にいるのを知った。

（あ……）

千紗を優しく抱きかかえて、地面に片膝をついているその少年の、凛とした横顔に目が釘付けになる。彼が銀髪を揺らしてこちらを向き、片眼鏡の奥で青銅色の瞳をなごませるのを見て、千紗は安堵に全身のこわばりが解けた。

「……翔、波」

「はい。間に合ってよかったです、千紗さま」

翔波は微笑むと、千紗を地面に下ろし立たせた。千紗を背にかばってすっくと立ち上がり、こちらに向かってくる襲撃者たちと向き合う。

「――お守りします」

力強いその言葉と、頼もしい背中に、千紗はとくんと胸がときめくのを感じていた。

林道にそれた王女一行を、翔波が見つけることができたのは、真羅のおかげだった。
一行を追って単騎で南海道を駆けていたとき、突然背後から声がかかったのだ。
『従者。この次の左の脇道に、新しい轍があるよ。どうも街道をそれて曲がったようだね』
『！　ありがとう！』
舗装されていない林道には屋形車の轍がつくが、南海道にはつかない。この速度で脇目もふらずに駆けていたら、脇道に残された痕跡など絶対に気づかないところだった。翔波が一瞬振り返って礼を言うと、童子姿の真羅はとんと馬の背から飛び降りて姿を消した。
そして翔波は、まさに千紗が馬で連れ去られようとしているところに駆けつけ、使役術で相手の不意をついて千紗を奪い返したのである。
しかしここまで乗ってきた馬は、道をふさぐ屋形車の向こうにおり、逃亡はままならない。
（どうにか一ヵ所突破して、やつらの馬を奪えれば――）
「天にありては万物を照らす御光、地上に来たりて万有を食む牙となれ！」
火球を放ち、刀を手に迫ってきた男を吹き飛ばす。
「くそっ、乾術師か！」
「なに、夜明け直後でこの曇天。乾ノ術もたいした威力は出まい！」
随身を降した襲撃者たちがわっと向かってくるのを見て、翔波は両手を構えた。一瞬、体の

前で両手を交差させ、指の間に挟んだ碁石を一斉に投げ放つ！

「天滅還海、制せよ！」

襲撃者たちの足元で、碁石から紺碧のもやが噴き出した。彼らの足に絡み付いてつかの間その動きを止めた淵妖は、すぐに地面にしみこんで淵海に還る——その前に。

「今は眠りし乾ノ神の宝、天の鏡のその写し身よ。歪みの鏡の理で、禍つ風を凍らせよ！」

翔波はすばやく月氷澄の鏡を構え、恐ろしい速さで呪文を紡いだ。輝く鏡面から銀の光が走り、淵妖が男たちの足に絡んだまま凍りつく。

「な、なんだ、これは!?」

「千紗さま、この隙に！」

翔波は鏡を構えたまま千紗の手を引き、動けずにいる男たちの前を駆け抜ける。——本来、一時的にしか使役できない淵妖を、鏡の秘術で凍らせて保たせるという荒業。理に従って淵海に還ろうとする淵妖を無理やりとどめているのだから、そう長くは続かないはずだ。

「！　翔波、前！」

使役術の妨害を免れた男が数人、屋形車の裏を回って翔波たちの行く手に躍り出る。翔波はうなずいて千紗の手を離し、火球を放った。

続けざまに詠唱して火球を連発するが、襲撃者の言っていた通り、通常より威力が弱い。決定的な衝撃を与えることはできず、男たちはすぐに得物を持ち直して襲いかかってくる。

同時に、背後で秘術が解ける気配がした。
「……っ」
淵妖の呪縛から放たれた男たちが追ってくるのを察し、翔波はとっさに片腕で千紗を抱きこんだ。挟み撃ちにされるのを避けて、横っ飛びに林に分け入る。
（千紗さまは、僕が守らないと！）
「――に来たりて万有を食む牙となれ！」
腕の中のぬくもりを感じながら、追いすがってきた男たちの先頭を吹っ飛ばす。だが詠唱の合間に別の男が迫り、翔波めがけて刀を振りかぶる。
「これで終わ……」
瞬間、風を切る音がした。
木々の間から飛来した矢が、男の腕に突き立つ！
「！」
まさしく矢継ぎ早に飛んできた矢は、翔波と千紗に迫っていた男たちの足を次々に射貫いた。絶叫が上がり、男たちがばたばたと倒れる。
そこに轟くような馬蹄の音が近づき、呆気にとられた翔波の眼前に人影が降り立った。
「閣下！」
「叔父さま！」

駆けつけるなり馬から飛び降りた冬惺は、着地と同時に手にした長弓を回転させた。弓の先で手の甲をしたたかに打たれ、一人の男が得物を取り落とす。切れた弦が別の男の目を打つ。反り返った弓を冬惺がすばやく一転させると、また別の男の得物がはね飛ばされた。

「――そこまでだ。うちの可愛い姪に、よくもふざけた真似をしようとしてくれたな」

抜刀すらせずに三人を圧倒した冬惺に、襲撃者たちは呑まれたように後ずさった。

「……ひ、退くぞ！」

「馬鹿どもが。逃がすとでも思うか？」

冬惺に続いて騎兵隊がどっと押し寄せ、襲撃者たちを囲んだ。兵たちは浮き足立った襲撃者一味を次々に打ち倒し、捕縛し、負傷した随身たちにも手当てを施していく。

翔波はその様を呆然と眺めて、冬惺の背中にぽつりと言った。

「……早かったですね、閣下」

「おまえの目印がわかりやすかったからな」

確かに翔波は、真羅に教えられたこの脇道に入るとき、襟巻きにしていた紺の布を目印に落としていった。だが沙良から情報を受け取って王都を発った時間の差を考えると――冬惺は駆けつけるのが早かったし、翔波は遅かったのだ。馬の差、というか馬術の差で。

（……。いや、ひがんでいるわけじゃないけどさ……）

冬惺が現れたときの千紗の歓声を思い出して、僕のときにはああいうのなかったよなあとか

思ったわけでも、決してないけれど。
「大丈夫か、千紗。怖かっただろう」
冬惺が姪に向き直り、優しく言う。だが、てっきり大好きな叔父に駆け寄って抱きつくものと思っていた千紗は、そばの翔波の腕にぎゅっとしがみついた。
「ううん、平気。……翔波が守ってくれたから」
（千紗さま……）
それだけで、翔波の胸でちょっぴりもやもやしていた思いは消えてなくなった。嬉しさと誇らしさで一気に浮上したのが顔に出たのか、冬惺がくすりと笑う。
「ご苦労だったな、鏡作の翔波。王女を……姪を救ってくれたこと、感謝する」
妙に他人行儀な礼に翔波はまたたいたが、すぐに気づいた。冬惺は、翔波が主人の指示で千紗を助けにきたのではなく、自分の意志で駆けつけたのだということを強調してくれたのだ。
はにかんだように「ありがとう」と言った千紗に、翔波は我知らず顔がほころびる。
冬惺はそんな二人に微笑むと、半壊した屋形車をちらと見て言った。
「……ひとまず、一緒に帰るか」

王女一行を襲撃したのが夏憬の配下の者であることは、たやすく判明した。しかし騒動になるのを防ぐため、王女の出立が公表されていなかったのを幸いに、この一件は内々で処理することとなった。

夏憬に対する審問も身内だけで行うことになり、千紗を連れて王宮に戻った冬惺たちは、その日の午後、春怜王の私室に集っていた。

人払いのされた室内にいるのは、春怜、冬惺、夏憬、玻璃、当事者の千紗、鏡作の間者の主として問題の情報を得た翔波、の六人である。

わけもわからぬまま呼び出され、愛娘が誘拐されかけたことに激昂した兄王にとりあえず一発ぶん殴られた夏憬は、弟から事の次第を聞かされて蒼白になった。

「なんだそれは！　私はそんなことは知らないぞ！」

襲撃に加わっていた者の一覧を見せられて愕然としている夏憬に、春怜が冷ややかに問う。

「ではおまえは、この千紗誘拐未遂の一件になにもかかわっていないと？」

「当たり前です、兄上。信じてください！　だいたい私が千紗をさらって、いったいなんの得があるというんですか!!」

大真面目に叫んだ夏憬に、室内がしんと静まり返った。

「……ん？」

夏憬は自分以外の五人が一様に唖然としているのに気づいたのか、きょろきょろする。

きょとんとした顔の次兄に、冬惺は手のひらを自分の額にやった。
「馬鹿だ馬鹿だとは思っていましたが、まさかここまで想像を絶する馬鹿だったとは……っ」
「いや、冬惺。おまえの分析は的確だった。確かにこの弟には、悪党になる才覚すらない。…
…というか夏憬。おまえ本当に、一度でも真面目に王位を狙ったことがあったのか……？」
「え？」
「夏憬叔父さまって……実はすごくいい人だったのね……」
「え？　え？」
春怜の膝に座る千紗にまで呆然とつぶやかれ、夏憬は目をぱちくりさせた。翔波は率直な感情を顔に出すことを礼儀正しく慎み、玻璃が頬杖をついたままぼそりと答えを言う。
「千紗がいなくなれば、今のところあなたが王位継承権第一位になるでしょ」
「あ」
なるほど、と夏憬が手を打った。彼にとって王位とは、劣等感を抱く兄から奪うものではあっても、幼い姪から奪うものではなかったらしい。だがそれにしても、間抜けな話である。
春怜が頭痛をこらえるようにこめかみを押さえた。
「冬惺……。この審問、私には凄まじく無意味に思えてきたんだが？」
「同感です。まったく審問しないわけにもいきませんから、形だけでもと思いましたが……。あとはもう、うかうかはめられそうになった夏憬兄上の迂闊さかげんをあげつらう会にでもし

ておきますか？」

目を白黒させている夏憬に、冬惺は種明かしをした。――事件の首謀者が紅楓方であるという情報が既に入っていたので、夏憬については最初からほとんど疑っていなかったのだと。

しかしいくら内々で処理するといっても、配下に内通者がいたことに気づかなかったのは夏憬の落ち度である。そのため当分の間は監視役がつくことで落ち着き、この王女一行襲撃事件はひそやかに幕を下ろすこととなった。

その後、千紗の南行きの話は宙に浮いた。襲撃事件のあとでは嫌がる千紗に無理強いもできず、「王族が都を離れたら人々が動揺する」との意見も出たため、再出立の予定がいつになっても立たなかったのだ。

そして日々は過ぎ――。

冬惺率いる白桜軍が再度北へ進軍する日が――戦の足音が、近づいていた。

その使者がやってきたのは、出陣を控えたある日のことだった。

「――冬惺公閣下。琅の使者の方がいらっしゃって、是非閣下に謁見したいとのことですが」

翔波が取り次ぎにやってきたとき、冬惺は軍府内の自分の執務室で書簡をしたためているところだった。手紙から顔を上げ、確認する。

「縁談の件か？」

「おそらく。内々でお話を、と言っておりましたから」

冬惺は一つうなずいて、会おう、と書きかけの書簡を横に押しやった。

やがて翔波に連れられて現れたのは、亜麻色の髪をやわらかい細布で結び、装飾性豊かな琅風の装束に身を包んだ、おっとりした物腰の青年だった。

いかにも琅の文官貴族といった風情の使者は、挨拶の口上を述べると、冬惺が待ち望んでいた通りの内容を口にする。

「先年より琅の国内で持ち上がっていた冬惺公閣下と明花公女の縁組みの件ですが、このたびその案は重臣会議で正式に却下されることになりました。つきましては、早まって内々に縁談を打診した者がおりましたこと、お忘れになっていただければ幸いです」

「そうですか、それは安心しました。わざわざ本国より使者を立ててのご報告、痛み入ります」

冬惺は礼儀正しい笑顔で応じると、先ほど書きかけていた書簡をくしゃりと丸めた。そばに控える翔波に渡し、使者に聞こえるように言う。

「これはもう必要なくなった。反古紙にはしないで、後で燃やしておけ」

――琅公国が縁談の復活を申し入れてきたのは、玉造軍との戦いからほどない頃だった。

以前琅公国が縁談を取り下げることになったのは、当時冬惺の事実上の婚約者だった綺理の存在ゆえ。そのため琅公国は、今こそ障害はなくなったとばかりに再びこの縁組みに色気を出してきたのである。輪瑛でも一時期、冬惺と明花が結婚するらしいという噂が流れていた。

だが冬惺は琅側が動き出す前に、「私との縁談復活の噂が立って公女殿下に迷惑がかかっては申し訳ないので、根も葉もない噂はしっかり否定しておきました」との旨を書き送り、こちらに縁談に応じる意思はないと暗に突っぱねておいた。内々の打診はその書簡と入れ違いに入ったものだが、それもようやく取り下げられ、明花との縁談は完全に消滅した。

（これで心置きなく出陣できる。俺が王都を離れている間に話が進みでもしたら、たまったものじゃないからな。まあ兄上も、あの約束を反古にはしないだろうが……）

たった今破棄したのは、出陣までにこの件が片付かなかったら送ろうと思っていた、正式な断りの書簡である。それが実際に送られていれば、二度までも冬惺にふられた明花の体面が傷つきかねなかったので、使者がほっとした面持ちになった。

次いで、使者の青年は一通の手紙を差し出した。

「それと、明花公女より冬惺公に、お手紙を預かってきております」

「明花姫から……？」

受け取って見ればその手紙には、明花の私的な紋と思しき花模様の封印が捺されている。怪訝な顔でためつすがめつ手紙を見ていると、使者の青年が咳払いをした。顔を上げた冬惺

に、彼はためらいがちに言う。
「あの……実は先だっての援軍派遣の際、琅の国内では、援軍を出す条件として冬惺公と公女殿下の婚姻を提示してはどうか、という案が出ておりました」
「……」
無言で眉をひそめた冬惺を、使者が不意に、藍色の目でまっすぐに見た。
「で、ですがっ。そのことで重臣会議が割れていたときに、そんな話で時間を浪費していないで早く盟友に援軍を送るようにと主張したのは、明花公女です。……ただ、それだけです」
それらは使者として予定していた発言ではなかったのだろう。冬惺と翔波が二人して目を瞠ると、青年は慌てたようにまた咳払いをした。
彼が挨拶もそこそこに辞去していったあと、冬惺と翔波は思わず顔を見合わせる。
「……それはまた、意外な」
「あの公女殿下がねえ。……恩着せがましいこと、書いていたりして」
二人は同時に、冬惺の手元の手紙に視線を落とした。
「……こういう場合は、俺は恨みがましい手紙を書かれる立場じゃないのか？」
「どうだろうね。でも明花公女って、前に『あなたのために身を引きます』って言っていたんだよね？　それなら今さら恨みつらみもないと思うけど……ていうか君、ちゃんと読むよね？　面倒くさがって忘れたふりして出陣とか、考えていないよね？　一応礼儀として――」

「わかってる。……あとで一人のときに読む」

翔波はまだ若干疑わしげな目をしていたが、冬惺は明花の手紙を横に置いてさっさと書類の山に戻った。出陣前に片付けておくべきことなど、他にも山ほどあるのだ。

――たとえば自分が戻らなかったときのための、仕事の引き継ぎの準備とか。

（それにしても大丈夫かな、冬惺は……）

書類を手に護国大将軍の執務室を出た翔波は、扉をちらと見やってから歩きだした。

――玉造家を滅ぼしたあの戦のときから、冬惺はどこか危ういものを抱えている。

あの日、冬惺を見つけたとき、翔波は彼のそばに影珀の死体があったことに驚いた。

だがあとで真羅と共に事情を聞いて、それなら冬惺が影珀を殺めたのも無理はないと納得した。真羅も、大淵妖に憑依されて体が混ざってしまった人間を救うすべはないと断言していた。たとえ大淵妖が理に触れて淵海に還っても、混ざった体が引き剝がされる衝撃で依代の人間も死んでしまうからと。

それでも冬惺は納得していないのだ。まるで「仕方がなかった」と納得することが、許されざる罪であるかのように。

（あの場で綺理になじられたっていうなら、そうなるのもわかるんだけど……）

綺理は冬惺が影珀を討たざるをえなかった事情を知らない。それでも冬惺を責めなかったというのは、とても彼女らしいと思った。――そんな一途で強いところに翔波は憧れ、惹かれ、彼女の『一番』が常に冬惺であるとわかっていながら彼女に恋をしたのだから。

（なのに冬惺は、『綺理を取り戻す』って言わなくなったんだよなあ……）

不安を胸に回廊を歩いていた翔波は、ふと柱の陰から淡い金髪の房が見え隠れしているのを見つけて、口元をほころばせた。少し離れたところに控えている護衛の武官に目で会釈してから、早足で近寄る。

「……ええと、ごきげんよう、この前助けていただいたお礼に……あ、違った。もうすぐ北へご出陣なさるとお聞きしたので、いつぞやのお礼に……」

「こんにちは、千紗さま」

「ひゃあっ!?――しょ、翔波!?」

なにやらぶつぶつ唱えていた千紗は、翔波が声をかけるなり悲鳴を上げて飛び上がった。ひどく慌てた様子で振り返った王女に、翔波はさすがに気安く声をかけすぎたと反省する。

「驚かせてしまってすみません。あの、今日はいったい……」

「あ、あの。私、守り袋を作ってきて、う、受け取ってもらえるかしらって……」

妙に挙動不審なのが気にかかったが、告げられた内容には納得する。

——最近、翔波を介して冬惺に手製の守り袋を渡そうとする姫君は多い。

なにしろ冬惺は、白桜王家の唯一の未婚男性であり、今を時めく護国大将軍だ。かつては出生疑惑ゆえに『白桜の面汚し』とささやかれていた身だが、戦時で誰も冬惺の地位や声望を無視できないことと、公然と冬惺を蔑んでいた者の筆頭だった夏憬がすっかりおとなしくなったことから、今では彼を侮る者はほとんどいない。冬惺が明花との縁談の噂を否定して以来、彼に自分を売り込もうとする姫君がどっと現れたのは、当然のなりゆきだろう。

けれど冬惺がそうした姫君たちの守り袋を決して受け取らない——どころか毒舌で突っ返して泣かせる——ので、彼女たちはどうにか従者の翔波に仲介を頼めないかとやってくるのだ。翔波もその都度丁重に断っているが、相手が千紗王女ならば話は別である。

「大丈夫ですよ。千紗さまの守り袋でしたら、冬惺公閣下は喜んで受け取りますから」

翔波はにこりと笑ったが、なぜか千紗の愛らしい顔が引きつった。

「そ……そうよね、うん。ええと……これ、冬惺叔父さまにお渡しして」

彼女が差し出したのは、黒の絹地に金糸で桜の花が刺繍された守り袋だった。黒髪に琥珀の瞳の冬惺に合わせて作ったのだろう。大人顔負けのできばえだ。

承りました、と神妙に受け取ると、千紗はくるりと背を向ける。

「そ、それだけ！　それじゃあ、ごきげんよう！」

と言って駆け出した矢先、ぼとりとなにかを落とした。

「千紗さま、落とし物が――」

拾い上げてから、翔波はそれも守り袋であることに気づいた。銀の絹地に青い糸でいびつな円が刺繍されている。布の断ち方も糸の始末も拙いが、どこか愛嬌のある守り袋だ。

（あれ？　黒地に金が冬惺なら、これって……）

「っきゃ――――！　駄目、それは駄目なの！　失敗作なの！」

翔波が追いかける前に、千紗が超高速で戻ってきた。真っ赤になって守り袋をひったくる。

「千紗さま。ひょっとしてそれは、私の……？」

青系の色の瞳はともかく、銀髪はかなり珍しい。自惚れすぎだろうかと思いつつ尋ねると、千紗はびくりと身を震わせた。

「あ、あのね、違うの。翔波のだからっていい加減に作ったんじゃないのよ。本当よ。本当に一生懸命作ったんだけど、ちょっと失敗しちゃって。だから……」

涙目でしどろもどろに言う千紗に、翔波はようやくぴんときた。

（……ああ、そうか。僕もたいがい鈍いな）

――冬惺のための守り袋は、侍女が手伝ったからこそあの完成度なのだ。対してこちらの守り袋は、千紗が一人で作ったのだろう。だが冬惺用の守り袋を先に出せば、できばえの差が歴然としてしまう。翔波が余計なことを言わなければ、千紗は翔波に守り袋を渡したあと、冬惺には自分一人で渡しに行くつもりだったに違いない。

「……あの、千紗さま。よろしければその守り袋、私にくださいませんか？」

言うと、千紗がぱっと顔を上げた。だが彼女はすぐにうつむいて、恥ずかしそうに言う。

「で、でも失敗作だもの。翔波だってこんなみっともない守り袋……嫌でしょ？」

「そんなことはありませんよ。お可愛らしい守り袋ですし、千紗さまのお気持ちがこもっていると思うと心強いです。……ずうずうしいお願いをしてよろしければ、前に千紗さまをお守りしたときの褒美として下賜していただけませんか？」

やわらかく微笑んだ翔波に、千紗の顔がぱあっと明るくなった。花が開くような愛らしい笑顔に、こちらまで嬉しくなってくる。

「本当は私も、あのときのお礼がしたくて作ったの。――守ってくれて、ありがとう」

「光栄に存じます、千紗殿下」

翔波は小さな王女の前に跪き、差し出された銀の守り袋をうやうやしく受け取った。

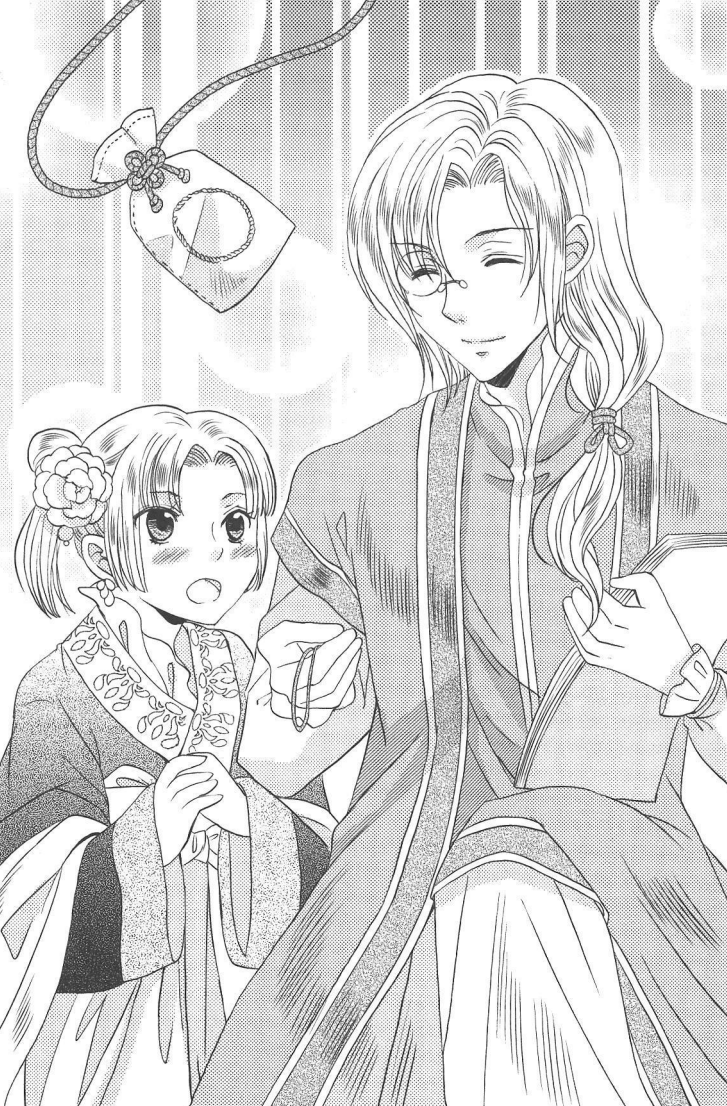
それから顔を上げて、千紗がふっと不安げな顔になるのを見た。

「――ちゃんと元気で、帰ってきてね」

その言葉に、翔波はつかの間動きを止めた。――この聡明で勘の鋭い王女は、きっと翔波が抱いているのと同じ予感を直感的に感じ取っている。

（もしかしたら白桜と紅楓の戦いも、真羅と万宵の戦いも、決戦を迎えるのかもしれない――）

紅楓方には妖王万宵がいる。これから起こる戦にも、また淵妖がかかわってくる可能性は高



い。休戦期間の間ずっと鳴りをひそめていた彼は、いったいなにを企んでいるのだろう。
終わりが近い予感と、最後になにかとてつもないことが起こりそうな不安。
それがひたひたと迫る胸の中に、千紗の言葉を確かに刻み込むように、翔波は右手の守り袋を自身の左胸に当てた。
「……はい、千紗さま」

夜半、冬惺が自室に戻ってから開いた手紙は、予想に反して短かった。
前置きも時候の挨拶もなく、行数も数えるほどだ。
『縁談はわたくしからも父にお断りしました。琅がこの縁談を持ち出すことはもうありません。ご安心ください、わたくしはもう冬惺さまに未練はありません。本当にありませんから。ただ初恋の形見が、恋した方からの軽蔑では、寂しいと思っただけなのです。
ですが一つだけ。あの質問を、もう一度させてくださいませ』
そこから少し空白があって、最後の一行がぽつんと記されている。
『冬惺さまは、綺理さまのことがお好きなんですの？』
（――――）

冬惺は手紙を小卓に置いた。椅子の背に体を預け、まぶたを閉じる。

かつて明花がその質問をしてきたとき、自分がなんと答えたかはよく覚えている。

『あなたが私に向けていた感情とは違いますが、誰よりも大切に想っています』

あのときは違うと思っていた。自分の綺理への想いは、決して恋愛感情などではないと思っていた。――否。あの頃の自分は、恋愛がどういうものかよくわかっていなかったのだ。

多情な母を人々が悪しざまに語るのを聞いて育ち、女好きの長兄がとっかえひっかえ女性を口説くのを見てきて、恋愛とはそういうものだと半ば刷り込まれていたのかもしれない。浮ついていて、無分別で、ふしだらな衝動を呼び起こすもので、感傷に酔っただけの当てにならないもので、――一時的に燃え上がりはするけれど、いずれ必ず冷めるものだと。

だから綺理への想いはそんな低俗な感情ではないと思っていた。

けれど自分が綺理を、異性として特別に愛していると悟ったとき、その感情につける名を他に思いつかなかった。それどころか、ああこれが恋情というものだったのだ――と、不思議なほど納得した気がする。

冬惺はゆっくりと目を開けた。

小卓の上の、開いたままの手紙。その文面に答えるように、そっと唇を動かす。

「――好きですよ。誰よりも大切で、誰よりも愛しくて……。私は綺理を、綺理だけを、永遠に愛しています」

たとえ聞く者のない告白でも、綺理に対して語るような言い方にはしない。
自分にはもう、その資格はないのだから。
（俺にはもう、綺理に好きだと告げて求婚する資格などない。だが綺理とでないなら、誰とも結婚はしない。――この想いの行き着く先は、たぶんそこだけだ）
そして今の冬惺は、ただ約束のためにできることをするのみ。
（紅楓を倒し、万宵を破って、やつらから綺理を解放する。――すべての決着は、北でつける）

春怜王治世十年、二月の末。
北部の雪解けに先駆けて、護国大将軍白桜の冬惺を総大将とする討伐軍が西山道から出陣した。
冬惺の、十八歳の誕生日のことであった。

三章　征け、最果ての地へ

――戦の足音が、ひたひたと迫ってくる。

白桜軍北進の報を受けて、紅楓方は守るに難い離宮を離れ、より北の砦へと本拠を移すことになった。

「私も朔秋や空騅将軍と一緒の砦に行くことになったわ。侍女を全員は同行させられないから、桂鈴は無理だけど、奏珠はどうにか連れて行けるようにしたから」

綺理がそう告げると、奏珠はうなずいた。

「よかったです。もっとも、砦となると一気に出入りが難しくなりますから、今までほどお役には立てないと思いますが……。しかし桂鈴どのは、砦行きから外れるんですか」

「うん。離宮仕えの人の半分と一緒に辺境の村に避難してもらうことにして……なんで？」

「いえ、道理で念入りに八つ当たりをされたと……、まあ、それはともかく」

奏珠は荷造りのために綺理の装束を一枚一枚確認しつつ、報告をする。

紅楓方が千紗王女を狙った件については、あの誘拐が失敗したあと次の計画は立っていないという。朔秋と綺理の婚約破棄も当分お預けだろう。

そこで奏珠が、思い出したように付け加えた。
「婚約といえば。冬惺公と明花公女の縁談の噂は、やはり間違いだったようです。なんでも冬惺公自ら、はっきりと噂を否定したとか」
「――え」
綺理は思わず、荷物の選別をしていた手を止めた。奏珠の言葉を反芻し、懐に納めている組み紐のお守りを装束の上からそっと押さえる。
(……どうしよう。私、今、ものすごくほっとしてる……)
明花との縁談がないからといって、王弟の冬惺がこの先誰とも結婚しないわけはないのに。それに――そうだ。もしかしたら冬惺には既に綺理の知らない別の姫との縁談が持ち上がっていて、彼はその姫のために噂を否定したのかもしれない。
(どうせいつか、冬惺の結婚の報せを聞くときがくる。いちいちぬか喜びしていたら、あとで余計に辛くなるだけじゃない)
そう自分に言い聞かせていると、奏珠が報告の続きに戻った。
「白桜軍の進路ですが、まずは西山道の封鎖を解いて玉造の里に向かっているようです」
「……そっか。軍を率いているのが冬惺なら、玉造の人たちも安全よね」
綺理は思考を切り替えて、再び手を動かしはじめる。
冬惺の率いる軍は兵の規律が正しく、他のどの将が率いているときよりも占領地での略奪禁

止が徹底していることで定評がある。玉造の民の扱いについても心配はいらないだろう。
（だけど……里のみんなは、冬惺をどう迎えるんだろう）
もしも冬惺が里人から非難を浴びせられるようなことになれば、飛び出していって冬惺をかばいたいとさえ思うのに、実際の綺理は彼を仇と明言した身だ。
（せめて私の言葉が、冬惺たちに伝わらないといいけど……）
綺理は心配に翳った瞳で、知らず識らずのうちに南を――玉造の里のほうを見ていた。

雪解け道を、騎馬と小さな輿の一行がしずしずと進む。やがて里の入り口が近づいてくると、冬惺は門の前に見知った里人たちが集っているのを見て苦笑した。
「やはり、そうやすやすとは入れてもらえないか」
――西山道の北の果て、玉造の里。
西山道沿いの地域は先年のうちにほぼ白桜方が奪還していたが、その後、雪で戦線が膠着したため、玉造の里は紅楓方の勢力圏として残っていた。しかし玉造軍が瓦解し、紅楓方が防衛線をより北に移した今、玉造家領を守備する兵はいない。大軍を擁して北進する白桜軍を阻むものはなく、冬惺たちは一切の抵抗にあわずに玉造の里まで達していた。

そして今、軍を里の外――元地方府の城柵に置いて、少数で里に向かった冬惺たちを出迎えたのは、門の前に立ちふさがる玉造の里人たちの非友好的な視線だった。

敵意、とまではいかないが、隔意。

かつてこの里で育ち、この里で騙し討ちに遭って里を追われ、里の主である玉造公を討ち取った少年が、大軍を率いて舞い戻ってなにをするつもりか――。そんな、探るような視線だ。

冬惺は門の外で行列を止め、先頭の馬上で朗々と告げる。

「――白桜軍総大将、護国大将軍白桜の冬惺だ。里を預かる留守居役と話がしたい」

沈黙が数秒続き、返答の代わりに、人垣の中からなにかが投げつけられた。

「！」

冬惺と、その少し後ろに馬を並べる翔波に一つずつ。

顔めがけて投げ放たれたそれを、二人はとっさにぱしんと受け止める。後続の兵に緊張が走ったが、冬惺はそのやわらかい物の正体をすぐに悟り、部下を手振りで制した。

そして人垣を割って現れた人物に、冬惺と翔波は条件反射で顔を引きつらせた。

「まだくたばってなかったのか、雷じじい……っ」

「去年作った干し柿だ。味はどうだ、柿泥棒の悪童ども」

眼光鋭い、かくしゃくとしたその老人は、里のはずれに屋敷を構える長老である。泣く子も黙る彼の庭から果物を盗み出せたら英雄、というのが里や近隣の村での一般通念で、冬惺たち

三人もかつては彼と熾烈な攻防戦を繰り広げたものだ。

「……里の留守居役だったのか、じじい」

鳥や悪童を追い払う杖を天秤棒のように担いだ老人に、冬惺はうなった。「聞いてないぞ」とぼやいてから、先ほど投げ渡された干し柿を一口かじる。

「――懐かしい味だ。だが、昔食べたときのほうがうまかったな」

「ふん。盗んだ柿のほうがうまかったとでも言うか、こぞうっ子よ。――その調子で、手に入れるなら力ずくで奪った里のほうがいいとでも言うつもりか？」

老人の声が険しくなり、里人たちの間で空気がぴんと張りつめた。

しかし冬惺は首を横に振る。

「俺はこの里を制圧や占領するために来たわけじゃない。ましてや、言葉遊びをするためでもな。里が拒むなら俺はここで引き返そう。――だが、葬列は入れてくれ」

はっとした里人たちの前で、冬惺は馬を下りた。他の者もそれにならい、下馬の礼でその輿が進み出るのを見守る。小さな黒塗りの飾り御輿――遺骨をのせた輿だ。

「影珀叔父上の遺骨を、この玉造の里に埋葬してほしい。玉造公はこの地に眠ることを望んでいるはずだ」

里人たちが大きくざわめいた。やがて誰からともなく左右に分かれ、道を空ける。

「――入んな。茶くらいは出してやる」

玉造邸で埋葬の儀の準備が行われている間、冬惺と翔波は留守居役の老人の屋敷で、出された茶をすすっていた。円卓の向かいに座る老人が、果樹の多く植えられた庭を眺めながら言う。

「――玉造家の断絶は、もうとっくの昔にわかっていたことだ。奥方が病ではかなくなられたとき、玉造公も同じ病にかかって子を望めんお体になっておったからな」

「え？」

「昔、綺理姫さまに薬師の業の手ほどきをした薬師。あれがなんであんなに長い間、お屋敷に滞在を許されていたと思ってる。だいたいそうでもなければ玉造公は、王の顔色など窺わずに後妻を迎えておろう」

目を瞠った二人に、老人は肩をすくめた。

「だからわしらは長い間、玉造家の名が失われたあとを引き継ぐのは、冬惺公、おまえさんだと思っていた。無論、こんなやり方ではなく、な」

こんなやり方。影珀を討ち、玉造家を武で滅ぼしたこと。

「もちろん戦を仕掛けたのは玉造だ。おまえさんたちを里から追ったことは詫びんが、戦のならいにも文句は言わん。だが玉造公の葬送のことで仇のおまえさんに礼を言うほどには、皆も割り切れておらんのだ。……冬惺公よ。玉造公の死のことで、ただしたいことがある」

茶杯を置く冬惺の手が、びくりと強張った。
老人の鋭い眼が、こちらを向く。
「聞きたいのは一つだ。――玉造公は誇り高く死んだか、そうでないか」
（――――）
予想外の問いに、冬惺は大きく目を見開いた。だが返答を迷う必要はなかった。
「――影珀叔父上は、最期まで誇り高かった。玉造家の誇りを、その心を貫いて死んだ。それだけは……決して誰にも否定させない」
翔波がこちらを見ているのを感じる。懐に納めたままの、碧玉の勾玉の存在を意識する。
――大淵妖閃禍に乗っ取られた影珀は、最後に一度だけ自我を取り戻し、閃禍を淵海に還すための勾玉の位置を冬惺に告げた。玉造の名を《契約者》の汚名で穢すなと、叫んだ。
冬惺は自身の行動には納得できずとも、影珀は確かに誇りを貫いたと思っている。
そして影珀が大淵妖に乗っ取られていたことが露見しなければ、彼の名がこれ以上傷つくことはない。滅びし玉造家の、かつての栄光が泥にまみれることもない。それゆえ冬惺は、影珀の死体のそばで見つけた勾玉のかけらを――《契約》の証を、真実と共に隠したのだ。
「……そうか」
老人はじっと目をつむり、やがて唐突に言った。
「綺理姫さまは白桜の冬惺を仇と呼んで、紅楓方を支持すると言われたそうだ」

「――っ！」

思わず息をのんだ冬惺と翔波に、老人はだが、と続ける。

「だが綺理姫さまは、仇討ちをせよとは決して言われなかったらしい。里の民に剣をとって白桜軍に抵抗せよとも言われんだろう。そしてな、玉造の里には、姫さまから一度も使いや手紙が来ておらんのだ。ただの一度も――玉造公の追悼の儀の指示さえもだ。姫さまの御心はともかく、少なくともわしらは姫さまが紅楓の許婚のもとで自由にしているとは思わんよ」

「……」

「若造どもはこれからどうする。まさか玉造公のご遺骨のためだけに、大軍を引き連れて道草を食っているわけではあるまい」

冬惺と翔波はちらと目を見交わし、翔波が口を開く。

「天剣山脈を越えて鏡作家領に入り、東山道に出ます。それにつけては玉造家領から鏡作家領に抜ける切り通しを再び開くことになりますが、人足を徴発する予定はありません。ただ、元地方府に備蓄されていた資材と兵糧は白桜軍が接収させていただくことになります」

「……ふん。そうか、鏡作のおまえさんは、お隣さんになるんだったな」

老人はかすかに感慨をにじませて言ってから、悪童を追い払うように手を振った。

「その茶を飲んだら行け、若造ども。玉造公のご遺骨の埋葬は里の者だけで執り行う。――今おまえさんらがすべきなのは、祈ることではなかろう」

切り通しは細く、起伏が大きい。おまけに今年は、例年以上に雪解け水でぬかるんでいるため、乾術師の隊が道を乾かしながら進むことになる。

大軍がすべて天剣山脈を越えるには数日かかるので、その間、先行していた冬惺と翔波は鏡作の里に立ち寄ることにした。よそ者を寄せ付けぬ古の神秘の里に正式に招かれたとなれば、冬惺の名に箔がつき、士気もいっそう上がるからだ。それに、白桜王家が古の大家の権威を軽視していないと示すことは、春怜王の貴族抑圧策に反発していた者たちへの緩衝材になる。

そして鏡作の里で迎えた夜――。

戦勝祈願の宴のあと、翔波は鏡作邸の当主の部屋で大きな寝台に横になっていた。

行軍中に誕生日を迎えた翔波は、現在十七歳。法的に所領と当主権が返還される成人まではまだ丸一年あるが、昨年の秋に継承の儀をすませたので、鏡作の民にはもう当主として認められている。気づけば軍の中でも、護国大将軍の事実上の補佐役と見なされていたらしい。

秋からこの方、自分は――自分たちは、目まぐるしい速さで大人になっている気がする。

（冬惺も成人したし、綺理ももうすぐ十七歳か。そろそろ僕らが出会ってから十年になるんだ

な……）

初めて出会ったときの綺理から、前にこの鏡作の里で『告白』したときの綺理、最後に別れたときの綺理の姿までが、恋しさと一抹の切なさと共に、脳裏に浮かんでは消える。

そうして、天井を見上げながらこの十年間を思っていたときだ。

突然、自分の頭の下から銀の光が漏れ出して、翔波はぎょっとはね起きた。

「うわっ、なんだこれ。……月氷澄の鏡？」

枕の下に入れていた当主の証の神宝を取り出すと、鏡面が勝手に光っている。鏡の紐の先についていた銀の玉が光となって離れ、鳩くらいの大きさの十二、三歳の少女の姿になった。

純白の長い髪に、うさぎの耳。吊り目がちな赤い瞳。天女のような装束をまとい、小さな餅つきの杵を背負った少女――月氷澄の鏡の精、玉兎だ。

「久しいのう。翔波、我が主よ」

「玉兎……。君、出てこられたんだ。……ああ、そうか。鏡作の里に来たから」

継承の儀の日以来、初めて姿を現した神宝の精に、翔波は目をしばたたいた。

――鏡作の地は特殊な場で、死霊、生き霊、物の精などが仮初めの姿を得ることがあるのだ。

玉兎はふわりと浮かび上がると、翔波を誘うように窓辺へ向かう。

「主よ、月じゃ。月を見やれ」

「月？　でも今日は空が曇って――、っ！」

翔波は言われるままに窓を開け、息をのんだ。
いつの間にか雲の切れ目からのぞいていた満月。――それが、不吉なまでに赤い。
「あかがねの月……。淵海から妖気が立ち昇っているのか……？」
つぶやくと、玉兎が「よう知っておるの」と翔波の肩に乗った。
玉兎は厳しい顔つきで月を見上げ、警戒するようにうさぎの耳をぴんと立てる。
「あれは数多の泥の妖が、淵海の浅みに集っておる証。それも不気味なほど静かに集まって…
…まるでなにかを待っているようじゃ」
「なんだ、君も気づいたのかね。乾ノ神の玩具」
前触れなく割り込んできたその声に、玉兎がびくっと飛び上がった。だが翔波はいつものことなので驚かずに振り返り、背後に忽然と現れた童子に声をかける。
「真羅。これってやっぱり万宵が……？」
「他にいなかろう。淵海の浅みに数多の淵妖を呼び集め、完全に統率できるものなど。……私も今夜、やっとはっきりわかったのだよ。道理で万宵がしばらく大人しくしていたわけだ」
「それってどういう……、ん？　玉兎？」
翔波は問おうとしたところで、玉兎が翔波の髪に隠れるように首の後ろに移動していることに気づいた。玉兎が怯えたような声で言う。
「あ、主よ。あれはなんじゃ。前に我らが凍らせようとした、恐ろしいものではないのか」

「いや、怖がらなくても平気だよ。真羅は僕らの仲間だから」

翔波の陰に隠れつつ、餅つきの杵をしゅっ、しゅっ、と振って真羅を威嚇している玉兎に、翔波は苦笑した。真羅が妖王の分身であること、しかし湿ノ神との約束通りに地上を守ろうとしていること、彼が翔波たち三人の《契約》相手であることを、改めて説明する。

「け、《契約者》……。鏡の継承者が悪妖と《契約》なぞ、前代未聞じゃ……！」

愕然とした玉兎に、翔波はそういえばこれが普通の反応だった、と今さら気づいた。

翔波とて、己の欲望のために大淵妖を地上に呼び込む《契約》は、忌まわしいものだと認識している。だがいつの間にか、それと真羅との《契約》はまったく違うものだと、ごく自然に考えるようになっていたのだ。

「真羅は悪妖じゃないって。大丈夫、ほら、真羅は火雷明王とも友達だし」

「従者。今なにか、非常に問題のある表現を聞いた気がするのだがね」

真羅が顔を引きつらせたような気がしたが、翔波はさくっと無視した。乾ノ神衆、大天火雷金翅明王の名が効いたのか、玉兎が非難をのみこむ。

「……で、万宵がなんだって？」

翔波が話題を戻すと、真羅はすっと表情を引きしめた。

「万宵は私に気づかれないように、淵海の淵妖を集めていたのだよ。地上にいる淵妖を一所に呼び集めれば、その地の湿ノ力が強まって私にも人間にも気づかれる。だがね、淵海の淵妖を

静かに、ゆっくりと、秩序だって浮かび上がらせてくる分には、立ち昇る妖気で地上の湿ノ力がごくわずか強まるだけだ。淵海面が荒れることもなく、地上からはなかなか気づけない」

「湿ノ力がごくわずか強まるって……」

「今年の冬は、乾いた王都で珍しく雪が降ったのだろう？　雪解け道も、前の年以上にぬかるんでいやしないかね？」

翔波ははっとした。異変というほどの変化ではないから気に留めずにいたが、確かにそうだ。南部でも北部でも、湿ノ力がほんのわずか強まっている兆候がある。

「それじゃ万宵は、淵海から少しずつ地上の湿ノ力を強めていく気なのかい？　それとも……」

嫌な予感がして、翔波の声が尻すぼみになった。真羅が翡翠の瞳をぐっと険しくする。

「いずれ万宵はその淵妖たちを地上に上げようとするだろう。そうなる前に万宵をどうにかしなければ、淵海はあふれ、地上に泥の津波が押し寄せることになる」

「……泥の、津波……」

背筋に冷たいものが這い、翔波はぞっとした。

体に震えが走ったのを夜の寒さのせいにして、冷えた手で窓を閉める。玉兎もわずかに縮こまり、再び月氷澄の鏡の中に戻った。

「……心しておくよ。この話、冬惺にはもう？」

冬惺の泊まっている客殿のほうを示すと、真羅が肩をすくめた。

「今夜は少年のところには顔を出していない。明日の朝にでも君から警告しておいてくれたまえ。――万が一少年がキリの夢を見ていたら、起こしてしまうのは悪いのでね」

「え？」

きょとんとした翔波に、真羅は身を翻す。彼は虚空に姿を消す間際、言った。

「ここは出会わぬはずのものが出会う場所。ここではないどこかにいる相手とも、たまさか夢路をわたって出会えることがあるのだよ。――特に今は数多の淵妖が地上に近づいて、理の揺らぎが大きくなっているのでね。常よりも夢と夢とがつながりやすいはずだ」

――白く、白く、どこまでも真っ白な場所で、冬惺は綺理を捜していた。

『綺理！　どこだ、綺理！』

走っているつもりなのに、まるで水の中を歩いているような負荷があり、なかなか前へ進まない。もどかしさを募らせながら綺理を捜していると、ふっと目の前の霧が晴れた。

『綺理！』

まばゆい金髪の少女が、白く大きな玉にもたれかかって横になっている。やや潰れた形のその玉を抱え、滑らかな表面に頬を寄せるようにして、うたたねをしているようだ。長い金髪が

背中から腰へと流れ、純白の装束の裾から伸びやかな素足がのぞいている。
冬惺は焦がれるままに駆け寄ろうとして、彼女の少し手前で見えない壁にぶつかった。拳を振り上げて何度も壁に叩きつけるが、壁はなくならない。綺理のそばへは行けない。
名を呼んで必死で壁を叩き続けていると、綺理が身じろいだ。彼女のまぶたがゆるゆると持ち上がり、冬惺を見る。
『綺理、こっちへ来い。俺はそっち側へ行けないんだ！』
乞うように叫んだ冬惺に、綺理は小さく首を横に振った。
『ごめんね、私は行けないの。まだ、離れられないから』
『なぜだ、綺理！　離れられないって……』
そこでふと、冬惺は違和感を覚えた。自分の知る綺理は、こんな表情をしただろうか？
綺理がゆるく微笑んで身を起こす。彼女は、もたれていた白い玉をいとおしそうになでながら、とっておきの秘密を打ち明けるように言った。
『これはね、卵だったの』
『卵……？』
冬惺は改めてその玉を見て、それが潰れた球ではなく卵の形をしていることに気づいた。綺理が優しくひとなですると、卵がやわらかい光を帯びて殻が透ける。
『そう。初めは知らなかったの。この子がまだ誕まれていなかったことを』

卵の中にはなにかの胎児が二つ、薄青の液体の中にたゆたっている。

見ていると、二つの胎児はそのままの形でだんだんと大きくなってきた。それにつれて殻を満たす薄青の液体が、中心から少しずつ澄んでくる。

やがてピシリと音がして、殻にひびが入った。ひびから光があふれ、とろりとした薄青の液体が流れ出す。ピシリピシリとひびが増え、ますます光と液体があふれ出す。

突如、殻が粉々に砕け散った。殻と液体が消えて、そこに残されたのは――。

『あ……』

最後まで見る前に光が消え、まばたきしたときには卵は元の白い卵に戻っていた。

『いずれああやって孵化するから、それまで私がそばにいて温めてあげるの。だからごめんね、私はまだこの子を置いてはいけない』

『綺理、なにを言って……』

言いさして、冬惺は口をつぐんだ。見えない壁の向こうにいる少女を、瞳を険しくして見る。

『――違う。おまえ、綺理じゃないな』

断言すると、綺理の姿をした少女はふふ、と成熟した女性のような笑みを浮かべた。

『そう。これは仮初めの姿。あなたの心にいた女性の姿を借りただけ。私はあなたと出会わぬはずのもの。まどろみの中で夢の通い路を伝い、縁の糸をたどってあなたに会えた。おかげでやっと、あの子に伝えられる』

『あの子？　おまえはいったい……？』
冬惺と少女の間に霧が流れてきた。少女の姿がぼやけ、だんだん遠ざかっていく。
『お願い、あの子に伝えて。どうか待っていてほしいの。いつか必ず――から』
『待て、聞こえない！　必ず――、なんだと？』
声が明瞭に届かない。遠ざかる速度が増してゆき、少女の姿がぐんぐん小さくなっていく。
『……――は、孵化を待っているの……』
その言葉を最後に、少女の姿はどこまでも続く白の中に消えた。

「――っ！」
暗闇の中で、冬惺ははっと目を開けた。
白から黒へと瞬時に切り替わった視界に、つかの間混乱する。すぐに目が慣れてここが鏡作邸の客殿の一室であることを思い出し、寝台の上でゆっくりと身を起こした。
「なんだ……今の夢は」
卵だの孵化だのと、意味のわからない夢だった。だが不思議と、意味のない夢だったという気がしないのだ。ここが鏡作の地だからかもしれない。
（ここは理の揺らぐ場所。出会わぬはずのものが出会い、姿なき者が仮初めの姿を得る場所

――だったか。ならばあれは……綺理じゃないあいつは、いったい誰だったんだ？）

そしていったい、なにが孵化するのというのだ？

答えの出ない問いにくしゃりと前髪をかき上げて、冬惺は静かな寝室にため息を響かせた。

紅楓の朔秋以下、離宮の面々が北の城砦へ向けて旅立ってから早十日――。

屋形車の中で綴じ本を繰っていた綺理は、すっかり聞き慣れた羽音に顔を上げた。

「万宵。空騅将軍に、あなたの冗談の趣味は最悪ですって伝えてくれない？」

「……常々疑問なのだが、君はいったい私をなんだと思っているのだね？」

開口一番言った綺理に、屋形車に飛び込んできた万宵が呆れ声を出した。彼は物見窓の枠からぴょんと跳び、綺理の正面に移動する。

この屋形車は一人用の小さなものだ。狭い代わりに壁が厚いので、火鉢を入れればすぐに暖まるし、中の声が漏れにくい。物見窓を閉めてしまえば小声で話す必要もない。

「君はよく平然としていられるな。私にかかわってどんな目に遭ったか忘れたのかね」

「無駄に怖がる気がないだけで、あなたが敵だってことは重々承知してるわよ。あ、それ以上近寄らないでね。この前みたいに湿ノ力の補給源にしようったって、そうはいかないから」

しっしっ、と手にした綴じ本を振ると、万宵が首をすくめた。
「しないよ。どの道依代に憑いている間は、湿ノ力を溜め込むことはできないのでね。……で、鷹将軍がなんなのだね？」
「あ、そうそう。この草子本ね、空雛将軍が『下々の娯楽品ですが、道中退屈でしょうから』って差し入れてきたんだけど――」
綺理が表紙を見せると、頭に花が咲いたようなその題名に万宵が若干身を引いた。
「……これは、恋物語かね」
「まあそうね。戦乱の世の中で、敵の将軍と愛し合ってしまった姫君の話でね。姫君は自国の王に輿入れが決まり、将軍も自分の国の王女と結婚が決まってしまうの」
「ははあ、なるほど。悲劇なのかね。結末は心中？」
「ううん。王妃になったその姫は、『恋しいあなたを他の女に奪われるくらいなら！』って一念発起して、その美貌で王をたぶらかして将軍の国を滅ぼさせるの。で、将軍が捕らえられて王の前に引き出されると、またもや姫は王をたぶらかし、将軍の身柄を引き取る。そうして姫は『これでようやく、あなたはわたくしのものですわ』と言って、王の目を盗んで将軍と逢い引き」
「……。感想は控えておくが、鷹将軍が君の思考をどう誘導したいかはよくわかるな」
綺理は「でしょ!?」と拳を握った。空雛が『紅楓方が勝てば、白桜の彼を別の女性と結婚さ

せずにすみますよ』と言っている光景さえ目に浮かぶ。

「まったく、質の悪い冗談よ。……あ、でもね。続きの巻は面白かったのよ。姫と将軍は、王を倒して自分たちが玉座に座ろうと企んで、王の側近を次々に毒殺していくの！　それもありきたりな毒じゃなくて毎回趣向を変えているし、読む者が読めばここで使われたのがなんの毒かちゃんとわかる、通向けの仕様！　あの宴で姫が髪に挿していた花が、まさかの伏線だったとわかったときには感動したわ！」

「いったい誰が書いているのだね、そんな話！　というかそれは、もはや恋物語ではないだろう!?」

「ああっ、誰かとこの続きの予想を語り合いたい！　ねえ、なんなら万宵も読んでみない!?」

綺理は目をきらきら輝かせ、ずずいと綴じ本を万宵に突きつけた。

万宵は思いきりのけぞって、綺理と綴じ本とを交互に見る。

「いや……どうやって？」

ばさりと両の翼を広げる万宵。

「……」

鷹の体で綴じ本を読むとなると、開いた本を爪で押さえ、嘴でよいしょよいしょと一枚ずつめくることになるのだろうか。想像してみたら——とても可愛かった。

「……くっ、なんか負けた気分だわ！　万宵なのに……っ」

「いったいなんの話なのだね!?　君は――」
万宵はなにか言いかけて、ふと嘴をつぐんだ。
翡翠の光がちらつく瞳を冷たく細め、吐き捨てるように言う。
「――だから私は君が嫌いなのだよ、キリ」
「万宵……？」
突然様子が変わった万宵に、綺理は綴じ本を置いて居ずまいを正した。
「傷ついたと思えば立ち直り、敵の私にまたそうやって話しかけてくる。想うことと見返りを求めることは別などとお綺麗なことを言い、仇になった少年をいまだに想っているという」
「……」
「少年は君を取り戻すために、君の大切なものを傷つけ、壊した。それでも君の想いは変わらないというのかね？　それは――君自身が、少年のもとに帰ることを望んでいるから？」
冷たい口調とは裏腹に、万宵の言葉には心をえぐるような鋭利さはない。そして彼の様子がどこか必死に、それでいて迷っているように感じられて、綺理は思わずぽつりと言った。
「万宵。あなた、私になんて答えてほしいの」
その途端。
万宵の瞳が凍りついた。まるで――綺理の言葉になにかの核心を突かれたように。
「……だから私は、君が嫌いだ」

苛立たしげに繰り返して、万宵は翼を広げた。いつかのように物見窓に体当たりして、屋形車を飛び出していく。

（……本当に、なんだったんだろ）

綺理が怪訝な顔で見送っていると、物見窓のそばに騎馬が近づいてきた。

「すみません、姫君。私の鷹がなにか粗相でもしませんでしたか？」

「……いえ、特に」

馬上でにっこり笑う空騅を上目遣いに見て、綺理はふと思う。

（そういえば、空騅将軍は万宵の目的が北瑛島を淵海に沈めることだと知っているの？　知っていてなお万宵を利用しようとしているのか……それとも、だから降神術を使える私を手に入れて、万宵に対する切り札にしようとしてる？）

うまくやれば空騅と万宵の協力関係に亀裂を入れられるかもしれない。だが綺理が空騅と二人きりで話をする機会など、そうそうめぐってこない。

綺理は上空で旋回している万宵をちらと見て、無難な話題にとどめておく。

「……それより空騅将軍。砦にはあとどのくらいで到着するんですか？」

空騅は微笑むと、前方を指さした。

「もうそこに見えてきていますよ。あの高い望楼のある城砦がそうです」

つられて物見窓から身を乗り出すと、大行列のずっと先に石造りの堅牢な城がそびえている

のが見えた。遠目にも、綺理が想像していたよりずっと大きな城砦だ。
「あれが――」
「あれが東山道の北の果て、瑛国最北の城砦にして、金蘭王妃の宝剣が安置されている紅楓王家の本拠――凌雲城です」
空騅は説明してから、どこか楽しみにしているような声音で付け加えた。
「あそこで、白桜の若将軍を迎え撃ちます」

「凌雲城だ」
同じ頃、東山道を行く白桜軍の陣幕で、冬惺は地図の北の端を指さしていた。
「金蘭王家の初代志輝王が築いた城砦で、もともと紅楓家が本城にしていた場所。斥候の報告でも、紅楓の朔秋の一隊はそちらの方角へ向かっていたという。やつらがいるのはここだろう」
冬惺は決意を込めた声で、地図を囲む指揮官たちに告げた。
「凌雲城で紅楓方を討つ。――こちらの行く手にわざわざ出てきてくれたぐらいだ。紅楓軍総大将、鷹居の空騅も、ここで決着をつけるつもりだろう」

（凌雲城とはね）

その夜、真羅は白桜軍の夜営の近くの林で、枝に座って一献傾けていた。

（よくない場所だ。……あそこは淵海が近い）

朱塗りの杯をぐいとあおり、枝を透かしてあかがねの月を見上げる。

（それに最近、月が赤く染まる日が多い。万宵が仕掛けてくるときが近いのか……）

真羅は二杯目をとくとくと杯に注いでから、その水面に映る自分の姿に、もう一人の自分と向かい合ったときのことを思い出した。

――前に会ったとき、万宵は絆の行方が知りたいと言っていた。綺理と冬惺の絆が壊れたら、それに惹かれていた真羅の魂がどう揺らぐのか。それを確かめたいのだと嗤っていた。

もちろん真羅は、あの二人の絆が本当に壊れるとは思っていない。たとえ二人の絆が切ない形に変わってしまったとしても、彼らが心まで敵同士になることはありえないと信じている。

だが――、と真羅はふと眉をひそめ、水面に映る自分を見つめた。

（万宵、もう一人の私。君は気づいているのかね？　君はあれで二人の絆が壊れると考えた。その意味に、そこにある重大な矛盾に、君は果たして気づいているのかね？）

凌雲城――。

淵海のほとりにそびえ立つその城は、内城とそれを囲む堅固な城壁から成っている。その城壁の、淵海に面した部分にあるのが、凌雲台と呼ばれる特徴的な高い望楼だ。この望楼こそが城の名の由来であり、広い楼上には金蘭王妃の宝剣を祀る祠も置かれている。

その凌雲台の上空を、万宵は羽ばたいていた。

旋回しながら下を見やれば、夜空の底で煌々とかがり火を灯した城がある。万宵はその城の窓の一つに綺理の姿を見つけ、同時に無意識に彼女を捜してしまった自分に嫌気がさした。

（だからキリは嫌いなのだよ。彼女といると調子が狂う）

綺理の反応はいつも予想外で、面白いし飽きないのは確かだ。だが彼女と共にいると、時折自分の存在が揺らいでくる気がする。

おそらく彼女は、真羅に対してするのと同じように万宵に接しているのだ。だから万宵は、自分の中の真羅に近い部分が引き出されてしまう。

（――どうせキリが本当に求めているのは、真羅だというのに）

万宵は苛立って、窓辺の綺理から目をそらした。

——綺理と冬惺の絆が壊れれば、真羅も《契約者》への執着を失うと思った。その様を見たいと確かに思っていた。それなのに綺理はいつまでも冬惺への想いを捨てなくて、そんな揺らがない彼女になぜかほっとしている自分がいる。

（……違う。《契約者》などにこだわるから、搦めとられそうになるのだよ）

万宵は己の思考を断ち切るように、大きく翼をはためかせた。

迷う必要などない。根本に立ち返ればよいのだ。自分が本当に求めているのは、地上に眠る湿ノ神。それだけのはずだ。

自分が本当に壊したいのも、《契約者》たちの絆ではない。この地上にあるお綺麗なものすべてだ。世を乱し、大地を荒ませ、死をばらまいて、汚れたものが地上を埋め尽くすようになればいい。そうなれば真羅も地上への執着を捨てるはずだ。

（そしてそうなれば——湿ノ神ももはや、地上を慈しんだりはされないだろう。あんなに荒んで汚れたもののために、あなたを永遠に失うのは嫌だったと、そう言えばいい。湿ノ神も眷属のいる淵海のほうこそを、美しく愛しく思われるに違いない）

鷹の黄色い瞳の奥で、翡翠の光を燃え立たせ、万宵は眼下の地上を睨んだ。

「真羅の力と体が手に入るのを待つことはない。——私はこの北の果ての地から、地上を壊す」

彼の背後では、仄赤い月光の下、夜の暗い淵海が不気味に揺らめいていた。

——来るべきときを、じっと息を潜めて待つように。

四章　赤と白の戦野で

蒼天の下に、真紅と白の軍旗がたなびいていた。

凌雲城を背に布陣した紅楓軍と、彼らと向かい合って陣を敷く白桜軍。

淵海のほとりに勇壮に翻る旗はどちらが多いとも知れず、早春の野を紅白に染め分けている。

昨年秋に始まる一連の内乱の中でも、有数の規模の会戦である。

しかし、これが二王家の王位争いの趨勢を決する戦いになるのだという目線で見れば、どちらの兵力も存外に少ないといえた。

――紅楓方は東山道を明け渡して白桜軍を自勢力の奥まで引き込みつつ、彼らの後背を狙う形で北部領主たちの軍を配置させた。白桜軍は北進を続けようと思えば、自軍の後背と補給線を守るために途中の拠点に兵力を残していくことになる。だが冬惺はその誘いに乗った。

両者はまるで示し合わせたかのように兵力を分散させ、互いが全兵力を注ぎ込んだ大会戦になることを避けたのである。

（あまり大規模の戦になれば、私一人では指揮しきれなくなる。白桜の冬惺と正面切って対決

するには、お互いこのくらいの兵力が妥当だろう。だが……）

紅楓軍の中で開戦のときを待っていた空騅は、苦々しい思いでため息をついた。

遠くにはためく白い軍旗から目をそらし、そばで既に騎乗している朔秋を見上げる。

「朔秋殿下。やはり城内にお入りください。殿下は紅楓王家の最後の一人。殿下にもしものことがあれば、紅楓方のすべての希望が失われてしまいます。――私は朔秋殿下の剣。どうか戦は総大将のこの私に任せ、殿下は城内から勝ち戦をご覧になっていてください」

相手の神経を逆なでしないように穏やかに言っても、効き目はなかった。派手やかな鎧を身につけた朔秋は、無駄に勇ましい顔つきで空騅をじろりと睨む。

「くどいぞ、空騅。何度も言わせるな。我が始祖、覇王志輝は常に自ら軍を率いて戦った。王たる者、戦を臣下に任せてのうのうと隠れているなどできるものか。それも雪辱戦となればなおさらだ！　白桜の冬惺は、今度こそこの俺が討つ！」

高らかに宣言する朔秋は、まずいことに見栄えだけはいいのだ。金蘭王家の血を引く者はたいてい容姿に恵まれているが、朔秋も例外ではなく、整った顔立ちに明るい金髪と琥珀の瞳を兼ね備えている。その彼が凛々しい若武者姿で聞こえのよいことを言えば、「殿下、ご立派になられて……！」と感動する者まで現れ、ますます朔秋は調子に乗る。

（戦の邪魔だ。おとなしく私に指揮権を一任していればいいものを）

苛立ちが顔に出ないようこらえながら、空騅は胸中で朔秋への悪態をついた。

開戦後、一時的にこちらの旗色が悪くなったと演出すれば、朔秋は真っ先に城に逃げ込むだろうか。しかし相手があの白桜の冬惺では、そんなお芝居をする余裕も与えてはくれまい。

（白桜の若将軍との勝負に集中したかったのに、一番の邪魔者は自陣の中か。……せめて戦が始まったら、こちらの指示に従ってほしいものだがな）

それが叶わないであろうことを薄々予期しながら、空騅は朔秋のそばを離れた。

一応綺理との取り引きを覚えていたので、伝令兵を呼ぶ。

「白桜の冬惺と鏡作の翔波は、可能な限り殺すなと全軍に伝えろ。朔秋殿下はその二人を生け捕りにすることをお望みだ。……もっとも、白桜のがそうやすやすと死ぬとは思わないがな」

空騅はさらりと朔秋をだしに使い、伝令兵を行かせてから朔秋のほうをちらと見た。

（しかし、急にあれほど戦に出たがるようになるとはな。誰が殿下を煽ったかは想像がつくが……やってくれる）

金髪の少女を思い浮かべて舌打ちし、空騅は好敵手のいる敵陣に視線を戻した。

（まあ、こうなっては仕方がない。私の持てる力すべてを使って叩き潰すということはできないかもしれないが、勝算自体はある）

凌雲城を囲む厚い城壁内の一室。

綺理は窓辺に立って、城砦の前野に展開する両軍を不安な思いで見ていた。かたわらでは奏珠も、開戦を控えた戦野を油断のない目つきでうかがっている。

非戦闘員が内城にこもっている中、綺理たちが戦場を見ることのできるこの部屋にいるのは、朔秋が「この俺が白桜の冬惺を破るところを、貴様にも見せてやる！」と息巻いたからだ。

（朔秋をたきつけて出陣するよう仕向ければ、空騅将軍も思い通りに指揮できなくなるはず…と思ったけど、どうなるかしら……）

綺理は、昨夜、出陣の宴の前に朔秋と話したときのことを思い出す。

『仮にも婚約者に対し、戦勝祈願の贈り物の一つもないのか、綺理？　貴様の父親の仇を取ってやろうというんだぞ。宴席に侍って舞をひとさし舞うくらいしたらどうだ？　うまく男たちの目を楽しませたら、褒美に白桜の冬惺を捕らえたとき、貴様にもやつをなぶり殺す手伝いをさせてやるよ。くっくっ、そのほうがいい悲鳴が聞けそうだしな』

部屋に押しかけてきた朔秋は、そう言って綺理を宴席に引きずり出そうとしたのだ。

しかし綺理はこれを好機とみて、挑発で返した。怖じ気づいて戦に出ないような腰抜けに、戦勝祈願をしてやる必要がどこにあるのかと。

『あなたはいまだに冬惺が怖いの？　二年前、王都に攻め上って冬惺に負け、必死にこの城まで逃げのびてきたときの記憶が蘇るのかしら？　それでよく仇を取るなんて言えるわね』

だてに十年も皮肉屋の従兄と一緒にいたわけではない。冬惺ならどんな風にするかと考えれば、皮肉も挑発的な態度もぽんぽん出てくる。

それが冬惺を彷彿させて、余計に効いたのだろう。朔秋はまんまと綺理に乗せられて、出陣の宴の最中に明日の戦は自分が指揮をとると宣言したらしい。

らしい、というのは、結局綺理は宴に出なかったからだ。男ばかりの宴では酒の入った者がなにをするかわからないから——と言って、空騅が止めに入ったのである。もっとも空騅の真意は、綺理が宴席で毒を盛ろうとするのを防ぐ、という点にあったのだろうけれど。

（本当に兵士を不調にする毒でも盛れたらよかったんだろうけど、井戸や厨は警備が厳しくて奏珠でも無理だったっていうし。それに空騅将軍が差し入れてきたあの草子本自体、私が毒を使おうとすることに対する牽制……ううん、今はもうそれを考えても仕方ない）

綺理は頭を振ると、遠くにはためく白の軍旗をじっと見た。

もしここで冬惺が敗れ、捕らえられれば、総大将を失った白桜軍の動揺は計り知れず、総崩れになりかねない。——そして空騅との取り引きも、絶対とはいえない。

血まみれで倒れていた父の姿を思い出す。綺理の脳裏で、その遺体の顔が冬惺や翔波の顔に変わる。不吉な想像を振り払えずに、綺理は組み紐のお守りをぎゅっと握った。

（二人とも、どうか無事で……！　願わくは冬惺に勝利を——！）

——そしてまた、あなたに逢いたい！

「……綺理？」

ふと誰かに呼ばれたような気がして、冬惺は顔を上げた。

視線の向かう先は、紅楓の軍勢のさらに向こう——凌雲城。

（——まさかな）

あの城に綺理がいる、紅楓軍さえ破ればまた綺理に逢える——と、ずっとそう思っていたから虫のいい幻聴を聞いたのだろう。いつかのように魂だけの綺理が現れることはない。

「冬惺公閣下？　なにか……？」

怪訝な顔になった翔波に、冬惺はいや、と首を振った。中天にかかった太陽を見上げ、琥珀の瞳を険しくする。

「時間だ。——始めよう」

開戦を告げる鏑矢の音が、大気を切り裂いた。

「——白桜王家のために！」

「——正統の王、春怜陛下のために！」

「――冬惺公閣下のために！」
戦鼓と鬨の声が野に響き渡り、白桜軍は前進を始めた。大盾を構えた槍兵隊を前に、弓兵隊が敵軍の前面に矢の雨を降らせる。紅楓軍も弓矢で応戦し、矢が飛び交う。
紅楓軍は前衛中央に歩兵隊を配し、その左右に弓兵隊を置いている。弓兵隊の前に、細い丸太を組んだ柵が立てられているのが、近づくにつれてはっきりと見えてきた。
馬防柵――騎馬兵の突進を防ぐ防御柵だ。
「はっはあ。あの馬防柵、ずいぶんと念の入った作り方をしているようですな。あれでは乾ノ術で吹っ飛ばすわけにもいきますまい」
「こちらの得手が騎兵隊の突撃であることくらい、あちらもわかっている。あの鷹居の空騅が、そうやすやすと突撃を許してくれるはずがないだろう」
麾下の将の言葉に、冬惺は淡々と返した。そのそばで、翔波がちらと冬惺を見る。
「閣下。馬防柵のない無防備な歩兵隊に突撃するわけにはいかないんですか」
「阿呆。今あそこに突っ込めば、両脇からいい弓矢の的にされるだけだ」
冬惺は肩をすくめると、敵陣を睨んだ。
「あの歩兵隊は囮だろう。鷹居の空騅はじきにあれを前進させて誘いをかけてくるだろうが、乗るな。――機を見て馬防柵を迂回し、敵左翼を叩く」

「白桜の冬惺は、歩兵隊を狙って突撃するような愚は犯さない。馬防柵を迂回して、こちらの左翼側面に攻撃を仕掛けようとするでしょう」

紅楓軍の本陣では、空騅が布陣図を指さして説明していた。

紅楓軍の正面には馬防柵、右方には淵海、後背には凌雲城がある。馬防柵の切れ目にいる歩兵隊を狙わないなら、白桜軍は大きく迂回して紅楓軍の左方を狙うしかない。

「ですが我が軍は、もともと左翼に兵力を集中させています。白桜軍の騎兵隊が迂回してきても、そこには我が軍の主力と、ついでに伏兵が待ち構えている。知らずに突撃したが最後、騎兵隊は終わりです。――必ず騎兵隊を率いている、白桜の冬惺もね」

空騅が言うと、朔秋はふんと鼻を鳴らした。

「それでいつやつらが迂回してくると言うんだ？　さっきから、馬防柵の切れ目から兵を出したり引っ込めたり。やつらも進んでは引っ込んで、まともに刃を合わせすらしない！　これでは埒が明かないだろうが！」

「相手が焦れて勝負に打って出るのを待つんです。睨み合っていれば必ず相手が動く。言葉による挑発でこちらの軽挙を誘ったりもするかもしれませんが、無視してください」

噛んで含めるように言い聞かせると、朔秋は「なるほど、わかった」とうなずいた。邪魔者が引き下がって、空騅はほっとする。

――だが空騅は、自分が朔秋の「なるほど、わかった」を甘く見すぎていたことに、ほどなくして気づかされた。

当分は戦況に変化がないだろうと踏んだ空騅は、長期戦に備えて、兵に片手間に早めの昼食を摂らせようとした。そしてその手配をしていたとき、予期せぬ戦鼓を聞いたのだ。

紅楓軍内で鬨の声が上がり、歩兵隊がどっと白桜軍に攻めかかっていく。

「殿下!?　なぜ勝手に歩兵隊を突出させたんです！」

「勝手にとはなんだ。指揮は俺がとると宣言したはずだぞ！――要するに、騎兵隊が浮き足立って飛び出してくればいいわけだろう？　ならば中央の歩兵隊を出してやつらを蹂躙してやれば、白桜の冬惺は悲鳴を上げて駆け出してくるはずだ！」

自信満々に言う朔秋に、空騅は一瞬殺意がわいた。急いで兵を退かせようとしたが、伝令兵は間に合わなかった。歩兵隊は白桜軍の陣の中央に切り込み、ぐんぐん押してゆく。

「ははっ、その調子で攻めて攻めて攻めまくれ！　及び腰の白桜軍など恐るるに足らず！　このまま攻めの一手で完全なる勝利を得るぞ！」

今にも中央突破しようとする歩兵隊に、朔秋はいっそう自信満々に指揮刀を振り回し、紅楓軍は沸き立つ。だがそれが白桜軍の策であることに気づかない空騅ではなかった。

（白桜の冬惺は、わざと兵を退かせてこちらの歩兵隊を陣中深くに引き込み、こちらの陣を二分させた。いや――それだけではない！）

歩兵隊に分断された白桜軍の右翼が、すばやく陣形を変えてこちらに向かってくる。歩兵隊の脇をすり抜けるように進撃してくるその速度は、並大抵ではない。

「な、なんだあれは！」

朔秋がぎょっとしたように叫ぶそばで、空騅は薄紫の瞳をすっと細めた。

（そういうことか、白桜の。こうなることを予期して、あらかじめ右翼に機動力の高い兵を集中させておき、その兵力すべてをぶつけてくるつもりか！）

少数の騎兵隊を迂回させて相手の側背を突くのではなく、右翼部隊を丸ごと急進させて、戦いの中心を一気に馬防柵のこちら側に移す。冬惺が狙っているのはそれだ。――白桜軍の右翼部隊と、紅楓軍の主力部隊が、正面切って激突することになる。

（布陣はまだこちらが有利だが、白桜の若将軍なら五分五分の戦いに持ち込んでくれそうだ。これはわからなくなってきたな）

互角の勝負を楽しめそうな予感に、空騅は一瞬心を浮き立たせた。だがすぐに己の最大の敵が陣中にいることを思い出し、胸中で舌打ちする。

（――殿下がこれ以上余計なことをしなければ、だが）

「全速前進！　騎兵は全員騎乗しろ！　迂回して敵陣左翼を急襲する！」

冬惺の命令に応じて、軽装の歩兵がどっと走り出す。今まで槍を構えて槍兵のふりをしていた兵の一部が動き、陣の奥に待機させていた馬に次々に乗った。

白桜軍の騎兵が急に増えたのを見て浮き足立ったか、紅楓軍の動きが乱れる。

「鞍作の。五十騎率いて先行し、敵の伏兵を叩け！」

「はっ！」

武官の一人が手勢を連れて飛び出し、焦って姿を現した前方の伏兵隊へ突撃する。

（空騅は指揮系統を掌握しきれていないのか？　先ほどから戦鼓の合図が滅茶苦茶、敵の動きが混乱している。独立心の強い北部領主の手勢同士が連携を取れていないか――いや、この乱れっぷりは、二年前の朔秋との戦を思い出すな）

先行した手練の騎兵の一隊が、敵の伏兵隊を突き崩し、蹂躙する。

士気はますます上がり、勢いに乗った白桜軍は、声だけで敵を圧倒せんばかりの闘を作る。

「――冬惺公！　我らが冬惺公！」

「――白桜王家のために！」

（流れはこちらにある。騎兵隊で敵の主力部隊を分断し、そこにこちらの歩兵隊をなだれ込ませれば――いける！）

冬惺は前方を見すえ、馬上ですらりと太刀を抜いた。

――そして、海鳴りのような音を聞いた。

紅楓軍は命令系統が混乱し、万全の備えだった左翼の陣も、白桜軍が来ないうちから乱れていた。迫りくる白桜軍に朔秋が怯えた声を上げ、動揺が広がる。

（私の失策だ。これがいたら勝てる戦も勝てなくなることに、もっと早く気づくべきだった）

空雛はきっと朔秋を見ると、乾ノ術を放とうと構えている彼に鋭く言い放った。

「殿下、無闇に乾ノ術を放てば味方が混乱します！　それにあなたの乾ノ術は強すぎる。乾ノ力の強いこんな真っ昼間に、日なたで炎でも放てば、咎負いになりかねません！」

本来、乾ノ術は、湿ノ力を払って淵妖を退治するためのもの。その乾ノ術で直接人を殺めれば、乾ノ神の定めた理に触れ、その者は『咎負い』として乾術師の力を失う。

乾術師にとっての最大の禁忌に、朔秋はぎくりと手を下ろした。その隙に空雛は近くの兵を集め、朔秋を安全な城内へ連れて行くよう手早く命じる。

だが邪魔者を厄介払いしたときには、頼みの伏兵隊はもう崩されていた。最初におびき出された歩兵の大部隊も、退却する白桜軍左翼部隊を追ってさらに遠くへ行っているだろう。指揮系統が完全に分離して、急遽呼び戻すことも叶わない。

（――空羽さえいれば。彼女がいてくれれば、離れた隊へもいくらでも命令が出せるのに）

空雛は急いで陣容を立て直しながら、頼れる相棒の不在に歯噛みした。空羽を乗っ取った万

宵が上空を悠々と飛んでいるのを、忌々しい思いで見上げる。
（こちらが態勢を整えるより、白桜軍のほうが早い。間に合わない――！）
――そのとき。

（――！）
息を詰めて戦場を見守っていた綺理は、突如耳に飛び込んできた『声』に慄然とした。
〈来タヨ〉〈来タヨ〉〈時ガ来タヨ〉
〈行クヨ〉〈行クヨ〉〈我ラガ王ノ呼ブママニ〉
人ならぬその声は、淵妖のものだ。綺理は、万宵を気にして今までに何度か聞いてみたことがあるが、そのときにはこの一帯に淵妖の声などまるでしなかったのに。――いや。今にして思えばあの不気味なほどの静けさは、万宵が淵妖の声を封じていた証だったのだ。
〈目指セ〉〈目指セ〉〈王ヲ目指セ〉
（集中しなくても声が聞こえるほど強くて、近い！　いったいどこから――？）
思わず窓から身を乗り出す。
そして綺理は、晴天の下で薄青に揺らめいていた淵海が、濁った色に変わっているのを見た。

その淵海の表面が、大きく盛り上がる。ドドォと濤声を立て、紺碧のうねりとなって戦場に押し寄せる！

「なっ……、淵海が――!?」

隣で奏珠が驚愕の声を上げる。

淵海があふれたと見えたのは、数多の淵妖が怒濤のように地上に這い上がってきたからだった。紺碧の泥の妖が、群れを成して白桜軍になだれかかっていく。

――『あなたは、海からの使者が玉をさらっていくのを見送ることになるでしょう』

綺理の耳の奥で、不吉な占いが繰り返される。

脳裏に、玉造軍が崩れ去ったときの光景が蘇る。

――だけど、今度は！

（むざむざと見送ったりなんかしない！）

綺理はすばやく身を翻すと、室内にいる護衛兼監視の兵たちに叫んだ。

「大変よ！　淵海があふれて淵妖がこちらに向かってくる！　急いで皆に報せて！」

よく見れば、淵妖の狙う先が白桜軍であることはすぐにわかる。しかし窓の外に紺碧の波を見て動転した二人の兵は、綺理の言葉を疑わずに扉へと向かった。

彼らが背を向けた瞬間、綺理は床を蹴った。

「奏珠！　右、お願い！」

叫ぶや、左の兵のもとへ一気に走る。ぎょっと振り返ったその兵の顔めがけて、上衣の胸元から出した小瓶の中身をぶちまける！

「――！」

刺激性の薬を目に浴びて、兵がうずくまる。同時に奏珠が睡眠薬を塗ったかんざしを投げ放ち、鎧の継ぎ目を突き通してもう一人の兵を倒した。

続いて彼は、目を押さえてうめく兵に迫り、手刀であっという間に昏倒させる。

「まったく……。急になにをするんですか、あなたは」

「ついてきて！　いざとなったら援護よろしく！」

綺理は兵の腰にあった短刀で長い裳を走りやすい丈に切り裂き、部屋を飛び出した。

城壁内の廊下を走るとすぐに数人の兵に行き合うが、制止される前にはったりを叫ぶ。

「淵妖の大群が押し寄せてくるわ！　あちらには私たちが伝えに行くから、あなたたちは内城へ報せに行きなさい！」

これでも瑛国屈指の大貴族、玉造家の姫として生まれ育った身だ。本気で威圧的に命じれば、告げられた内容に動揺した兵たちは条件反射のように従う。

その脇を駆け抜けていく綺理に、後続の奏珠が呆れ声を出した。

「とっさの機転でよくぞまあ。あなたには間者の素質がありますよ。――ですが綺理さま、城門は逆方向ですよ。いったいどこに行くつもりです？」

綺理は階段を駆け上がりながら、きっぱりと答えた。
「――凌雲台よ」

べちゃりべちゃりと、泥の化け物が迫ってくる。
濁流のように押し寄せてくる淵妖の大群に、白桜軍は恐怖の渦に陥れられていた。
「え、淵妖だ！　淵妖が淵海からあふれてきたぞ――！」
「馬鹿な！　淵妖がこれほど一度に上がってくるなど……っ」
「に、逃げろ、逃げろぉおおお！」
徒歩の兵たちは慌てて退こうとして、次々に味方にぶつかった。折り重なって倒れ、ますます恐怖と動揺が広がる。
「うわっ、うわあああっ。ば、化け物！」
「浮き足立つな！　兵は乾術師に道を空けろ！　乾術師は二人一組になって、詠唱の合間を狙われないよう交互に火球を放て！」
冬惺の周囲はまだ落ち着いているほうだった。冷静に指示を下す総大将に、兵たちは我を取り戻す。だが悲鳴と絶叫の中では、冬惺の声もそう遠くへは届かない。

「翔波。淵妖の群れの向こうにいる左翼部隊に、乾ノ術で光の矢を二度放て！　それで退却の合図にな――、っ！」

横合いから飛びかかってきた淵妖を、冬惺は太刀で両断した。返す刀で、そばの兵をのみ込もうとしていたもう一体を斬り払う。

「――を射る弓取り、輝ける征矢で暗がりを貫け！」

「――に来たりて万有を食む牙となれ！」

あちこちで乾ノ術の詠唱がして、炎の光が視界に閃く。翔波が鏡の秘術で淵妖を凍らせ、兵士がたいまつの炎で淵妖を砂にする。

だが淵妖はあとからあとから押し寄せて、火球をかいくぐったものが逃げようとする兵の背に襲いかかる。味方の恐慌が伝播して、紅楓軍と交戦中だった兵たちも陣を崩して逃げ出す。

冬惺が兵を叱咤して回らなければ、あっという間に総崩れになっていただろう。混乱した白桜軍の間を駆け回り、淵妖を斬り払って兵を退却させながら、冬惺は頭上の鳥影を睨んだ。

（万宵……っ）

――戦の最中に淵妖を使えば紅楓軍が巻き添えになるので、戦闘中に大がかりなことは仕掛けてこないと思っていた。仕掛けてくるなら乾ノ術を使えない夜だと踏んで、昼に開戦した。

しかし万宵はそんな予想をあざ笑うように、戦いの重要な局面で淵妖をあふれさせ、白桜軍だけを狙って襲わせている。

（くそっ……。このままでは淵妖に対しても、紅楓軍に対しても、持ちこたえるのは無理だ！）

一方の紅楓軍も、突然の淵妖の襲来に少なからず動揺していた。

だが淵妖の大群が白桜軍の真横に突っ込み、白桜軍の攻撃がやむのを見ると、「助かったか……？」とつぶやく者さえ現れた。

「将軍閣下。白桜軍は混乱し、完全に陣形を崩しておりますが……」

「ああ、そのようだな」

戸惑いがちに進言してきた部下に、空騅は苦々しく応じた。

「淵妖がいつこちらに襲いかかるとも知れない。乾ノ力の守りがある城内のほうが安全だろう。――兵を引け。凌雲城へ撤収する！」

撤退の合図の軍鐘が鳴り響く中、空騅は淵妖に襲われて逃げ惑う白桜軍を見やった。

あの淵妖たちが紅楓軍を襲わないであろうことはわかっている。今攻撃を仕掛ければ白桜軍はたやすく瓦解し、簡単に勝利を得られることもわかっている。

だがそれでは、「紅楓の勝利を淵妖が助けた」という黒い噂が残る。紅楓方に《契約者》がいて大淵妖に勝利を与えられたのだ――という噂が流れれば、紅楓方は信望を失う。

――そして、なによりも。

空騅は凌雲城へと馬首をめぐらせながら、妖雲が流れ来つつある空を見上げた。上空を舞う鷹が、こちらを面白がるように見ているのを感じる。

好敵手との勝負に水をさしてくれた大淵妖をきつく睨んで、空騅はつぶやいた。

「こんな助力は望んでいないぞ、化け物……」

凌雲台――。

綺理たちが急な螺旋階段を駆け上がって楼上に出ると、詰めていた兵たちが振り返った。

演技ではなく息を切らせていた綺理は、まろぶように石床に膝をつく。奏珠のほうは、立ったまま侍女装束の胸を押さえて息を継ぎ、涙声を上げた。

「中に……城壁の中に、淵妖が……っ。助けて……！」

迫真の演技で階段の入り口を指さす奏珠に、兵たちが当惑顔になる。

「――馬鹿な。淵妖はすべて白桜軍に向かっているはずだ」

「だが……先ほど行った伝令兵が戻ってこないぞ。下からの連絡もずっと途絶えて……」

彼らはふっと黙ると、緊迫した顔で駆け寄ってきた。そして螺旋階段をのぞきこんだ途端、背後から奏珠の強烈な足技を食らい、三人次々に階段を転がり落ちる。鼻の下を伸ばして綺理

に寄り添おうとしていた兵も、振り向いたときには目の前に星を見ていた。

奏珠は四人の兵をあっという間に昏倒させると、階段の入り口の戸を閉めた。呼吸を整えて立ち上がった綺理を見て、これみよがしにため息をつく。

「これだけ派手に動いたらもう誤魔化せませんよ。……で、目的はそれですか？」

綺理が向かった先は、望楼の上という場にあっては不釣り合いな祠堂――初代志輝王の王妃、金蘭が使っていたという宝剣の安置された小さな祠だ。

祠の鍵を奏珠に針金で開けてもらい、軋む扉を開く。

中に入っていたのは、金銀と玉で飾られた煌びやかな古代剣だった。手に取るとずしりと重いが、その柄は不思議としっくり手に納まる。

（これが、火雷明王の初代招請者、金蘭さまの剣……）

すらりと抜くと、白刃が陽光を弾いて煌めいた。金蘭王妃はこの宝剣を火雷明王の依代に使っていたのだろう。乾ノ力の残滓のおかげで、数百年経った今も直な刀身には錆一つない。

「言っておきますが、それには神宝といえるほどの力はないと思いますよ。だいたいそれに淵妖を打ち滅ぼすだけの力があるなら、この状況で誰も取りに来ないはずがないでしょう」

奏珠が冷めた調子で言ったが、綺理は構わなかった。高くて、日のあたるところで、直な両刃剣さえ手に入ればよかったのだ。この城砦の兵は皆刀しか持っていなかったから、一番確実に見つかるのがこれだったというだけ。

「お願い、奏珠。凌雲台に誰も上がってこないように見張ってて。それともし鷹が私を狙ってきたら、追い払ってほしいの。――あと、これから私がすることを、どうか秘密にして」

訝しむ奏珠の前で、綺理は宝剣を石床の隙間に突き立てた。

直立し、中天の太陽に向かって右手をまっすぐに掲げる。

胸壁の向こうから戦の喚声が聞こえるが、今は見ない。気にしない。心を静めて口を開く。

「――帰命したてまつる」

詠唱を始めてすぐに、戦場の上を旋回していた鳥影がこちらに向かってきた。

「天の灯明より分かたれし、金色の翼にて舞える者、雷霆の咆哮を従えし乾ノ眷属に」

綺理のもとに乾いた風が吹き下りてくるのを感じたのか、背後で奏珠が息をのんだ。右手の先で旋風が熱を帯びる。風の音に混じって、万宵の重い羽音が聞こえてきた。

「謹んで願わくは、真赤き日輪のかけらを鎧い」

こちらに矢のように飛んでくる鷹を見すえたまま、綺理は呪文を紡いでいく。

「万雷を紡ぎし灼熱の剣をとり――」

間一髪、奏珠が鷹めがけてかんざしを投げ放った。鷹はかんざしをかわして綺理の眼前で急上昇に転じ、その羽ばたきが綺理の前髪を煽る。

そして綺理は、呪文の最後の句を力強く詠唱した。

「天の雷窟より降臨したまえ！」

右手を勢いよく振り下ろし、その名を呼ぶ。

「――大天火雷金翅明王!!」

炎の柱が燃え立った。

紅と金。二色の炎の螺旋が瞬時にほどけ、緋色の髪と金の瞳、蘇芳色の鎧と金色の炎の翼を持った長身の青年の姿になる。

「降……神、術……！」

顕現した乾ノ神衆に奏珠が呆然とつぶやき、万宵も邪魔をあきらめたのか羽音が遠ざかる。

「――我が姫。私が力になれるときが来たか」

火雷明王の低い美声に、綺理は大きくうなずいた。宝剣の柄に手をかける。

「淵海から淵妖の大群があふれ出ています。御力を貸してください。――乾湿の均衡を保つ、調停の力を！」

綺理が宝剣を両手で構えると、火雷明王は「懐かしい剣だ」と金の瞳を一瞬やわらげた。それからまなざしを険しくし、綺理と互いに目を見交わす。

「宿ってください、大天火雷金翅明王！」

「我が姫の望みのままに。金蘭の末裔の姫！」

再び炎の螺旋に身を変えた火雷明王が、宝剣の中に吸い込まれる。
火の剣――。綺理の手の中で宝剣が紅の光を帯び、刀身が凍れる炎のように赤々と輝く。
火雷明王を宿したその剣を手に、綺理は凌雲台の端へ駆けた。
胸壁によじ登り、すっくと立つと、淵妖の大群が襲来した戦場が眼下に見える。
紺碧に変じた淵海から、紺碧の淵妖の潮が押し寄せ、淵海と地上の境界がわからないほどだ。
もしも白桜軍が、馬防柵を迂回するために淵海の岸から離れていなかったら、今頃はもう全軍が泥にのみこまれていただろう。
今でさえ、はためく白い軍旗の間に紺碧の妖が入り込み、逃げ惑う兵が泥に引きずりこまれていく。渦巻く湿った風に乗って、恐怖の叫びが聞こえてくる。
（あそこに、冬惺や翔波がいる――）
綺理は火の剣を水平に構えた。剣の中を廻り脈打つ、強大な乾ノ力に意識を集中させる。
無闇やたらにこの剣の力を解き放てば、強すぎる乾ノ力が荒れ狂う炎となって、きっと人も馬もすべてを焼き滅ぼしてしまうだろう。必要なのは、ただ、乾湿の均衡を元に戻す力。
――この地上を、大切な人たちを守る力。
〈頼む、キリ。守れるのは君だけだ〉
いつかのように、ずっと遠くから真羅の声が耳に届いた。
まわりに陽炎が立ち昇り、綺理は柄を握る手に力を込める。思いを込める。決意を込める。

あの場にいる彼への想いも、すべて込める。

（――守りたい）

陽炎の向こうの地上を見すえて、綺理は火の剣を真横にすべらせる。

そして。

――太陽のかけらと見紛うほどの、まばゆい金の光がほとばしった。

その瞬間――、戦場にいる者すべての視界を、金色の光が埋め尽くした。

乾いた風がゴゥと吹き降り、地表に重く垂れ込めていた湿った気を吹き払う。

パキン、と土器を割ったような音がした。その音は凄まじい速さで連鎖していき、何千何万もの土器が砕け散っていくような轟音が響き渡る。それにつれて、端にいた淵妖から次々に砂と化していき、紺碧の泥の波が砂塵を上げて引いていく。

光と砂塵がやんだとき、戦野からは紺碧の泥が一掃されていた。白桜軍の兵士たちは、先ほど目の前で泥にのまれたはずの仲間が、砂をかぶってぽかんとへたり込んでいるのを見た。

「た、助かった……」

「今の光は……？」

兵たちがざわめき、安堵の息をつく。じきに誰からともなく、光の来たほうを見上げた。
「――あそこだ！　凌雲台からだ！」
「なんと、凌雲台の上に神々しい光が……！」
「見ろ！　光の中に誰か立っているぞ！」
皆が指さし、口々に叫ぶ。それは、つい撤退の足を止めた紅楓の軍勢でも例外ではなく、どよめきが戦野中に広がる。
その中で、冬惺はまばたきも忘れて凌雲台を見つめていた。
高い望楼の上で金色の光が輝いている。その光の中に、剣を手にした少女が立っている。乾風になびく長い髪が金に煌めき、陽炎の中でその背に金炎の翼が見えたような気がした。
遠くまぶしく、その容姿は判然としない。だが彼女が誰か、冬惺にわからないはずがない。
「綺理――」
焦がれるようにつぶやく。思わず光のほうへ手を伸ばそうとして――我に返ってその手を下ろし、ぎゅっと拳に握る。
「――凌雲台には金蘭王妃の宝剣がある！　金蘭王妃の加護だ！」
兵たちの思考を誘導するように叫ぶと、金蘭王妃、と繰り返す声が波及していった。
「金蘭王妃だ！――金蘭王妃の再来だ！」
「金蘭王妃が守ってくださったんだ！」

凌雲台の光は消えたが、兵たちは目にした奇跡に沸き立ち、歓呼の声が渦をなす。
しかしそれも長くは続かない。止まっていた時が動き出し、紅楓軍が退却を再開する。
凌雲城へと引いていく真紅の旗印の軍勢に、冬惺はぎくりとした。
（まずい。このままやつらが城に立てこもったら――）
白桜と紅楓の決着がつくのが長引くだけではない。――綺理が。凌雲台にいる綺理が、降神術の使い手と知られた上で紅楓軍に捕らえられる！
冬惺はすばやく馬首を返し、太刀の切っ先を凌雲城に向けた。
「紅楓軍を追え！――紅楓軍に続いて、凌雲城へ突入する！」

今こそ拙速を貴ぶとき。
白桜軍は陣形が完全に復活するのを待たず、撤収する敵軍をどっと追いかけた。
もともと、機動力の高い軽装の兵や騎兵ばかりの隊だ。それに金蘭王妃の加護のある場へ向かうと思えば士気も上がる。勢いを得た白桜軍は、なだれを打って紅楓軍に追いすがる。
その怒濤の追撃の中で、冬惺は不意に自分の肩に重みがのるのを感じた。
「真羅？　どうした？」
横目で見れば、肩口でなびく布に身を隠すように、翡翠の瞳の子狐が乗っている。



だが真羅は、基本的に万宵がいる場には憑依を恐れて近寄らない。その彼が姿を現したというのは、よほどの事態だ。案の定、子狐真羅の瞳には剣呑な光が宿っている。

「――少年。天と海とを見てみたまえ」

冬惺は言われるままに天を仰ぎ、はっとした。

妖雲が吹き払われていない。

淵妖の呼んだその雲は、決して太陽を隠すほど垂れ込めているわけではない。しかしあれだけの乾ノ力が放たれたあとも、雲は吹き払われず、いまだに少しずつ蒼天に流れ来ている。

(！　淵海の色も――元に戻っていない!?)

「まだ終わっていないのだよ。先ほどキリが払った淵妖の群れは、いわば第一波」

「な――」

慄然とした冬惺に、真羅は紺碧に濁ったままの淵海を睨んで低く言う。

「万宵の魂が地上に在るからなのだよ。妖王の呼び声が確かな目印となればこそ、淵妖は迷わず淵海の水面を――地上という異界への扉を抜けられる。そして万宵は、淵海の浅みに集めた淵妖を、すべてこの地からあふれさせる気だ」

――じきにまた、もっと大きな泥の津波がやってくる。

暗に告げられた恐ろしい内容に、冬惺はぞっと血の気が引いた。だが真羅は「まだしばらくは大丈夫のはずだよ」と、なだめるように尻尾を振る。

「キリがいるのでね。今しばらくはキリと雛鳥が持ちこたえてくれるはずだ。だが――」
真羅は空を見上げ、凌雲城へと羽ばたいていく鳥影を見すえた。
「――万宵。私たちの決着も、そろそろつけるときか……」

凌雲台からは戦野が一望できる。綺理は淵妖を一掃したあと、退却する紅楓軍を追って白桜軍が凌雲城へ向かってくるのを見て、奏珠に白桜軍の手助けに行くよう頼んだ。
火の剣を手にした綺理を呆然と見ていた奏珠は、乾ノ神衆の加護があれば綺理は一人でも大丈夫だと考えたのだろう。足早に階段へ向かっていった。
だが奏珠を行かせたあとも、綺理は火雷明王を剣に宿らせたまま、油断なく淵海を見張っていた。柄を通して、火雷明王の声が脳裏に流れ込んでくる。
『金蘭の時代には、この城は淵海の縁に接してなどいなかったのだがな。時を経るうちに少しずつ岸が削り取られ、ここまで淵海が迫ってきていたか……』
綺理が立っているのは、淵海に面した胸壁の上だ。遥か下の淵海から、皮膚をざわざわさせる生ぬるく湿った風が吹き上がってくる。
（『淵海より吹き来る風は禍つ風』だっけ……）

乾ノ術の呪文の一節を思い出しながら、息を詰めてうかがっていると、暗い紺碧の水面がゆらりと揺れた。再び淵海の表面が盛り上がる。——だが。

（——っ!?）

先ほどと違い、その盛り上がり方が尋常ではない。紺碧の泥はぐんぐん高さを増し、城壁に匹敵するほどの大津波となって押し寄せてくる！

戦慄して火の剣を構えた綺理に、火雷明王が剣の中で叫んだ。

『無駄だ、我が姫。あれが打ち寄せれば、たとえ私の力のすべてを暴走させようとも砂に変えきることは叶わぬ！』

「じゃあ、どうやって！」

『撃滅はできぬが、地上と淵海の間に結界を張ることはできる！——剣を突き立てよ！』

地上と淵海の間——。まさに綺理の立っている場所がそれだ。

綺理はとっさにくるりと剣を返し、その切っ先を勢いよく足元に突き立てた。

瞬間、剣から万雷が奔った。

大気を震わせる雷鳴と共に、金色の稲妻が淵海の縁に沿って宙を翔る。紺碧の巨濤の前に、一瞬で稲妻が網目のように張りめぐらされ、かっと閃光を放った。

「————！」

巨大な力と力が眼前でぶつかり合い、綺理を包む陽炎の帳が大きくたわむ。眼下で紺碧の泥

の津波がドゥと逆巻き、うねりが砕けて引いていく。
綺理はほうと安堵の息をついた。淵海はまだ波立っているが、この火雷明王の剣の結界がある限りは、淵海があふれることはないだろう。
綺理は柄から手を離し、剣をそこに突き立てたままそっと胸壁から下りた。
あの大津波が迫ったときには、白桜軍も紅楓軍も既に郭の中に入っていたはずだ。戦の中心から分断されていた白桜軍の左翼部隊と紅楓軍の歩兵隊も、それぞれ別の方向に退却して淵海から離れている。波音や雷鳴は響いただろうが、今の一幕を見た者はそうはいまい。
（でも最初に派手に淵妖を退治したから、いつ誰が様子を見に上がってきてもおかしくないよね。……どうしよう。この剣は私以外抜けないはずだけど、放っておくのも不安だし）
淵妖の脅威がひとまず去ると、今度は城内のことが気になってきた。今まで意識から閉め出していた戦の喧騒が、ひどく耳に迫って聞こえる。――階下はどうなっているのだろうか。白桜と紅楓の戦いの行方は。冬惺や翔波、それに先に下へ行った奏珠は無事だろうか。
（心配……だけど、闇雲に様子を見に行くわけにもいかないし。というか私、たぶんもう紅楓軍には敵だとばれているわよね。最初に上がってくるのは白桜軍と紅楓軍のどっちだろ……）
なんにせよ、せっかく望楼の上にいるのだから、まずは郭の様子を見てみよう。
そう思って、反対側の胸壁へ走りかけたときだった。
「――美しいですね、姫君」

かけられた声に、はっと横を見る。

いつの間にか階段の扉がこじ開けられていた。悠然と腕を組んだ一人の男が、扉口にもたれるように立っている。薄紫の瞳をまぶしそうに細めて言う。

「乾ノ神衆の力を使っているとき、あなたの背に炎の翼の幻が見えた。こうして見ると、ますますあなたが欲しくなる。手に入れるべき運命だと、信じたくなる」

「……空騅、将軍」

綺理は相手の目的をはかりかねて、じりっと後ずさった。紅楓軍が城内に戻ったら空騅がここに来るだろうとは思っていたが、今は白桜軍も城内に入って戦闘中のはずだ。彼がそれを捨て置いてやってきたのは、既に白桜軍が制圧されているからか——あるいは、その逆か。

「ですがあなたを手に入れようとしたのが間違いだったのかな。姫君の侍女もとんだ食わせ者だったそうですし、姫君を早々に排除しておけばこの戦でも朔秋殿下の邪魔立てはなかった」

階下で目を覚ました兵から、奏珠に暗器で襲われたことを聞いたのだろう。報復、という単語が脳裏をかすめ、綺理はそっと袖口の隠しを探る。

「野に咲く花にも毒はあります。花を手折ろうとするなら、相応の覚悟をすべきでしょう」

時間稼ぎに言葉を返すと、空騅がくっと口の端を上げた。こちらに向かって一歩踏み出す。

「確かに。美しい花には棘があると言いますが、姫君の場合は毒ですね。棘は抜いてしまえば問題ないが、毒は取り込んだが最後、じわじわ回って花盗人を死に至らしめる」

「……それで、仕返しに花を枯らしにでも来ましたか？」
じりじり下がる綺理に、空騅は歩み寄りながら人好きのする笑みを浮かべた。
「まさか。――毒を食らわば皿まで、ですよ」
直後、空騅が綺理のもとに一気に距離を詰めてきた。
「！」
疾い。綺理がはっと身構えたときには、もう空騅が目の前にいる。
慌てて飛びのこうとした矢先、綺理の体がふわっと浮いた。足払いをかけられたのだ、と気づいたときには、空騅の腕に捕らえられたあとだった。
綺理はあっという間に両腕を後ろで押さえられ、とんと膝裏を押されて石床に膝をつかされた。抵抗らしい抵抗もできぬまま、右手に持っていた薬を塗った針も取り上げられる。
「は、離してください！」
後ろから自分を拘束している相手を肩越しに睨むと、空騅は本当にすまなそうに言った。
「すみません。姫君を傷つけたいわけではありませんが、余計な動きをされると困るので拘束させていただきます。――手首が擦りむけますから、あまりもがかないほうがいいですよ」
綺理はそのまま細布で後ろ手に縛られ、宝剣の祠のもとへ連れてゆかれた。石床に座らされた状態で、祠を囲む石の柵にくくりつけられる。
「将軍！　いったいなにを……っ」

空騅は一旦綺理から離れ、指笛を高く鳴らした。彼は左手に舞い降りてきた万宵になにごとかを告げ、その脚になにか結びつけると、腕を振って飛び立たせる。

（なに……？　空騅将軍はいったいなにをする気なの？）

綺理は空騅を目で追い、彼が次に歩んだ先を見て鋭く叫んだ。

「その剣に触らないでください！」

火の剣を突き立てた胸壁は、綺理のいる場所から七、八歩の距離だ。思わず制止に入ろうとしたが、手首をしっかりと縛り付けられていて立ち上がることさえ叶わない。

「その剣には乾ノ神衆が宿っています。招請者以外が――私以外の者が使おうとすれば、火傷だけではすみませんよ！　魂を灼かれ、正気を奪われたくなかったら、触れないでください！」

これははったりではない。

大淵妖の憑いた妖刀を《契約者》以外が使えば、湿ノ力で正気を奪われるように。乾ノ神衆の宿った神剣を招請者以外が使えば、剣の中を廻る乾ノ力に心も体も灼かれるのだという。

「……ほう？」

空騅が剣に手を伸ばしたまま、面白がるような目で綺理を見た。剣を奪われないための嘘だとでも思っているのだろうか。ならば、と綺理は言葉を重ねる。

「さっき淵妖の津波を防いだのを見ませんでしたか？　その剣の力で地上を守る結界を張っているんです。抜けば、また淵妖が押し寄せてきてしまいます！」

なるほど、と空騅が手を引っ込める。その様にほっとしてから、綺理はふといつぞやの疑問を思い出した。――今なら万宵は、どこかへ飛び立って近くにいない。

「……空騅将軍。あなたは万宵が淵妖を操って北瑛島を淵海に沈めようとしていることを、知っているんですか？」

問うと、空騅は黙って肩をすくめた。

それが「知っている」なのか「知らされていなかったが、そんなことではないかと薄々思っていた」なのか綺理が判断できずにいると、不意に彼が意味ありげに口元を歪めた。

「あの鷹ですが、今、白桜の若将軍を呼びに行かせました」

（!?）

綺理はびくりと震えた。空騅が表情を冷然としたものに変えて歩んでくる。

「姫君を無事に取り戻したかったら一人で凌雲台に来るように、との伝言を持たせましてね。白桜の冬惺に言うことを聞かせるには、姫君を人質に取るのが一番有効そうだったもので」

「……冬惺に、なにをする気ですか」

青ざめた綺理に、空騅は答えなかった。彼は綺理の前で立ち止まると、縛られた人質を見下ろしてうっすらと笑んだ。

「さて、姫君。白桜の彼が来るまでの間、少々暇つぶしにつきあっていただきましょうか。――あなたがなぜあの化け物に詳しいのか、そのあたりも是非お聞かせ願いたいですし」

五章　鷹は羽ばたきをやめて

綺理を無事に取り戻したくば、一人で凌雲台に来い――。

そんな内容が走り書きされた紙片を受け取ったあと、冬惺は万宵に案内されて城壁内の廊下を走っていた。

鷹は少し飛んでは床に降り、また少し飛んでは窓枠に留まり、冬惺が見失わない距離を保って飛んでいる。それを常に視界の端に入れながら、冬惺は行き合った数人の紅楓兵を駆け抜けざまに斬り払った。相手を完全に行動不能にする手間も惜しんで、ひたすら先を急ぐ。

（早く、凌雲台へ！）

――城砦内が戦闘の真っ最中であることはわかっている。だが幸い万宵が伝言を携えてきたのは、冬惺が部下に必要な指示を下し終えたあとだったし、どの道この乱戦状態では全体の指揮などできようもない。

そして空雖がなにを企んでいるか知らないが、紅楓方が降神術の使い手としての綺理を捕らえて、その威光を戦に利用しようとしているのなら、絶対に防がなくてはならない。

それに真羅の話によれば、現在淵妖の津波が食い止められているのは、綺理が火雷明王の宿った剣を使って結界を張っているからだという。その結界を空雖や万宵にどうにかされてしま

ったら、一巻の終わりだ。
（――それに俺は、約束をした）
凌雲台へ行かねばならない理由を胸中で並べて、最後には必ず思考はそこにたどりつく。
（さらいに行くと、約束したんだ。紅楓方の手から、綺理を無事に解放しなければ！）
兄王のためではなく綺理のために戦うと、最初に兄王に宣言した。大義よりもただ、綺理とのあの約束を果たすために冬惺は戦ってきたのだ。
（綺理――）
『綺理姫さまは白桜の冬惺を仇と呼んで、紅楓方を支持すると言われたそうだ』
あれが彼女の本音とは思わない。少なくとも綺理が進んで紅楓方に味方するはずがない。だけど再会したとき、彼女が自分を見てどんな顔をするかずっと不安だった。自分がどんな顔で彼女に向き合えばいいのかもわからなかった。逢いたい、ひと目その姿を見たい、その声を聞きたいと想い焦がれていても、いざ会えるとなったら会いたくないと躊躇したかもしれない。
――けれど今は。今だけは、冬惺は綺理のために綺理のもとへ走れる。彼女を助けるために、彼女に会いにいける。
（そしてこれが、俺が綺理のためにしてやれる最後のことになるかもしれない――）
予感のような思いを胸に、冬惺は走る速度をさらに上げる。
進むにつれて人けのなくなっていく廊下に、鷹の羽音があざ笑うように響いていた。

雷鳴が耳をつんざき、波濤が打ち返す轟音が城砦を震わせたのは、両軍が城壁の内側になだれ込んでからほどないときだった。

白桜軍が紅楓軍のしんがりと混ざるようにして城門から突入し、郭の中が大混乱になっていたときだ。正体不明の音に、先ほど淵妖に襲われたときの阿鼻叫喚の様を思い出し、一時白桜軍に動揺が走った。しかし冬惺の大音声での叱咤に、金蘭王妃の招請する乾ノ神衆が雷をも司っていることを思い出し、金蘭王妃の加護があるこの城なら大丈夫だと我を取り戻す。

そもそも、紅白が完全に入り乱れて戦うこの状況下では、別のことに意識を向けていては命取りになる。兵たちは目先の戦いに戻り、すぐさま戦の喚声が凌雲城を満たした。

突入した白桜軍の歩兵隊は皆軽装だが、騎兵は馬を下りれば重装の歩兵としても活躍する。そして兵の練度で優っているのは、白桜軍だ。城壁に待機していた紅楓の守備兵も、敵味方が混じり合った郭内に矢を射るわけにはいかず、守城側の有利な点をなかなか生かせない。

一方で翔波も、この乱戦の中では乾ノ術を使えずにいた。

（使役術で相手を昏倒させたり、身を守るくらいはできるけど……淵妖憑きの碁石はできるだけ温存しておかないと、あとが続かないからな。鉄つぶてもそんなに数がないし）

身軽さと投擲の腕は自負しているものの、基本的に武術の心得はない翔波である。白兵戦では逃げるのが精一杯と自覚しているので、罠に注意しながら郭の隅をこそこそと移動していた。

（まずいな。このままじゃ凌雲台から遠ざかる一方だ）

剣戟の音を間近で聞きながら、翔波は高くそびえる凌雲台を見上げた。

あそこに綺理がいるのは間違いない。――そして指揮官たちに作戦指示をした後、行方不明になった冬惺も、おそらくあそこに向かっている。

（あの馬鹿閣下が城壁の中で迷子になっていなければ、だけどさ）

翔波は青銅の瞳を険しくして、冬惺を見失ったときのことを思う。

もし冬惺が綺理のもとへ行こうと考えるなら、翔波に案内をさせるのが確実だ。それなのにあの馬鹿主人は、一人で行方をくらましたのだ。もし子狐真羅が先導しているならいいが――冬惺を見失う直前、鷹の羽音を聞いた気がするのが気にかかる。

（ああもう。僕が置いていかれても絶対に捜しに行くってことくらい、君も知っているだろう！……あー、これはひとまず城壁の中に入って、内部から凌雲台を目指したほうがいいかな。廊下みたいに細長い場所なら、乾ノ術を有効に使えるだろうし）

翔波はそう決めると、城壁の角に設けられた櫓のような建物に走った。

建物の中には既に白桜軍の兵が踏み込んでいるようで、紅楓の赤いしるしを身につけた兵が通路に転がり、上方から争う物音が聞こえてくる。

（城壁の内部とつながっているのは、この上……かな）

警戒しながら階段を上がり、通路を行くと、突き当たりに矢狭間を備えた廊下が見えた。

（！　白桜の兵がいる。あの兵たちについていけば――）

廊下に味方の一隊がいるのを見て、翔波はほっとした。そして彼らに合流しようと通路を駆け抜け、廊下に出ようとした、そのときだった。

「――天馬鳴蹄！」

声と共に、熱風の渦が翔波の鼻先をゴッと走った。

（なっ……！）

十人近くいた白桜の兵が、烈風をまともに受けて後ろに引きずられる。そこに次々に矢が射かけられ、彼らは体勢を崩してばたばたと折り重なって倒れた。

翔波が足を止めたのはわずかに遅く、そのとき既に体半分ほど廊下に出てしまっていた。

廊下の右には、腕や足に矢を受けてうめく味方の兵たちがいる。そして左――熱風と矢が放たれたほうから、せせら笑うような声がかかった。

「鏡作の銀髪こぞうじゃないか。まさかここで会うとはな」

「朔秋！」

やはり十人近い兵を従えて廊下の向こうに立っている朔秋に、翔波はぎくりと身構えた。浅手だった白桜の兵がよろよろと立ち上がり、叫ぶ。

「紅楓の朔秋だ！　やつさえ捕らえれば……っ」
「身の程知らずの下賤どもが！　貴様らごときにこの俺を捕らえられると思うか！」
朔秋の合図で、彼の従える兵たちが再び矢をつがえた。その様に、翔波は反射的に廊下の真ん中に飛び出す。
「天滅還海！　障せよ！」
矢が白桜の兵たちを襲う寸前、翔波の右手の碁石から紺碧の障壁が出現し、矢を弾き落とした。使役した淵妖が淵海に還らぬうちに、翔波は次の詠唱に移る。
だが淵妖の障壁が消えたとき、既に朔秋の右手がこちらに向けられていた。
「万照成牙！」
「――を食む牙となれ！」
朔秋の放った火球が迫る。翔波の術の発動はぎりぎりで間に合ったが、互いの火球は翔波の手元でぶつかり合った。閃光と破裂音、爆風が至近距離で生じる。
「鏡作卿！」
翔波は乾ノ術の相殺時の衝撃波を間近で浴びて、もんどりを打って倒れた。
「元主人を呼び捨てか、銀髪こぞう。すっかり白桜の飼い犬に成り果てたな」
（く……そ、朔秋のやつ、僕相手だからって遠慮なく炎の術を使って……）
――高位の乾術師ほど、乾ノ力に対する耐性も強い。

従一位乾術師の朔秋が日なたで平民の兵目がけて火球を放てば、威力が強すぎて咎負いになりかねない。だが、日の当たらない屋内で乾術師の翔波を狙う分には、たとえ火球が命中しても死に至ることはない。朔秋はそうとわかって躊躇なく炎の術を放ってきたのだ。

とはいえ今の炎を食らっていたら、死なずとも大火傷と全身骨折は免れなかったはずだ。

（だけど、術勝負で朔秋をどうにかできるとしたら、正三位乾術師の僕くらいしか……）

身を起こそうとした矢先、極限まで短縮された朔秋の呪文が耳朶を打った。

「天馬鳴蹄！」

膨れ上がった熱風が廊下という細長い空間で圧力を増し、烈風の渦となって一気に突き進む。翔波の頭上を走った狂風は、ようよう立ち上がった白桜の兵たちを再び薙ぎ倒した。

よく見れば朔秋は、炎の術を放つときは日陰に、風の術を放つときは窓辺の日なたにと、必要な威力に応じて立ち位置を変えている。地の利を生かした風の術の使用といい、以前戦ったときのような、操られてただ炎を放つだけだった朔秋とは違う。

「ふん、他愛もない。勇み立って乗り込んできた白桜の雑兵どもなど、この俺の敵ではない。この調子で殲滅してくれる。――と、その前に」

（！）

起き上がれないふりをして呪文を唱えていた翔波は、自分に向かって放たれた矢に戦慄した。即座に転がってかわすと、直前まで翔波がいた場所の床に矢が突き立つ。

そこに、筋骨隆々とした紅楓の兵が走ってきた。
「――っ、がはっ……」
翔波はみぞおちを蹴り上げられ、一瞬呼吸と意識が飛んだ。右手で練られていた乾ノ力が、術の完成直前で霧散する。
小柄な体はそのまま吹っ飛ばされ、翔波は廊下の壁に背中を強く打ちつけた。
「くっ……、天滅還か――」
どうにか足を踏ん張って淵妖憑きの碁石を構えたが、詠唱が終わる前に再び兵が迫る。
「！　んぐ……っ」
大きな手に口をふさがれ、その勢いのまま背後の壁に押し付けられた。懐の守り刀に伸ばそうとした右手もひねり上げられ、指の間から碁石が落ちる。
「ははっ。その銀髪こぞうに負け犬よろしく首輪をはめてやれ！　そのがきに縄をつけてぼろ布のように引きずり回してやれば、白桜の冬惺や蛮兵どもも戦意を喪失するだろう！」
朔秋の残虐な高笑いが鼓膜を打つ。横目でそちらを見た翔波は、兵の一人が、革と金属でできた輪を持ってやってくるのに気づいた。
（乾ノ術封じの首枷！　まずい、このままじゃ――）
翔波の顔面から血の気が引いた、そのときだった。
どこからか飛来した短刀が、翔波を捕らえている兵の腕に突き立った。

「！　なに!?」

兵が驚愕と苦痛の声を上げ、翔波を押さえつけている力がゆるむ。――直後。

「――汚い手でうちの大事な当主に触れるな、下郎」

兵の腕が、真下から蹴り上げられた。

「ぐあ……っ」

たまらず翔波を離した彼は、続けざまに死角から強烈な足技を受けて昏倒する。

さらに首枷を手にした兵も不意打ちを食らってぐらりと倒れ――るまで見届ける前に、翔波は兵たちと壁の間から乱暴に引っ張り出された。

「呆けている場合ですか、馬鹿当主！」

翔波はそのまま引きずられるようにして白桜の兵たちのもとまで下がり、それから自分の左腕をつかんでいる人物を見た。

暗色の単と細袴に身を包んだ、線の細い黒髪の少年。見なくても声で誰かはわかっていたけれど、久しぶりに見たその不機嫌そうな顔に、翔波は我知らずほっと表情をゆるめていた。

「奏珠。おかげで助かった。……君も無事だったんだ」

「お久しぶりです。……そういう台詞は、この場を無事に切り抜けてから言ってください」

奏珠は無愛想に返して、翔波を背にかばうように隠し小刀を構えた。

「味方か？　な、何者だ？」
「鏡作卿の部下……なのか？」
負傷した白桜の兵たちが、背後でつぶやく。逆に廊下の向こうでは、朔秋が忌々しそうに琥珀の瞳をぎらつかせた。
「奏珠！　貴様、生きていたのか！」
「残念ながら死にぞこないましてね。今の私は本来の主、鏡作の翔波にお仕えしています。――紅楓家当主朔秋。あなたの首を頂戴し、我が主の手柄とさせていただきます！」
「ほざけ、寝返り者！　者ども、やつらを射殺せ！」
朔秋が腕を振り、彼のかたわらに控える弓兵が一斉に矢をつがえる。
だが翔波が準備を終えるには、奏珠の稼いだその時間さえあれば十分だった。翔波は奏珠の陰から飛び出すと、窓辺の日なたに立ってありったけの碁石を床に放つ。
「天滅還海、障せよ！　今は眠りし乾ノ神の宝、天の鏡のその写し身よ――」
床から順々に紺碧の障壁がせり上がる中、続けざまに月氷澄の鏡を構えて詠唱する。
「――歪みの鏡の理で、禍つ風を凍らせよ！」
最初のほうに出現した障壁は矢を防いだ後に消えたが、時間差でせり上がってきた五、六枚の障壁は銀の光に囲まれて凍りついた。
「なっ……、凍った!?」

幾重もの障壁の向こうで、朔秋や紅楓の兵が驚愕の声を上げる。それを聞きながら、翔波は懐の鉄つぶてをすべて奏珠に投げ渡した。

「奏珠、この上からよろしく！」

「あなたもたいがい無茶を言う！」

鉄つぶてを受け取った奏珠が大きく跳躍し、凍れる障壁の上にとんと乗る。

一方、障壁のずっと向こうでは、朔秋が詠唱を始めていた。

「どうせ淵妖の壁だ。砂に変えてやる！――万照成牙！」

朔秋は火球で一番端の障壁を粉砕したが、その奥にまだ幾重もの障壁があるのを見て、慌てて呪文を重ねた。そして二枚目、三枚目の障壁を砂に変えたところで、彼は奏珠が障壁の上から上へと飛び移って自分のほうに向かってきているのに気づいた。

奏珠が障壁から飛び降りざま、両手で鋭く鉄つぶてを放つ。

鉄つぶてを食らった兵は次々倒れたが、反射的に兵を盾にした朔秋は無傷だった。しかしそれゆえ朔秋は、味方の兵の体にさえぎられて乾ノ術を放てない。

「邪魔だ、貴様！」

苛立った朔秋が、鉄つぶての直撃で昏倒した兵を押しのけようとした、その瞬間。

乾ノ術を練り上げた翔波の術が完成した。

「――天にありては万物を熱す烈光、地上に降りて万有を屠る顎となれ！」

鏡の秘術が解けて、残りの障壁が一瞬にして消え――、その奥から、凄まじい烈火の渦が朔秋目がけて突き進む！

相殺する術を放つ暇もなく、視界を灼く光が廊下を満たした。

「う……っ、ぐあああああっ！」

朔秋もその周囲にいた兵たちも、もろともに激しい炎にのまれて押し飛ばされた。廊下の端に叩きつけられて、ようやく止まる。

「や……やった！」

「さすが鏡作卿！」

白桜の兵の歓声を背中に聞いて、翔波は大きく息をついた。

床にびったり伏せて炎の渦をやり過ごした奏珠も、身を起こす。ちょうどそのとき階段のほうから、聞き覚えのある白桜軍の指揮官の声と大勢の足音が上がってきた。

（よかった。これで朔秋を捕らえて兵に引き渡せば終わりだ。凌雲台に閣下を捜しに行ける――っと、そうだ）

翔波は廊下に落ちていた乾ノ術封じの首枷を拾い、朔秋のほうへ走った。彼が衝撃で気を失っているうちにこれをはめておいたほうが安全だろう。

だが翔波が朔秋のそばにかがんだとき、そこの脇の階段から紅楓の兵の一団が下りてきた。

「！　貴様、朔秋殿下になにを！」

剣を手に向かってきた兵たちに、翔波ははっと振り向いた。奏珠がちっと舌打ちをする。――ここで朔秋の身柄を取り返されたら、面倒なことになる。

「鏡作公、先に彼らを――」

――そしてそう言って奏珠が翔波のもとに駆け寄り、術封じをはめようとしていた翔波が一旦朔秋から身を起こした、そのときだった。

「……この、銀髪こぞうめが……！」

炎の光に目を灼かれた朔秋が、左手で目を押さえながら起き上がり、その、右手が。

「――危ない！」

「――万照成牙！」

翔波の視界をかっと光が埋めたのと、強い力で床に押し倒されたのは同時だった。

「――――！」

絶叫と、炎の塊が石壁を揺るがす音とが、間近で響いた。

（なにが、起きて……）

翔波は身を起こそうとして、自分の上に誰かが覆いかぶさっているのに気づいた。

――奏珠だ。寸前の光景が、翔波の脳裏でまたたく。
（朔秋が僕に乾ノ術を放とうとして、奏珠が僕を突き倒して……、――！）
「奏珠！」
ぞっとして少年の体を揺さぶると、奏珠がうめいて身じろいだ。
「……少し、背中を火傷しただけです。なにを情けない声を出してるんですか……。立って、戦って……」
その言葉に、紅楓の兵が自分に斬りかかろうとしていた状況を思い出す。
だが周囲は、気づけば異様な静けさに包まれていた。翔波は奏珠の体の下から這い出して、その理由を知った。
廊下の向こうでは、駆け上がってきた白桜軍の増援隊が呆然と動きを止めていた。そばの階段でも、駆け下りてきた紅楓軍の新手が凍りついたように固まっている。そして先ほど翔波に斬りかかろうとしていた紅楓の兵が、壁に叩きつけられた恰好で微動だにせずにいた。――その兵の鎧の胸当てが、凄まじい熱を受けたように融けて歪んでいた。
そして唐突に、なにかが焼け焦げるような音がした。
「う……あぁぁああ！」
朔秋が額を手で押さえてうめき出した。その指の間から、白煙が上がっている。
「と……咎負いだ！」

誰かが引きつった声で叫んだ。

その言葉を証明するように、朔秋が手を離したとき、彼の額には不気味な紋様が黒く浮かび上がっていた。――乾ノ術で人を殺め、乾ノ神の定めた理を侵したしるしだ。

光に視界を奪われていた朔秋は、気づいていなかったのだ。――自分が炎で押し飛ばされた先が、窓から光の射し入る日なたであったことも。自分が狙おうとした翔波の後ろに、味方の兵が迫っていたことも。

「と、とにかく朔秋殿下をお救いするのだ！　急げ！」

紅楓の新手が我に返ったように動き出し、全員の硬直が解けた。

紅楓の兵が剣を手にどっと階段を下りてくる。翔波は奏珠を引きずるようにしてその場から離れるだけで精一杯だった。

翔波が奏珠を連れて壁際に寄ったところで、白桜軍の増援隊が廊下を駆け抜けて到着する。しかしそのときには、紅楓の兵たちは呆然とした朔秋に肩を貸して階段を駆け上がっていた。

「追え！　紅楓の朔秋を捕らえろ！　上階に立てこもらせるな！」

白桜の兵たちが続々と朔秋を追っていき、階段の上方から剣戟の音が響いてくる。その音に、肩を貸している奏珠が翔波の肩口でうめいた。

「鏡作公……あなたも早く、追いかけなさい。このままでは、手柄を他の者に横取りされ……」

「……いや。白兵戦になったら僕が行っても足手まといだよ。飛び道具も使い切っているし」

朔秋の乾ノ術の脅威がなくなった以上、もはやこの場で翔波の出番はない。あとは兵に任せたほうがいい、この分では朔秋が捕らえられるのも時間の問題だろう。

ならば翔波は、翔波の行くべきところへ行くのみだ。

「ごめん、君のお手柄はちゃんとわかっているからさ。君も手当てを受けて休んでいたほうがいい。――すみません、彼を頼めますか？　大事な部下なんです。あ、これ薬です」

翔波は増援の兵に奏珠を託し、昔綺理にもらった守り袋から乾ノ術の火傷に効く薬を出して渡した。そのまま廊下を逆戻りする。背後で奏珠が抗議の声を上げたが、振り返らない。

――凌雲台へ。綺理と冬惺がいるはずの場所へ。

翔波はただそこだけを目指して、廊下をひた走った。

冬惺が凌雲台への上り口にたどりついたとき、付近にはまったく人けがなかった。

白桜の兵がまだここまで侵入していないだけでなく、紅楓の兵も見当たらない。まるで人払いでもされているかのようだ。廊下に万宵のくすくす笑いが響く。

「急ぎたまえよ、少年。鷹将軍がお待ちかねだ」

万宵はそこまで冬惺を誘うと、先に上で待つつもりなのか窓から外へ羽ばたいていった。

冬惺は太刀を持つ手に力を込め、上り口に飛び込んだ。暗く、幅の狭い螺旋階段を駆け上がる。その果てに、扉を蹴り破って楼上に出る。

（綺理――！）

風が吹き渡る凌雲台の上――。

淵海側の胸壁に、紅の光を帯びて金の火花をまとわりつかせた宝剣が、まっすぐに突き立てられているのが見えた。その少し近くに、鷹を左拳に据えた空騅が悠然と立っていた。

――その空騅の足元に、石の柵に後ろ手に縛りつけられた綺理がいた。

その光景に、彼女に再会できた喜びをものみこんで、怒りが頭の芯を白く灼き尽くす。

「綺理！」

「冬惺！」

綺理がどこか泣きそうな声で自分の名を呼ぶ。ずっと焦がれていた彼女の碧玉の瞳が、不安げに歪んでこちらを見るのを見て、冬惺は激情のままに吠えた。

「――空騅、貴様！」

――彼が来ないかもしれないとは、綺理はただの一度も思わなかった。

それでも、階段の扉が勢いよく蹴り開けられて冬惺が姿を現したとき、さまざまな思いがな

い交ぜになって胸に膨れ上がった。

彼が来てくれて嬉しい。彼が来てしまって怖い。ずっと逢いたかった。だけどこんな風に人質にされて、彼の足手まといとして再会するのは嫌だった。そしてもしも彼が昔のように綺理への罪悪感に囚われてしまっていたら、彼は綺理を助けるために、空騅の要求がなんであれ従ってしまうかもしれない。それがたまらなく怖かった。

「綺理！」

彼の琥珀の瞳が自分をまっすぐに見て、自分の名を呼ぶ。その震えるような歓喜も、そばで空騅が「来ましたね」と満足げにつぶやくのが耳に入って、不安に取って代わられる。

「冬惺！」

それなのに自分は名を呼ぶ声に応えるだけで、「来ちゃ駄目」とかそんな制止の言葉は喉の奥で引っかかる。見つめる先で、冬惺が空騅を鋭く睨んだ。

「――空騅、貴様！」

「久しいな。再会を喜ばしく思うよ、白桜の」

空騅は綺理の隣ですらりと刀を抜き、こちらに駆け寄ろうとした冬惺を牽制する。しかし余裕綽々で笑んだ彼も、続く冬惺の怒号には目をしばたたいた。

「――綺理になにをした!!」

「まだなにも……。というか、まあ、見たとおり拘束はさせてもらっているが……」

激しく怒気を立ち昇らせる冬惺に、空騅は戸惑ったように言った。それから、はたと気づいたように肩の鷹を見やる。

「化け物。白桜の若将軍になにか余計なことを言ったか？」

万宵は翼をすくめて答えた。

「君がお待ちかねだと思ってね。――早く行かないと鷹将軍が焦れてキリによからぬことをするかもしれないよ、と言ってみただけだ」

「根無し事を。朔秋殿下じゃあるまいし、私には女性を痛めつけて楽しむ趣味はない」

後半は冬惺に向けて言って、空騅は綺理が無傷なのを見せるように脇にのいた。

万宵が彼の肩から飛び立ちながら、面白がるように付け加える。

「ちなみに鷹将軍。君がキリに並々ならぬ興味を持っていて、何度かちょっかいを出していて、求婚した挙げ句にふられて、今キリに腹いせしたい気分だったことも赤裸々に語っておいた」

「は」

綺理は硬直した。確かに空騅は凌雲台に現れたとき、綺理が裏で邪魔立てしていたことを知って少なからず苛立っていたかもしれないが……つなげ方がなにか違う。

というか今の説明のすべてが、なにか違う。

隣で空騅が盛大に顔を引きつらせ、彼にしては珍しく声を荒げた。

「なにが赤裸々だ、化け物。どうせ嘘の皮で何重にも覆って伝えたんだろう！――白桜の。私

と姫君の名誉のためにことわっておくが、私は君が想像するようないかがわしいちょっかいを姫君に出したことはない。無論、無用な暴力をふるったこともだ」

「と、冬惺っ。本当だからね！」

綺理も慌てて叫んだ。実際、空騒は綺理を捕らえるときでさえ、綺理にかすり傷ひとつ負わせていない。手首を縛る細布も、ほどけはしないがきつくもない。冬惺が来るまでの間だって、万宵について知っていることを穏当に問いただされていただけだ。

（それだって本当にまずいこととか、冬惺に不利になることは話していないはずだし！）

話したことといえば、綺理が鏡作の地で万宵と出会っていたこと。降神術を使える綺理が、ずっと万宵を退治しようとしなかったのは、あれが魂だけの存在で、器を滅ぼしても意味がないと知っていたからだということ。万宵の件は冬惺と翔波も知っていること。そのくらいだ。

――当然、真羅のことや《契約》の件を臭わせるようなことは口にしていない。

綺理が記憶をさらって確認する一方で、冬惺は綺理の言葉に安堵したようだった。

彼はほっとしたような目で綺理を見て、激しい怒りをひとまず収めた。――その怒りの根源にある感情がなんなのかは、綺理にはよくわからない。

そこに、頭上から揶揄するような声が降ってきた。

「おや、鷹将軍。わざわざ否定するのかね？　少年が激怒していたほうが君の目的に沿うと思って、気遣いをしてあげたのだがね」

空騅は冬惺から視線をはずさぬまま、不機嫌に返す。
「悪党にも美学はある。私は女性に無体な真似をして粋がる類の悪人になったつもりはないし、好敵手にそんな小悪党と見なされるのは不愉快だ」
「ならば今すぐ綺理を放すがいい、空騅。女性を人質にとりながら名誉や美学を語るのか」
低くうなった冬惺に、空騅は突然爽やかに笑った。
「ああ、それは駄目だ。まだ君に私のお願いを聞いてもらっていないからな」
(――っ!)
綺理はぞっと身を震わせた。
空騅が白刃を綺理の眼前に見せつけたからではない。――白桜軍と紅楓軍が城砦内で戦っている最中に、彼が敵方の総大将になにを要求するのか。それが恐ろしい。
綺理がはらはらとうかがう中、空騅は刀で綺理を示して悪戯っぽい笑みを見せる。
「悪党の美学とでも言おうかな。古今東西、物語の常。勝ったほうが姫君を手に入れる。勝利の褒美が姫君というほうが、君も燃えるだろう?」
そして彼は、怒りに瞳を燃え立たせた冬惺に、心底楽しそうに宣言した。
「望みは一つだ、白桜の冬惺。――鷹居の空騅の名において、君に一騎打ちを申し込む!」
――受けて立つ、と。

そう宣言を返した冬惺を止めるすべは、綺理にはなかった。
「そういえば前に予言をしたな。いずれ私と君は、姫君をめぐって戦うことになるだろうと」
空騅が言いながら、凌雲台の中ほどへと歩いていく。
「本当は会戦で君と決着をつけるつもりだったんだが……。みっともない負け惜しみを言わせてくれ。朔秋殿下に水をさされて、全力で君のお相手をするわけにはいかなくなってね」
冬惺もまた階段の入り口から離れ、空騅と相対できる位置に歩みだす。
「道理でな。噂に名高い鷹居の空騅の用兵にしては、やけに拙劣だと思っていた。……まともに兵を合わせていたら、きっとおまえに十年の年の功があっただろう」
「うーん、素直に賛辞とは受け取れないな。実力を発揮できないのも実力だ」
「だが淵妖が押し寄せたときに兵を退かせたのは、朔秋ではなくおまえじゃないのか。あのときおまえが勝ちを獲りに来ていれば、そこで実力を発揮できただろう」
空騅は楼の上を旋回する鷹を一瞥してから、肩をすくめた。
「結局私は、勝利よりも勝負を求めていたということかな。それでこうして、君に一騎打ちを挑んだわけだし。――というわけで、今回は全力で君を叩き潰させてもらう」
彼は足を止め、凄絶な笑みを浮かべる。
以前鏡作の地で冬惺と空騅が戦ったとき、剣術は冬惺が上、体術は空騅が上だった。
だがあのときと違って、今は昼間だ。

空雛は正三位乾術師。——対する冬惺は、一切乾ノ術を使えない。
「冬惺！　お願い、無茶しないで！」
同じく立ち止まった冬惺に、綺理は必死で叫んだ。
けれど大きく間を取って向かい合った二人は、そのまま得物を構える。
「姫君、男の勝負に口出しは無用。あなたの自由を奪わせていただいたのも、一騎打ちに余計な手出しをしてほしくなかったからですしね」
「綺理。……じっとしていろ。そんなに暴れたら手首が擦りむける」
冬惺は縛られた綺理を案じるように言って、ふっと琥珀の瞳を穏やかにした。
「大丈夫だ。——約束は、守るから」
（——）
それが、なにかの覚悟を決めたまなざしだと、綺理にはわかった。わかってしまった。
（約束だからどんな無茶でもするってこと？　さらいに行くって私に約束しちゃったから、だから勝算がなくても退けないって……そういうことなの？）
呆然とした綺理の視線の先で、双方が作法にのっとって名乗りを上げる。
「鳥狩の後胤、鷹居の空涯が第二子、鷹居家当主——空雛」
「金蘭の末流、白桜家先代当主、春暁が第三子、瑛国王春怜が弟——冬惺」
「いざ——」

本来ならここで「尋常に」か「正々堂々」と続く。だが二人とも示し合わせたようにそれを省き、唱和した。

「――勝負！」

叫ぶや、冬惺は太刀を手に石床を蹴った。

（空騅を倒し――綺理を解放する！）

「――天の座より万物を射る弓取り、輝ける征矢で暗がりを貫け！」

空騅の右手から光の矢が放たれ、冬惺の目許を射る。光の矢は淵妖以外のものは傷つけないが、目に直撃すればしばらくの間視力を奪われる。

しかし冬惺は、呪文の出だしで空騅の狙いを察していた。詠唱終了に合わせて目をつぶり、光の矢が消えるまでのわずかな時間をやり過ごす。

（こいつが翔波と同じ正三位だったのが幸いか。詠唱から発動までの間合いがつかみやすい）

勢いをゆるめずに空騅の懐に飛び込み、斬撃を繰り出す。

太刀と刀。鋼の打ち合う音が、凌雲台に響いた。

二合三合と刃を合わせてから、空騅が冬惺の太刀を弾いて大きく後ろに跳んだ。

冬惺はすかさず追って斬りかかろうとしたが、空騅が着地と同時に身を低くしたのを見て、

反射的に飛び退る。

直後、空騅が真下から脚をはね上げ、鋭い蹴りの風圧が冬惺の腕を叩いた。

（いきなり全力か！――前と違って今は下が平らな石床。こいつにとって足場が良すぎる！）

後ろに跳んで足技をかわした隙に、空騅が距離をとって詠唱に入る。

「天にありては万物を照らす御光、地上に来たりて万有を食む牙となれ！」

ゴゥとうなりを上げて飛んでくる火球に、冬惺はたまらず横っ飛びによけた。その間に空騅はますます冬惺から離れ、凌雲台の向こう端から乾ノ術で冬惺を狙い撃ってくる。

同じ正三位乾術師でも、火球の威力は翔波のそれより大きいようだ。空騅は、使役術に特化した翔波と違って突出した得手がない代わりに、一つの一つの術の威力が大きいのだろう。

「俺に近づかれることを恐れて、遠くからびくびく術で牽制するだけか。興ざめだな、空騅。術を使えないときのほうが、よほど骨のある戦いぶりだったものを！」

挑発して相手をしゃべらせれば、その間詠唱をさせずにすむ。冬惺はそれを狙って叫んだが、相手が朔秋であれば間違いなく引っかかったであろうその手は、空騅には通用しなかった。彼は企みはお見通しだと言わんばかりの笑みを浮かべ、切れ目なく詠唱を続けてくる。

（――くそ。乾ノ術に対抗するのも、遠距離での戦いも、今までは翔波に任せていたからな）

距離を詰めなければ、冬惺には攻撃手段がない。しかしどうにか接近戦に持ち込んでも、空騅は追い詰められる前に体術を交えた変則的な攻撃を繰り出し、また乾ノ術を放ってくる。

――付け入る隙がない。
冬惺は太刀を握る手に汗がにじむのを感じながら、勝機を探して必死で楼上を駆けた。

二人の戦いを、綺理は息を詰めて見守っていた。
（冬惺……、冬惺！）
火球が冬惺に迫るたびにぞっと肝が冷え、背中にぐっしょりと嫌な汗をかく。迂闊に声を上げれば冬惺の気を散らしてしまいそうで、その都度どうにか悲鳴をこらえる。
――冬惺は王族として潜在的な乾術師の素質は高いはずなので、ひょっとしたら乾ノ力の耐性も常人よりはあるのかもしれない。しかしそれでも、陽光が燦々と降り注ぐこの楼上だ。火球を一度でも食らえばそこで勝敗が決まってしまう。
（分が悪すぎる。これじゃ、いくら冬惺でも！）
時折、冬惺が火球をかいくぐって空騅に迫るが、数度刃を合わせるだけですぐにまた距離を取る羽目になる。
純粋な剣術勝負に持ち込めれば、確実に冬惺が勝つだろう。しかし空騅は、それを知ればこそ乾ノ術を容赦なく放ち、決して冬惺の得意分野には持ち込ませない。乾ノ術を使えない冬惺が、防戦一方に追い込まれることなく善戦しているのが、奇跡といってよいくらいだ。

（翔波さえいれば、空騅将軍の乾ノ術を抑えられるのに……！）

だがたとえ翔波がこの場に現れたとしても、上空で高みの見物をしている万宵が乱入を許すとは思えない。綺理は自分が泣きそうな顔になっているのがわかった。

（冬惺には小細工をする暇もなかったし、将軍に前と同じはったりがもう一度通用するとは思えない。これじゃ、勝算なんて……っ）

勝算なんてあるはずがない。それなのに冬惺は、一騎打ちを受けたのだ。

綺理との約束のために。――ひょっとしたら、刺し違える覚悟で。

（なのに私は、冬惺の力になることすらできない）

そもそも冬惺がこの場に一人で来ざるを得なくなったのは、綺理のせいだ。綺理がむざむざ人質にとられたせいだ。それなのに綺理は、体の自由を奪われたまま、目の前で戦う冬惺をただ見ているしかできない。必死で状況を観察しても、勝機を見つけることすら叶わない。途方もない無力感に襲われながら、綺理は戦いの行方を見守っていた。

――そして、最悪のときが訪れた。

「天にありては万物を照らす御光――」

階段の入り口を背にした冬惺に、空騅が一気に片をつけようとするように右手を伸ばす。

「――地上に来たりて万有を食む牙となれ！」

しかし炎の塊が放たれる間際、冬惺がそばに落ちていた兵の水筒を、思い切り蹴り飛ばして

いた。空駈はさっと水筒をかわしたが、その拍子に乾ノ術の狙いがわずかにずれた。
それて流れた火球は、おそらく誰もが予想し得なかったほうへ向かった。
――綺理のほうへ。
（！）
「綺理！」
まっすぐに自分のもとに飛んでくる炎の塊に、綺理は瞳を凍りつかせた。
よけたくても、背後の柵に縛り付けられたまま身動きがとれない。
時間の感覚が引き伸ばされ、炎が突き進んでくるのがゆっくりと見える。炎の向こうで、空駈がしまった、という表情になるのが見える。その姿もすぐに、迫り来る炎に隠れる。
そして綺理がぎゅっと目をつぶろうとした、そのとき。
綺理と炎の間に、人影が飛び込んだ。
（冬惺）
炎塊が冬惺にぶつかる。その音は、綺理の耳に入っていなかった。ただその衝撃が大気を震わせたのがわかった。吹っ飛ばされた冬惺が石床に叩きつけられ、一度はね返って綺理の前に倒れる。力なく投げ出された彼の手から、太刀がこぼれ落ちる。
聴覚が戻って最初に綺理が聞いたのは、自分の悲鳴だった。
「……せい、冬惺――！」

もがいても、縛められた手首はびくともしない。彼が目の前でぐったりしているのに、手当てをするどころか手を伸ばすことすらできない。

「なんで……なんで、わざと当たりにくるの。また、こんな、無茶して……」

いやいやをするように首を振ると、冬惺の目がうっすらと開いた。琥珀の瞳がわずかにさまよい、綺理に焦点が合うとふっと瞳が優しくなる。

「……綺理。……無事、か……」

苦痛にうめきながら絶え絶えに言う彼に、綺理は胸が押しつぶされそうになった。

(どうして)

どうして彼は、こんなにも必死で、身を捨ててまで綺理を守ろうとするのだろう。約束だからか。大事な従妹、大事な幼なじみだからか。それとも、罪悪感か。

彼はまた綺理への罪悪感に囚われて、だから自分の身を犠牲にしてでも守ろうとするのだろうか。玉造を滅ぼし、綺理の父を殺めた償いに。——そんなものは、綺理は欲しくないのに。

(私は、あなたの力になりたかったのに)

なのに、最悪の形で足手まといになった。

——足音が、綺理の鼓膜を鋭く打った。

石床に足音を高く響かせて、空騒がぞっとするほど冷酷な顔で歩んでくる。その右手の刀が、陽光に凶悪に輝いているのを見て、綺理は全身から血の気が引いた。



「冬惺、逃げて！　お願いだから、立って逃げて！」

声に応じるように冬惺の右手がぴくりと動いたが、指先が柄に触れただけで宙を掻く。彼は身を起こそうとしても力が入らないのか、うめき声を漏らして身じろぎするばかりだ。

近づいてくる空騅に、綺理は泣きそうな声で叫ぶ。

「や……やめて、これ以上冬惺になにもしないで！」

空騅の瞳には、もはや興がるような光はなかった。酷薄に細められたその薄紫の双眸を見上げて、綺理は必死で懇願する。

「お願いします、空騅将軍！　私はなんでもしますから！　なんでもあなたの言うことを聞きますから、だから冬惺には手出ししないでください……！」

「……綺、理。駄目だ……、なに、言って……」

冬惺が床に手をつき、無理やり体を起こそうとした。が、すぐに力が抜けたのか、肘ががくりと崩れる。そんな彼の前で、空騅が足を止めた。

「男心をそそられる申し出ではありますが……口出し無用と言いましたよ、姫君」

空騅が冷然と冬惺を見下ろし、彼の顎の下に刀を差し入れる。

しかし、恐怖で蒼白になった綺理の予想とは裏腹に、空騅は冬惺の喉をかき切ろうとしたのではなかった。刀身の峰の側で冬惺の頤を持ち上げ、仰向かせる。

「空……騅。綺理、だけは……」

「――つまらないな、白桜の」

空騅は吐き捨てるように言った。

「こんなつまらない幕切れ、私は認めない。ようやく君と全力で勝負ができたのに、私の力で君を降し、殺す前に、こんな中途半端な終わり方か。興ざめ極まりない」

苛立ちに満ちた瞳で、苦痛にあえぐ冬惺を見下ろす。

「動けない人質を狙って好敵手に勝った――などと。君は私を、そんなつまらない小悪党に仕立て上げるつもりか。――戦えるならば立て。太刀を拾う間は待とう」

空騅は刀を引き、一歩下がった。だが床についた冬惺の手が踏ん張れずに滑り、彼がいっこうに起き上がらないのを見て、舌打ちする。

「――ならばひとまず勝ちを譲られよう。白桜と紅楓の戦がどうなるかはまだわからないが、いずれにせよ姫君は私がもらう。取り戻したければ、次は君から勝負を求めてくれ」

「……っ」

薄紫の瞳が綺理を向き、綺理は思わず身をすくませた。だが、空騅が綺理の身柄と引き換えに冬惺にとどめを刺すのをやめたのだと思えば、綺理の懇願した通りとも言える。

そして空騅が綺理に手を伸ばした、そのとき。

「――綺理に触るな!!」

その瞬間、冬惺は勢いよく跳ね起きた。
瞬く間に太刀を握り、斜め下から空騅に一閃を放つ！
「――！」
鮮血が弧を描いて散った。空騅は並外れた瞬発力で後ろに飛びのき、致命傷を逃れたようだが、冬惺の太刀には確かな手ごたえがあった。愕然と目を見開いた空騅の右腕は、籠手ごとざっくりと斬り裂かれている。
体勢を崩した空騅を追って、冬惺はすかさず白刃を振り下ろす。
空騅は左手一本で刀を操り、なんとかその一撃を受け止めた。汗のにじんだその顔に、もはやつまらなそうな色はなく、彼は身を震わせるように笑みをこぼした。
「……は、君の策にやられたか。血相を変えて姫君をかばったときといい、たいした演技だ」
「――本気だったさ」
十字に絡んだ刃越しに、冬惺はささやきを返す。
綺理を守ろうと必死で火球の射線上に飛び込んだのも、綺理さえ守れるなら自分がどうなっても構わないと思ったのも、すべて本気だ。その想いに偽りはない。
――ただ、冬惺がこの状況を作り出すことを狙っていたのも事実だ。
冬惺が綺理をかばって戦えなくなった場合、空騅がどんな反応をするかは、直前の彼との会

話から――彼の性格から読んでいた。だからこそそこに勝算を見出した。

本当は自分が綺理の前にいるときに、空雛に乾ノ術を使わせようと思っていたのが、そう仕向ける前に偶然火球が綺理に流れたのである。

あとは、賭けだった。

空雛の放った火球を受けて、自分がどのくらい動けるか。空雛が唯一知らない冬惺の利点――《契約者》であるがゆえの守護が、どの程度当てになるか。

――昔、綺理が初めて降神術を使ったとき、十一歳の冬惺は火雷明王の劫火の片鱗をこの身に受けた。それにもかかわらず軽傷ですんだのは、真羅の守護があったからだと聞いた。

（それを当てにさせてもらったが、《契約》に――真羅に感謝かな）

体が軋んで痛むのは確かだが、まだ動ける。戦える。空雛が長々としゃべってくれたおかげでずいぶんと回復できた。

（それに綺理が――）

綺理は、冬惺が彼女の父親を殺める前と変わらぬ必死さで、幼なじみの従兄をかばおうとしてくれた。あの叫びを聞いて湧き上がった想いだけでも、もう何にも負ける気はしない。

「悪いな、空雛。これが俺の全力だ。――目的が綺理なら、俺は手段を選ぶつもりはない」

刃を交差させていたのは、わずかな時間だった。

空雛が乾ノ力を練る気配を察し、冬惺は力任せに相手の刀を弾き飛ばす。返す刀で横薙ぎの

斬撃を繰り出すと、空雛は真後ろに跳んでかわした。
だがそこまでだ。空雛の背は、背後の胸壁についた。
「――終わりだ、鷹居の空雛！」
冬惺は一気に距離を詰め、太刀を振りかぶった。そして空雛目がけて白刃を振り下ろす――
その、刹那。
矢のように飛来した影が、刃と空雛の間に飛び込んだ！
鮮血が噴き出す。
冬惺の太刀は、割って入った影ごと空雛を斬った。だがその衝撃で刃は急所をそれた。刃はいつかのように、空雛の体を肩口から斜めに斬り裂いていた。
「……え？」
空雛の瞳が限界まで見開かれるのを見て、冬惺は彼の視線を追った。空雛の即死を防いだその影が、ぼとりと石床に落ちる。
――鷹だ。
胴を深々と斬られてぴくりとも動かないその鷹に、冬惺はつかの間混乱した。この鷹は万宵が憑いていたはずなのになぜ――と、思っている間に空雛が動いた。
瀕死の体のどこにそんな力が残っていたのか、空雛が冬惺の腹に強烈な蹴りを叩き込む。
「冬惺!?」

冬惺は綺理のかたわらまで蹴り飛ばされた。その拍子に、火球を食らったときの痛みを体が思い出し、太刀が手から離れる。――だが胸壁にもたれてずるずると座り込んだ空騅には、それ以上反撃する力は残っていないようだった。

「……空羽、今のは君か」

空騅が荒い息をつき、鷹の死骸にそっと手を伸ばす。

その指先が翼に触れるか触れないかしたとき、鷹の死骸から浅葱色の光が噴き出した。

「万宵！」

「……やれやれ。人も獣も、死を覚悟すると強引に体の主導権を奪い返しにくるから面倒だ」

叫んだ冬惺たちの前で、浅葱色の光は半透明の青年の姿になった。翡翠の瞳に、金銀交じりの黒髪。月草の襲の装束をまとった万宵が、傲然と空騅を見下ろす。

「残念無念かい、鷹将軍。その怪我では、大事な鷹の仇も討てないだろう？　鷹の仇を討ちたいならば、その手に勝利が欲しいなら、今度こそこの私を受け入れたまえ」

「万宵、貴様なにを……！」

冬惺は慌てて太刀を拾おうとしたが、それよりも空騅の口元に笑みが浮かぶほうが早かった。

「空羽の仇、か。――いいだろう。万の宵を統べる者、万宵！　憑りつけ！」

綺理は、その言葉と共に万宵が浅葱色の光の塊に戻るのを見た。

光は一直線に空騅の胸に吸い込まれ、彼の体が大きくはねる。見る間に浅葱色の光が空騅を覆い、凄まじい速度で傷がふさがる。

「……ふむ。荒療治も、二度目となるとずいぶん速いようだね」

空騅が立ち上がり、万宵の口調で言う。その異様な様に綺理はぞくりとした。額に冷や汗が伝うのを感じながら、震える唇で問う。

「万宵……。空騅将軍の体を乗っ取って、なにをする気……？」

「――綺理。下がっていろ」

耳元で冬惺が緊迫した声でささやき、手首の縛めがぶつりと断ち切られた。綺理が震える膝で立ち上がると、冬惺がすばやくその前に回って太刀を構える。

綺理たちが息を詰めてうかがう前で、空騅に憑依した万宵が禍々しい笑みを浮かべた。

「そうだね、せっかく鷹将軍の体が手に入ったのだから、彼の野望を引き継いでみるのも一興かな。――そろそろ城内に淵妖があふれている頃だしね、ここで紅楓方を勝たせてまた戦を長引かせるのもいいだろう」

「――っ！」

さらりと言われた言葉に、綺理たちは息をのんだ。万宵が優雅な動きで背後の胸壁に飛び乗り、突き立てられた火雷明王の火の剣を示す。

「雛鳥の結界は地上と淵海の境に張られたものだ。淵海から上り来る淵妖は防げても、既に地上にいた淵妖を私が呼び集めるのは防げない。――気づきたまえよ、少年、キリ。なぜ凌雲台の上り口に人が近づかず、ここに鷹将軍と少年以外の者が誰も上ってこないのか」

凌雲台の上り口を淵妖で封鎖していたのだと臭わせて、万宵は続ける。

「ついでに危うく紅楓王家の若当主が捕縛されそうになっていたのでね。淵妖に追っ手を妨害させておいた。淵妖がいる限り、紅楓の若当主は捕まらない。戦はいつまでたっても終わらない。――そしてこの結界を保つ限り、キリはもう雛鳥の力を借りられない」

嘲笑のまなざしで見下ろされ、綺理の四肢がすっと冷える。万宵はそんな綺理の表情と、ぎくりと身構えた冬惺の様子を楽しむように、くすくすと笑った。

「キリにはまだ当分、私と共に紅楓方にいてもらうとしよう。そうすれば少年も戦わないわけにはいかないだろう？　戦禍が地上に淵妖を呼び込むとわかっていても――、っ！」

万宵の冷酷な笑みが強張ったのは、そのときだった。

薄紫の瞳が凍りつき、その右腕がゆるゆると持ち上がる。その唇が、やめろ、と言うように戦慄いたが、声にはならなかった。

「な……なに？」

綺理が戸惑いながら見守る中、彼の右手が宙を泳ぎ――そばの火の剣の柄を握る！

「――！」

瞬間、火花が爆ぜ、空雛の右手から紅の炎が噴き上がった。
空雛が咆哮のような絶叫を上げ、炎にのまれた彼の右半身が焼け焦げる音がする。
次いで、彼の体から浅葱色の光が飛び出した。
「……っ、やってくれたな、鷹将軍……！」
万宵は先ほどのように半透明の青年姿になったが、その装束はぼろぼろに焼け焦げていた。
たとえ依代が傷つこうとも、魂だけの彼が傷つくことはなかったはずなのに。
（！　そっか、火雷明王の剣を使おうとしたから！）
招請者以外がその剣に触れれば、魂すらも灼かれる。――それを空雛に教えたのは、ほかならぬ綺理だ。
火の剣から手を離した空雛が、胸壁から石床にぐらりと落ちた。彼は鷹の死骸のそばに膝をつき、大火傷を負いながらもかすれた声で叫ぶ。
「――鷹は餓えても穂をつまず！　私の相棒を取り返すためでさえなければ、地上に害なす化け物と手を組んだりなどするものか！」
万宵の瞳に憎々しげな光が走る。
それを見た空雛は、脂汗を浮かべながら満足げに笑んだ。片腕で鷹の死骸を抱き上げ、ゆらりと立ち上がって冬悝を見る。
「勝負は私の負けだ、白桜の冬悝。君の全力の奇策に敗れたならば、私は敗北を受け入れよう。



――だが、せっかく私の自慢の相棒が時間をくれたんだ。悪党の美学を貫かせてもらうとするよ。……どこまで高く飛べるか試した鷹が、羽ばたくのをやめるときだ」

そう言って再び胸壁に上った空雛に、綺理と冬惺はぎょっとした。

「空雛将軍!?」

「空雛、おまえ、いったいなにを――」

ぼろぼろの体で胸壁の上に立った空雛が、鷹の死骸を抱いてにやりと笑う。

――ここは、名もまさに凌雲台。

雲を凌ぐ高みまで飛んだ鷹が、羽ばたきをやめたらどうなるかを示すように。

「悪いな、白桜の。――捕虜になるのも首をさらされるのも、趣味じゃないんだ」

鷹居の空雛は胸壁を蹴り、遥か下の淵海に身を投げた。

「空雛将軍――!」

綺理の叫びが楼上に響き渡る。

その中で、半透明の青年姿の万宵は中空にふらりと漂っていた。

今の自分は魂だけのはずなのに、全身が軋むような痛みを感じる。――乾ノ神衆の宿った剣に体を焼かれたのは空雛だが、魂を灼かれたのは万宵のほうだ。自分の体に戻って休めば魂の

傷も癒せるが、人間にしてやられたくらいで淵海に戻るのは癪に障る。
（鷹将軍という駒を失ったのは残念だが、城内には淵妖が満ちている。紅楓方を勝たせ、地上の戦火を煽るのはまだ可能。ここは淵妖にやらせて、私はまず依代を探しに――）
「――依代を失ったのかね、万宵？」
不意にかけられた声に、万宵は弾かれたように振り返った。
真羅が、いつの間にか階段の入り口の上に立っていた。螺旋階段の下からも、三人目の銀髪の《契約者》が駆け上がってくる気配がする。
魂に傷を負った直後のせいだろうが、これほど近くに来るまでもう一人の自分の気配に気づけなかったことに、万宵は不覚にもうろたえた。思わずふわりと後ろに下がる。
そんな万宵に、真羅は翡翠の瞳を不敵に輝かせ、誘うように手を伸べた。
「決着をつけよう。もう一人の私にして、さまよえる魂よ。――来たまえ」

六章　戦いの果てる刻

翔波が凌雲台の上り口にたどりついたとき、そこは紺碧の泥によってふさがれていた。壁や床や天井から淵妖がうぞうぞと這い出しては積み重なり、通路を埋める。異常な事態と、一人ではとうてい退治しきれない数の淵妖に、翔波はしばし立ちすくんだ。

そこに忽然と姿を現したのが、子狐姿の真羅だ。

『従者。どうやら万宵は淵海で派手に動きを見せる一方で、地上の淵妖をも呼び集めていたようだ。……戦の様子をうかがっているのか、淵妖はまだ積極的には兵を襲っていないがね。城内に淵妖があふれて、兵が建物から逃げ出しているよ』

ぎょっとした翔波の前で、子狐真羅はとんと宙で一回転した。彼が瞬時に童子姿に戻ると、通路をふさぐ淵妖の群れが驚いたようにたわむ。

『行こう、ショウハ。こうなったら本当にもう、淵妖を操っている万宵をどうにかするしか方法はなさそうだ。どの道、雛鳥の結界をいつまでもここに張っておくわけにはいかないのだしね。――雑魚ども、妖王の前に道を空けたまえ！』

真羅が全身に浅葱色の光をまとわせ、右腕を振り払うと、刃を差し入れたかのように淵妖の群れが左右に割れた。そこを二人して駆け抜ける。

そして翔波が螺旋階段を駆け上がり、凌雲台の上に出たとき、一足先にたどりついた真羅は魂だけの万宵と向かい合っていた。

「――依代を失ったのかね、万宵？」

綺理は真羅の声にはっと振り返り、二人の妖王が対峙している光景に息をのんだ。

同時に、翔波の姿が階段の入り口に現れる。久々に見る銀髪の幼なじみの姿に、感慨を覚えたのもつかの間。切迫した状況に、綺理と冬惺は翔波のほうへ走った。

「翔波！」

「綺理、冬惺！　なんで万宵が魂だけで……、いったいなにが――？」

互いに駆け寄って三人で立ち止まると、冬惺が早口で説明する。

「万宵の依代の鷹が死に、空雛がその鷹もろとも淵海に身を投げた。万宵の魂が傷ついているのは――空雛の置き土産、だな」

冬惺は、装束が焼け焦げてあちこち傷を負った姿の万宵を目で示した。翔波はそちらに目をやり、表情を引きしめて顎を引く。

「――そうか」

「だ、だけど真羅がここに来たら、万宵に乗っ取られちゃう！」

綺理は不安に駆られて叫んだが、翔波は決然とした面持ちで首を横に振った。
「――いや。真羅は決着をつけに来たんだよ」
二人の妖王の戦いは――地上を守る戦いは、真羅が万宵を乗っ取らなければ終わらない。《調停者》が集ったこの場所で、分かたれた二人の妖王が決着をつけるときがきたのだと。
そう告げた翔波に、しかし綺理の不安は晴れないどころか募る。
「でも今は、前と違って、火雷明王に万宵を抑えてもらうことはできないのよ……？」
――真羅が万宵を乗っ取るには、まず万宵の魂をその身に取り込まなくてはならないはず。だが前に万宵が真羅に憑依したときは、体の主導権は万宵が得た。そのため真羅は、万宵が強大な力をふるおうとするのを中から抑制するので手一杯になり、火雷明王に外から力を抑えこんでもらって初めて万宵の精神干渉をはねのけたはずだ。
（今度はその手が使えない。万宵が主導権を得たときに、一時的に翔波の秘術で動きを止めることはできるかもしれないけど……それだけじゃ真羅の助けにはならなかったはずだもの）
けれど翔波は、それも承知だというようにうなずいた。
「うん。だから冬惺、真羅が君に頼みたいことがあるって」
「どうしたのだね、万宵？　この体を乗っ取りに来ないのかね？」

警戒するようにうかがう万宵に、真羅は悠然と手を差し伸べていた。
「ふむ。そういえば前にこうして顔を合わせたときも、君は私を乗っ取りに来なかったな。――今ようやく確信したよ。決着をつけることから逃げていたのは、もう一人の自分と向き合うのを恐れていたのは、君のほうだ」
真羅は言いながら、なんだか冬惺の挑発の仕方が自分に移っているような気がした。彼らとしょっちゅう一緒にいるようになったからだろうか――と、そんなことを思う余裕もある。
対する万宵は、真羅の余裕の根拠がつかめずに戸惑っているようだった。
「……君の魂のよすがの《調停者》たちが揃っているからといって、安心しているのかね？無駄だよ真羅。いくら手負いの魂とて、私のほうが本体だ。体の主導権を奪うなど造作ない」
「そう思うのなら来たまえよ。君の念願の、地上の妖王の体が手に入るのだよ？」
躊躇することそれ自体が、万宵が真羅に対し絶対的な精神的優位を失っている証だ。
しかし彼は魂だけでは長く行動できないし、淵海の体に戻らずに魂の傷を癒そうと思えば、もう一人の自分の体に入るしかない。
万宵はすぐに翡翠の瞳を細め、その姿をゆらりと浅葱色の光の塊に変えた。
「――ならばその体、その記憶、その魂。一片残らず奪わせてもらうとしよう！」
突き進んでくる光の塊に、真羅は、ふ、と笑んだ。
万宵を体に取り込んで魂同士の決着をつける間、自分の力を抑えこんでおく秘策はある。

（頼むよ、トウセイ）

そして光が真羅の胸に吸い込まれる寸前、凛とした声が凌雲台に響いた。

「真理を網羅する者、真羅！――憑りつけ!!」

刹那、真羅の体も浅葱色の光の塊に変じた。

同色の光は螺旋に混じり合いながら宙を翔け、冬惺の構える太刀に一直線に吸い込まれる。

真羅と万宵を一つに宿したその太刀は、全体に浅葱色の光をまとい、刃が水のように透き通った。

水の太刀を手にした冬惺が、心得たようににやりと笑う。

「なるほどな。太刀の中に入ってしまえば、俺がこの太刀をふるわない限りあの子狐の力が外に出ることはない。湿ノ力を周囲にふりまく恐れもないということか」

「うん。こうすれば真羅は、自分の力のすべてを抑制する必要はなくなる。ただ太刀から離れないように抑えるだけなら、ずっと楽だって言っていた」

そう言う少年たちに、綺理は強い浅葱色の光が明滅する太刀をぽかんと見た。

「……それじゃ真羅と万宵は、この中で対決してるってこと？」

冬惺は肯定の代わりに笑むと、切っ先を下にして太刀を立てた。

「ああ。それにこれなら、俺たちもいざとなったとき真羅に発破をかけるくらいはできるだろう。――柄を」

目で合図した冬惺に、綺理ははっとした。

――火雷明王の宿った剣を手にしていたとき、柄を通して彼と会話できたように。この太刀の柄を通して中にいる真羅たちにも声が届けられるのかもしれない。

そして綺理たち三人は、みな真羅の《契約者》。この太刀に触れる資格がある。

（真羅の力になれる。この戦いの行く末をちゃんと見届けられる。……ううん、最後までみんな一緒に戦える！）

綺理、冬惺、翔波の三人は、太刀を囲んで立った。

互いに目を見交わして、綺理と翔波も太刀の柄に手を伸ばす。

（真羅――）

三人で柄を握り、強く祈ったその瞬間。

綺理の脳裏に、ここではないどこかの風景が流れ込んできた。

――風景、というにはなにもない場所かもしれない。

白く、白く、どこまでも真っ白な空間に、二人の妖王が立っていた。
濃色の童装束の童子と、月草の襲の装束の青年。
一騎打ちのように向かい合う二人の足元から、まったく同時に浅葱色の光が立ち昇る。
そんな光景を、綺理はどこかから見ていた。
（これは、太刀の中……？）
二つの魂のせめぎ合いが、具象化して見えているのだろうか。見つめていると、二人の妖王が動いた。

（――さて、ここからが本番だ）
身構えた真羅の前で、万宵がすっと両腕を掲げた。万宵の手の先で、浅葱色の光が巨大な大蛇のように渦を巻く。
「太刀の中に引き込むとはね。この小細工が君の自信の源かね？　しかし君の余裕もここまでだ。分身は決して本体にはなれないということを、とくとその身で思い知りたまえ！」
万宵が手を振り下ろし、光の大蛇が真羅に襲いかかった。
真羅はすぐさま周囲に光の障壁を張りめぐらせたが、大蛇はその障壁の上から真羅に巻きついた。真羅を包む浅葱色の光の繭が、ぎしりと軋む。

けれど真羅は、余裕の笑みを崩さずに言う。
「無駄だよ、万宵。キリたちがくれたこの心は、もう決して揺るぎはしないのだよ。――揺らいでいるのは、ずっと引きずられていたのは、君のほうだろう？」
眉をひそめた万宵に、真羅は続ける。幸い、今の万宵は魂に傷を負っている。常よりも心に隙があり、精神戦に弱いはずだ。
「いいかね、万宵。君は最初は、本体と別の心を持った私を淵海に戻そうとした。だがそれよりも地上にいる私を乗っ取ろうと考えを変え、ついには魂だけで地上に来た。それから私の心の理由が知りたくなって、《契約者》たちに興味を持った。そしてとうとう私を乗っ取ることよりも、《契約者》たちの絆の行方を知りたくなった。――わかるかね？　君の心は、興味は、次第に地上へ――キリたちへと引きずられているのだよ」
「私が君の心に引きずられているとでも言いたいのかね？　違うよ、私が地上に来たのは湿ノ神の気配が近いからなのだよ。私が《契約者》たちの絆に興味を持ったのも、それを壊せば君の心が壊れると思ったからだ。そうすれば君を乗っ取ってこの地上を壊せると思ったからだ」
「だが絆は壊れていない。キリも少年も、今も互いを大事に想っている」
「――そうだね、賭けに負けたことは認めよう」
万宵はあっさりと認め、すぐにくつくつと喉を震わせて笑った。大蛇のしめつける力が強くなり、繭がみしみしと軋りを上げる。

「だがね、それももうどうでもいいのだよ。確かに私は、かつては《契約者》にこだわって迷いかけていただろう。しかし私はもう揺らがない。私の望みはまた根本に立ち返っているのだよ。私が真に望むはただ一つ。誰よりも慕わしい、世界の母なる湿ノ神だけだ。だから私は、湿ノ神を取り戻すためにこの地上を淵海に沈め――」

「――無理だよ、万宵。君にそれはできないのだよ。その理由は君も知っているはずだ」

真羅が静かに首を振ると、万宵が怪訝な顔になった。

「万宵。本当は君も、気づいているのではないかね？」

ことさらにゆっくりと言ってから、真羅は相手の本心を見抜くように万宵を見すえる。

「――君は、キリが少年を大事に思う気持ちを変えていないと知って、心の中ではほっとしているのではないかね？」

大蛇のしめつけがゆるみ、光の繭が軋む音が消えた。

「……この私が彼らのお綺麗な絆に惹かれて改心するとでも期待しているのかね？　そんなことはありえないよ、愚かな分身よ」

せせら笑うような口調とは裏腹に、万宵は否定の言葉を口にしていない。

「私はただわからないだけだ。――少年はキリを取り戻すために、キリの大切なものを傷つけ、壊した。それでもキリの想いは変わらないという。それが不思議なだけなのだよ」

《契約者》にこだわるのはやめたと言ったそばからの矛盾だが、真羅はそれを指摘するよりも、

さらに重大な矛盾にずばりと切り込む。

「それだよ万宵。君はあれで二人の絆が壊れると考えた。――ならば、湿ノ神を取り戻すために、湿ノ神の慈しむ地上を滅ぼそうとしている君は、いったいどうなる？」

「っ！」

真羅を捕らえる光の大蛇が大きく揺らいだ。

「君は、君が湿ノ神に対してしようとしているのと同じ方法で、少年とキリの絆を壊そうとしたのだよ？　万宵、君は本当は気づいているはずだ。恐れているはずだ。――地上を淵海に沈めてしまったら、誰よりも慕わしい湿ノ神との絆が壊れてしまうのではないかと！」

万宵の動揺を示すように、光の大蛇がほどけていく。

「だから君はほっとしているのだろう？　もしもキリが少年を憎むようになってしまったら、自分も湿ノ神に憎まれることを考えずにはいられなくなるのだから」

しかも、綺理のほうは冬惺がさらいに来るのを待っていたのに対し、湿ノ神は妖王に地上を保つよう約束させたのだ。その約束を破って、湿ノ神の大事な地上を壊そうとした万宵が、どうして自分は湿ノ神に憎まれるはずがないなどと信じていられるだろうか。

「あのとき以来、君の心には迷いが生まれたはずだ。このまま北瑛島を淵海に沈めてしまっていいのか、迷っているはずだ！」

真羅を包む浅葱色の光の繭が、ひときわ強く輝いた。

しかし万宵が顔を憎々しげに歪ませると、光の大蛇は再び光の繭に巻きつく。

「違うよ、真羅。私は迷ってなどいないのだよ！　この地上から綺麗なものやあたたかいものを消し去って、汚れて冷たいもので埋め尽くせばいい。そうすれば湿ノ神も、そんな醜い地上は壊してしまっても構わないと思われるだろう。そんなもののために私たち眷属を捨てたことを悔やみ、いっそう我らの淵海を慈しまれるだろう！――だから私は、地上を乱し、壊す！」

万宵の咆哮のような叫びに、真羅は思わず気圧された。

途端、光の大蛇が、真羅を守る繭を押しつぶすようにきつく絡み付いてくる。再び繭が軋りを上げ、真羅の顔に焦りが浮かぶ。

――そこに、三人目の声が降ってきた。

「だが万宵。その割にはおまえは、寄り道ばかりしているな」

（！　トウセイ、君か）

真羅がはっとすると、太刀の外からかけられたその声が具象化したかのように、真っ白い空間に冬惺の姿が現れた。冬惺が腕を組んで傲然と言う。

「本当に《契約者》にこだわるのをやめ、地上を荒らすことだけを目指しているというのなら、おまえはこの戦に干渉して紅楓方を勝たせることに集中していたはずだ。――だがおまえは俺と空駈の一騎打ちをお膳立てし、勝負を見届けるほうを優先した」

そのかたわらに、翔波の姿も現れる。

「それとさ、万宵。一応知らせておくけど、今さら淵妖の力で紅楓方を勝たせてももう無駄だよ。君が冬惺たちの決着を見守っている間に、紅楓の朔秋は咎負いになったんだ。禁忌を犯して咎負いになれば、もう王位を主張することはできない」

（ショウハも。――キリも）

最後に綺理が現れ、顔色を変えた万宵をまっすぐに見る。

「ねえ万宵。あなたはこの地上に、綺麗なものやあたたかいものがあると思っているんでしょう？――本当はあなたも、それに惹かれているんじゃないの？」

すっと万宵の顔から表情が消えた。

その様子に、真羅の胸にある確信が生まれる。

「万宵。君は地上を知って変わったのだよ。やはり君は《契約者》たちに執着している。キリたちがなにをするか知りたい、キリたちの行く末を見届けたいと、そう思っているのだろう？だから地上を乱すと言いながら、よそ見ばかりをしているのだよ。――いいかね、万宵」

瞳を細め、決着をつけるようにきっぱりと言う。

「――迷いがある君に、私は決して負けはしない！」

気合いを込めて右腕を薙ぎ払うと、光の大蛇が粉々に砕け散った。

「――っ！」

浅葱色の光のかけらはゴゥと逆巻いて、万宵に向かう。万宵は光の竜巻にのまれてはね上げられ、白い地面に叩きつけられた。

「万宵。迷ってばかりの君に私を乗っ取るのはもう無理だ。私と一つになりたまえ」

真羅は綺理たち三人の隣にふわりと降り立ち、告げた。

けれど万宵は満身創痍で身を起こし、なおも右手を掲げる。

「……なるほど、確かに君たちは私の迷いを暴いたね。だがね真羅、そう言う君はどうなのだね。君にも迷いがないとは言わせない！」

万宵が右手を地面に叩きつける。

途端、どこまでも白かった風景が薄青に塗り替えられた。とろりとした気があたりに満ちる。

万宵が頭上を指で示し、つられて見上げた真羅ははっとした。

遥か上方に、二つの勾玉が浮かんでいる。――あれは。

「真羅。あれ……なに？」

ささやいた綺理に、真羅は胸が騒ぐのを感じながら答える。

「……北瑛島と南晶島。これは、淵海の深淵から仰ぎ見た地上の姿だ」

遠く遠く、遥か遠くにある二つの勾玉形の島を指さして、万宵が言う。

「真羅。私たちは長い間、こうして焦がれて見上げていただろう？　淵海にたゆたうあの不安



定な地上で眠りについてしまった湿ノ神に、ずっとずっと焦がれていただろう？　取り戻したいとは――再び会いたいとは、本当に思わないのかね？」

（……っ）

真羅は思わず自分の左胸を押さえた。――思わないわけがない。湿ノ神への強い思慕に沸きかえる魂は、会えるものならもう一度と、いつだって騒いでいる。

「君は確かに地上にも惹かれているのだろう。けれどそれと湿ノ神への思慕は別だろう？　このまま永遠に我らの神に会えなくて、君はそれでいいのかね？――再会の望みすらなく、ただ遠くから想っているだけで幸せなどと、そんなことを心から言えるのかね!?」

悲鳴のような声に、心が揺さぶられる。湿ノ神との約束を守りたい。それは確かだ。けれどそれは湿ノ神のためであり、真羅自身の幸せのためとはまた違う。

「真羅。君がそれで幸せになれるというなら、君と一つになるのもいいだろう。だが――」

万宵が言い募ろうとしたそのとき。

「――やっとわかった」

不意に、冬惺が声を上げた。

「真羅、万宵。――おまえたちに、湿ノ神から伝言がある」

――とろりとした薄青色の中に浮かぶ、二つの勾玉形の島。
万宵がそれをこの白い空間に出現させたとき、冬惺は強い既視感を覚えた。前に似たようなものを見たことがある気がして記憶をたどり、はたと気づく。
（――夢だ。夢で見たあの卵だ）
二つの胎児が入ったあの卵を満たしていたのも、こんな色の液体ではなかったか？　そしてこれは、晴れた日の淵海の色ではないのか？
（胎児の形は……勾玉の形だ）
そう気づいた瞬間、冬惺は雷撃に打たれたように凍りついた。
脳裏でさまざまなかけらが次々に組み合わさっていくのを感じる。あの卵の正体も、今ならわかる。ちょうどそのとき耳に滑り入った万宵の言葉で、最後のかけらもぴたりとはまった。
理の揺らぐ地で見たあの夢の意味が、ようやく解けた。
（綺理の姿を借りて現れたあれは――）
「湿ノ神だ。真羅、万宵。俺は湿ノ神に会っている。鏡作の里に泊まった夜、夢に湿ノ神が現れて、俺におまえたちへの伝言を頼んだんだ」
気づいたままに言うと、全員の視線が冬惺に集まった。呆気に取られたように固まっている真羅と万宵に、冬惺は夢の説明をする。
「縁の糸……俺が真羅の《契約者》だから、湿ノ神は俺の夢に来た。湿ノ神は卵を抱いていた。

卵を温めているから動けないのだと言っていた。あの卵は――世界だ」

あの卵の正体は、淵海とそこに浮かぶ勾玉形の二島だったのだ。

（天地が交わり、地ができたときを、国産みという。だが――）

湿ノ神は、泥の海にたゆたうこの地上が、まだ誕まれていなかったと言ったのだ！

「――世界は、孵化を待っているんだ」

自分でもまだ呆然としながら、冬惺は言った。

この地上が不安定で、乾湿の力の釣り合いが取れていなければ保たれないのは、未熟で孵化していないからだったのだ。――あの夢で見たように地上が成長していけば、やがて殻が割れる。地上は、淵海という異界から離れ、ようやく一つの安定した世界として誕生する。

冬惺は確信を込めて、二人の妖王に告げた。

「いつか必ず、この地上は安定する。世界の母なる湿ノ神は、そのときまで地上を育むつもりで地上にいるんだ。だから伝言は、『待っていてほしい。いつか必ず帰るから』――だ」

（湿ノ神が、いつか淵海に帰ってくる……）

再会の約束に、万宵は心が震えるのを感じた。

——冬惺の夢の記憶を通じて、慕わしい湿ノ神の気配が一瞬この場に満ちた。湿ノ神は確かに自分たちに伝言を、約束をしてくれたのだ。

（湿ノ神よ、世界の母なる愛しき神よ。私たち淵海の眷属は、あなたを待っていてよいのか。……それでは私たちは、あなたの愛を失ってしまったわけではなかったのか）

魂の奥底に刺さっていた棘が、すっと溶ける。それは、おそらくは真羅も心の底に抱えていたであろう不安。

湿ノ神が淵海に帰らずに地上で眠りについたのは、湿ノ神がもはや淵海の眷属を愛さなくなったからではないのか——。そんな不安が心の根底にあったから、万宵は湿ノ神との約束を守り続けるという決意が揺らいだのだ。地上がある限り、湿ノ神だけでなく、湿ノ神の愛をも二度と取り戻せないのではと恐れるようになったのだ。

——けれど国産みのときの約束を破らなくても、湿ノ神の大切なものを傷つけなくても、誰よりも慕わしいあの神はいつか必ず帰ってきてくれる。

希望の光に震えた万宵に、歓喜に満ちた顔の真羅が手を伸べた。

「ならば万宵。私と一緒にそのときを待たないかね？　湿ノ神が帰ってくるそのときまで、地上を見守りながら待ってみないかね？」

「地上を……見守りながら？」

へたりこんだまま顔を上げると、真羅が嬉しそうに笑う。
「君が北瑛島を淵海に沈めようとするのをやめれば、私とキリたちの《契約》は完了するのだよ。この体はなんの制約もなく地上にいられるようになるのでね、私たちは淵海と地上の双方から地上を守れるようになる。……君もキリたちの行く末を見届けたいのだろう？」
「！　じゃあ真羅はこれからも私たちと一緒にいてくれるの？」
綺理がぱっと顔を輝かせ、冬惺と翔波が口々に言う。
「この子狐のことだ。淵妖の脅威がなくなれば、それをいいことにのんびり地上生活を満喫しないわけがないだろう。俺たちにちょっかいを出しつつ、あちこち飛び回るに決まっている」
「ああ。真羅、君、さりげなく瑛国のお酒の銘柄を制覇しようとしてるしね……」
（……なんだね、その楽しそうな未来図は）
万宵は真羅と、真羅のそばにいる三人を眺めて、ぽつりと思う。
先ほど迷いを暴かれたせいだろうか。今は心の防壁が取り払われて、自分の存在にかけて決して認めたくなかった感情がむき出しになっている気がする。
（そうか……。私は、真羅が羨ましかったのだね）
自分は綺理の近くにいて、綺理に惹かれた。けれど綺理とあたたかく居心地のいい関係を築いているのは真羅で、万宵は真羅の代わりとしてそのおこぼれにあずかっていただけ。それが腹立たしくて、自分のいないところで生まれた絆などすべて壊してやりたいと思ったのだ。

地上と湿ノ神、地上と真羅の絆を壊そうとしたのも同じ。そのあたたかい関係から自分が排除されているのが悔しかったから、欲しいのに手に入らないから壊してしまいたかったのだ。けれど真羅と一つになれば、憧れていたものにも手が届く。

（……ひょっとしたら私は、ずっと前から真羅になりたかったのかもしれない）

「来たまえ、万宵。共に待とう。……地上を優しく見守りながら」

穏やかに手を伸べる真羅を、万宵は子どものような表情で見た。

まぶしがるように目を細め、ゆっくりとその手を取る。

「そうだね、真羅。――君と一つになることを受け入れよう」

視界が現に切り替わった瞬間、三人で囲んだ太刀から強い浅葱色の光が放たれた。

まぶしさに目をつぶる。そしておそるおそる開けたときには、綺理たち三人のそばには童子姿の真羅が立っていた。

「真羅！　よかった、真羅が凌雲台に来たときにはどうなるかと思ったもの！」

綺理は安堵のあまり、真羅に抱きついた。照れくさそうに笑う真羅をぎゅっと抱きしめてか

ら、彼の装束が万宵の着ていたものを縮めた形になっているのに気づく。
「……真羅。君、万宵を乗っ取ったんだよね？」
「というより、一つに混ざったのかな。万宵の記憶も受け継いでいるよ」
綺理と同じことに気づいたらしい翔波に、真羅が小首を傾げて答えた。綺理はそっか、と微笑む。
「それはちょっと嬉しいかも。鷹の万宵、私はそんなに嫌いじゃなかったから」
「あ、そうそう。特技が増えたよ。これからは子狐だけでなく鷹の姿にも変化できる」
「……真羅。おまえはそれよりもう少し現状に有効な特技が増えたんじゃないのか？　万宵と決着をつけたのはなんのためだ」
のんきな会話に、冬惺が低くうなった。真羅が首をすくめる。
「わかっているよ。ちょうど淵海にいる本体にも私の魂が入ったところだ。まずは妖王としてすべきことをして――君たちとの《契約》を完了させよう」
綺理が腕をほどくと、真羅はふわりと階段の入り口の上に飛び乗った。
「下がっていたまえ。城に入り込んだ淵妖を、淵海に還らせる」
綺理たち三人が火雷明王の剣のそばまで下がると、真羅がすっと両腕を横に伸ばした。
そして綺理の耳に、真羅が淵妖の声で叫ぶのが聞こえてきた。
〈世界の淵源の海より来たりし我が眷属たちよ！　淵海、地上、どちらの妖王も、今よりはこ

の真羅だ。――これより先は、真の妖王『森羅万象を統べる者』真羅の名に従うがいい！〉

真羅が両腕を頭上に上げると、応じるように凌雲台が震えた。

「……おい、なんだ？」

湿った妖気が急速に近づいてくる気配に、冬惺が翔波に目をやる。右目を銀色に変えた翔波が、ひくりと頬を引きつらせた。

「この城にあふれていた淵妖が、全部ここに向かって――」

言い終わる前に、高楼の外壁を這い登ってきた数多の淵妖が、高波のように押し寄せる！けれど。

〈これより先、地上に害なすことは許さない。――疾く、淵海に還りたまえ！〉

真羅が両腕を一気に振り下ろすと、凌雲台に集まった淵妖の群れがどっと石床に沈んだ。淵妖たちはそのまま城の真下の地面から淵海に吸い込まれたのだろう。紺碧の泥は瞬く間に一滴残らず消え、――同時に、綺理は胸の奥でなにかの重みがふっと消えるのを感じた。

（？　今のって……？）

冬惺と翔波も同じ感覚を覚えたのか、三人で顔を見合わせる。

そこに、真羅がふわりと降り立った。

「これでこの一帯の淵妖はおとなしく淵海に戻ったはずだ。それに淵海にいる私の口からも命じたのでね、淵海があふれることももうないよ。――妖王が地上を狙うのをやめ、凌雲城に迫

っていた淵妖の脅威も除かれたのでね。私たちの《契約》は完了したはずだ」

淵妖から大切な人たちを守る――。

それが《契約》のときの願いだった。それがついに果たされたのだ。

（これでもう、地上が淵海に沈められることはない――！）

感慨に胸を熱くした綺理に、真羅がひょいと肩をすくめてみせた。

「ただしね、君たちの淵妖を斬る力や見る力、声を聞く力は置き土産で残っているはずだよ。それと、まあ……私との腐れ縁も」

友情の間違いだろうと綺理は思ったが、訂正はせずにくすりと笑った。

「うん。これからもよろしくね」

「よろしく。――と、そうだ。雛鳥の結界、もう解いても平気だよ」

言われて淵海をのぞきこむと、不気味な紺碧に渦巻いていた淵海の表面が、穏やかな薄青に凪いでいくところだった。

ほっとして突き立てたままの火の剣を抜くと、剣の中から火雷明王が陽炎のように現れる。

「火雷明王！　もう大丈夫です。真羅が淵妖をみんな鎮めてくれましたから！」

火雷明王は剣に宿っている間のこともある程度知覚しているはずだが、それでも嬉しくて満面の笑みで報告する。

「淵妖を還らせたか。真羅、おぬし――」

「この私が真の妖王になったということだよ、金の翅の明王よ」
真羅が不敵に笑って明言すると、火雷明王は安堵したように眉間のしわを消した。
「……そうか。おぬしを滅ぼさねばならぬときが来なくて、なによりだ」
そうして、ふっと穏やかな空気が流れたときだった。
建物が、大きく軋む音がした。
足元に揺れが伝わり、和やかな空気が凍りつく。
石床にびしびしと亀裂が走っていくのを見て、綺理はある心当たりに青くなった。
「……そういえば、凌雲台の下って淵妖が集まっていたのよね？」
口にした途端、不吉な予感を肯定するように足元がぐらぐらと揺れはじめる。
「うん。大量の淵妖のせいで石組みがもろくなっても、石の隙間に淵妖が入り込んで支えている間は大丈夫だけど……、っ！」
凌雲台が鳴動し、三人は立っていられずその場に膝をつく。
「それが一気にいなくなったら――！」
冬惺が皆まで言う前に、火雷明王が凄まじい速さで綺理と翔波を脇に抱えた。
「冬の少年もつかまれ！――崩れるぞ！」
直後、石造りの建物が裂ける音がして。
――凌雲台は轟音と共に崩落した。

兵たちが凌雲台の異状に気がついたのは、淵妖が高楼の外壁を這い登りはじめたときだった。

「おい、見ろ！　淵妖が凌雲台に！」

その頃には紅白どちらの兵も淵妖から逃げて郭や城外へ出て、退避中に行き合った兵と剣を合わせるという混戦状態に陥っていた。そんな彼らは、突然潮が引くように凌雲台に向かいはじめた淵妖に驚き、紺碧の泥が外壁を覆っていく様を不安な目で見上げていた。

「りょ、凌雲台には金蘭王妃の加護があるんじゃ……」

「いや、こんなに淵妖が現れるなんて、この城が呪われているに決まって――」

しかし誰かがそう叫びかけたとき、凌雲台を覆いつくさんばかりの淵妖の群れが、一挙に真下の建物や地面に吸い込まれて消えた。

そして「淵妖が還った……？」という声が広がる中、突如凌雲台が歪んだのだ。

亀裂が走り、砂礫がぱらぱらと落ちる。めきめきと不吉な音を立て、石造りの高楼が軋む。

一瞬金の光が閃いたあと――凌雲台が一気にひしゃげて崩壊する！

空が割れんばかりの轟音が城を揺るがし、石組みががらがらと崩れて瓦礫が降りそそぐ。

「凌雲台が……っ！」

「馬鹿なっ、金蘭王妃の凌雲台が、崩れ――!?」

砂塵がもうもうと立ち、驚愕の叫びがあちこちで上がる。

もともと凌雲台の付近は淵妖が多かったので、周辺にはどちらの軍の兵もいなかった。崩落に巻き込まれた者はほとんどいなかったが、それゆえに誰もが動きを止めて、初代志輝王の時代からの堅固な高楼の成れの果てを愕然と見つめていた。

「ど、どうなっているんだ……？」

「凌雲台の上にいた者は……金蘭王妃の宝剣は？」

「そ、そうだ。凌雲台の加護がなくなったら、この城はどうなるんだ!?」

兵たちの間で悲鳴が上がりはじめる。両軍共に総大将が行方不明という事態に、どちらの指揮官もどうしたらいいかわからず狼狽するばかり。姿が見えない総大将があの瓦礫の下にいるのでは、という恐ろしい想像が伝染していく。

そして膨れ上がった不安が、恐慌へと変わりかけたそのときだ。

「あ……あれを見ろ！」

誰かが指さした、その指の先で。

――瓦礫の山から、まばゆい金色の光の鳥が舞い上がった。

先ほどまでとは違う、畏怖のどよめきが波及する。
「あれは……乾ノ神衆！」
「金蘭王妃の招請した、大天火雷金翅明王だ！」
鳥と見えたのは、金炎の翼を大きく広げた火雷明王だった。まばゆい光を放って滞空する乾ノ神衆にすべての者が見入る中、彼らの頭に火雷明王の声が響く。
『――剣を収めよ。淵海の妖魔は去り、おぬしらにももはや戦いを続ける理由はない。金蘭の末裔、紅楓の朔秋は、乾ノ神の定めし理に触れ、この王国の守護者たる資格を失っている』
紅楓軍を中心にざわめきが走った。朔秋が咎負いになったとの報せを虚報と思っている者が多かったのだ。兵たちは呆然と剣を下ろし、脳裏にじかに伝わってくる声を聞く。
『金蘭の末裔が二家に分かれて争うこと久しく、ついに北の果ての地まで戦火が及んだ。戦乱を好む泥の妖が現れたのはそれゆえだ。私はかつてこの地で交わした、我が招請者金蘭との約定により、淵妖を討伐しに参った』
兵がざわつき、やはりこの地には金蘭王妃の加護があったのだとささやく。
「だが金蘭王妃は……大天火雷金翅明王は、白桜と紅楓のどちらを加護していたのだ？」
誰かがそんなつぶやきを漏らしたのを耳にしたかのように、火雷明王が続けた。
『私が守護するのは、白でも赤でもなく、金。ただ金蘭の愛したこの王国のみ。乾ノ神衆は人を敵とせず、人の戦にも権威にもかかわりはせぬ。――されど二度と淵妖を招かぬためにも、

ようやく訪れし平和を大切にすべしと伝えおこう』

火雷明王は翼をはためかせた。高く高く羽ばたいて天上に帰っていきながら、最後に祝いの詞を地上に降らせる。

『――我が守護のもとに、金蘭の王国に永遠の平穏が訪れんことを』

瓦礫の山のかたわらで、綺理たちは火雷明王が飛び去るのを見送っていた。

「これで本当に、全部の戦いが終わりね……」

綺理たち三人は、翼を持つ火雷明王のおかげで、崩壊した凌雲台から無事に脱出していた。火雷明王は郭の片隅に三人をひっそりと下ろすと、冬惺と手早く辻褄あわせの相談をしてから兵に姿を見せに行ったのだ。

綺理はその間際に火雷明王が言ったことを思い出す。

『淵妖との戦いは終わった。我が姫が私の力を必要とすることは、おそらくもうないだろう。だが……また話し相手にでも私を呼んでくれれば嬉しく思う』

戦いが終わったからといって、火雷明王とお別れではない。それが嬉しかった。

（真羅とも）

綺理が目を向けると、瓦礫に座る真羅は「そろそろ人が来る」と立ち上がり、微笑んだ。
「私は一旦退散しよう。――また、今度」
そう言って真羅が姿を消すと、あとには綺理、冬惺、翔波の三人が残った。
（でも……）
三人で顔を見合わせて、一瞬お互いにどんな顔をしたらいいかわからないような沈黙が入る。
「……火雷明王に降臨の理由をこじつけさせたし、肝心の凌雲台がこの有様だ。降神術の使い手の件はうやむやになるだろうから、それは心配するな」
「……ん、そっか」
戦いの間は自然に仲間でいられたけれど、それもここまで。遠くで朔秋が捕縛されたとの声が上がり、冬惺を見つけた白桜軍の兵たちの足音が近づいてくる。
――自分たちはただの綺理と冬惺ではなく、玉造の綺理と白桜の冬惺にならなくてはいけなくなる。
「……ね、私ってどうなるのかな。護送される前に怪我の手当てとかできたらいいんだけど」
「!?　おまえ、どこか怪我して――？」
冬惺が弾かれたように綺理の腕をとり、手首を見た。空駆に縛られたところは、もがいたときに少し擦れて赤くなっただけだったが、染料で描かれた偽の痣に目を留めてぎょっとなる。
けれどそれよりもなによりも、綺理は朔秋にはめられた婚約の証の銀環を冬惺に見られたく

なくて、慌てて冬惺の手を振り払ってしまった。

「……悪い」

冬惺の瞳に悔恨の色が浮かぶ。だが綺理は袖で銀環を隠すのに必死で、それを見逃していた。

「ご、ごめんね。でもこの痣は描いてあるだけだからなんともないの。ええと、私のじゃなくて冬惺と翔波の怪我の手当てのつもりだったんだけど……無理、よね。罪人だし」

自分が反逆者の娘であり、今なお紅楓方の王の婚約者であることを、銀環に思い知らされた気がする。声を暗くして言うと、隣から翔波が口を挟んだ。

「大丈夫、君が謀反人の扱いを受けることはないよ。冬惺が戦功の報奨として、春怜陛下に前もって約束を取り付けているから、君が反逆の罪に問われることはないんだ」

「――そうなの？」

冬惺が、を強調して言った彼に、綺理ははっと冬惺を見返す。しかし冬惺の反応は、綺理の期待していたものとは違い、沈んだものだった。

「……ああ。細かい沙汰は王都に戻ってからになるがな。もしおまえに事情を聞く必要が生じても、その場合は必ず翔波を行かせるから尋問の心配もいらない。……ただ、怪我の手当ては」

「……そう、よね。あの、でも、本当にありがとう」

ぎごちない会話をしている間に、白桜軍の指揮官や兵たちがやってきた。

総大将の無事に息をついた彼らが、驚いたように綺理を見る。その前で、冬惺は綺理に他人行儀な礼をした。

「――玉造の綺理姫。あなたにも、白桜の姫として王都へご同行いただく」

災厄と奇跡が起こった凌雲城の戦いを最後に、二王家の王位争いは完全に幕を閉じた。

紅楓王家の最後の一人朔秋は、咎負いとして王位継承権を失った上で捕縛された。そのため北部に残っていた紅楓方の勢力も、即座に白桜方に帰順。ここに内乱の鎮圧を見る。

紅楓軍総大将、鷹居の空雛は、戦死と発表されたものの死体が見つかることはなかった。凌雲台の崩落に巻き込まれたのだろうというのが多くの兵の見解だったが、実はどこかで生きているのではという噂も流れることになる。

――そして護国大将軍率いる白桜軍は、王都への凱旋の途についた。

七章　君と再会の約束を

春の盛り。桜も散り過ぎ、藤の花が咲く頃――。

綺理は凱旋する白桜軍と共に、王都輪瑛に戻ってきた。

（なんだかすごく久しぶり。婚約式のために王都を発ったのは、たった半年と少し前だったのに……）

北部と違う乾いた風に懐かしさを覚える一方で、綺理は王都を出たときと今とで多くのことが変わってしまったのを思う。

――綺理は冬惺のおかげで反逆の罪に問われることはなく、王都への道中も捕虜ではなく王の従妹姫として丁重に扱われていた。また冬惺が、捕らえた朔秋に婚約破棄を迫ったため、綺理と朔秋の婚約もすぐに解消された。

けれど道中、冬惺とはほとんど会うことができなかった。

会えても人前で、お互い他人行儀な態度を取っていた。冬惺は綺理に対し、特赦を筆頭に破格な処置を行っているので、逆にあまり親しくしているところを見られるとまずいのだ。綺理が保身のために元婚約者の敵に取り入った、などという噂が立ちかねない。

（もし、『護国大将軍はあの姫にたぶらかされて寛大な処置を約束したんだ』――なんて思わ

れるようになったら、冬惺の評判にも傷がついちゃうもんね。……でも、やっぱり寂しいな）

話すことはたいてい翔波伝い。唯一ちゃんと顔を合わせて話したのは、冬惺が影珀のことで綺理に「すまなかった」と謝罪したときくらいだ。

その件にしても、あとで影珀の死の真相をきちんと教えてくれたのは真羅である。

『どうも少年は、言い訳がましくなることを避けて正確な話をしないように思うのでね。ありのままに伝えられるのは私だけだろう。私は万宵の記憶を引き継いでいるし――淵海に還ったもう一人の当事者も、淵海にいる私がさっき見つけてね。話を聞きだしたところだ』

そう言って真羅が語ってくれたことは、父の死に淵海の策謀がかかわっていたであろうことを薄々察していた綺理にとっても驚きだった。けれどそれですべてが腑に落ちた。そして。

『エイハクは自我が乗っ取られていくのを恐れて、魂のよすがにとキリの守り袋を身につけていたのかもしれない。閃禍は時間をかけて完全にエイハクの自我を消し去ろうとしていたはずなのでね。そうした拠り所がなければ、最期にもう一度だけ自我が蘇るなどということは起こりえなかっただろう』

あくまで推測だがね、と真羅は付け加えたが、綺理はそれを信じたいと思う。――無事でいてほしいという願いを込めた守り袋を、父が己の心を守るために持っていたのなら。誇りを守るために死を望んだ最期のときも、父は綺理の思いを受け取ってくれていたことになる。

（――お父さまのことでやっと気持ちに整理がついたから、そのことを冬惺に話したかったの

に……。ちゃんと伝えられるときは、いつ来るのかな。……いつか来るのかな）

綺理は切ない予感を胸に、久しぶりの王宮の門をくぐった。

『久しぶりだね、我が麗しの従妹姫。一段と大人びて綺麗になって、見違えるところだった』

王宮に着いた綺理を、春怜王はなにごともなかったかのような笑顔で迎えた。

千紗も綺理の姿を見るなり駆け寄ってきて、「綺理さま、よかった！」と抱きついて全身で喜びを表してくれた。姉夫婦もしばらく会わないうちにずいぶん雰囲気が穏やかになり、言葉少なながら綺理の無事の帰還を喜んで出迎えてくれた。

やがて戦後処理についても、正式な沙汰が下った。

咎負いとなった紅楓の朔秋は、もはや反乱の旗印とはなりえないということで、処刑を免れて辺境の城に流罪となった。咎負いになった乾術師がそのあとに子孫をもうけても、乾術師の素質は受け継がれないので、王家としての紅楓の血筋は完全に絶えたことになる。朔秋自身、絶対の自信を持っていた乾術師の力を失って、意気消沈して辺境へ下っていったという。

広大な玉造家領は解体され、その莫大な富も大半は没収されることになった。

しかし玻璃も綺理も反逆の罪には問われていない身なので、玉造家の財産をある程度相続することが認められた。それにより、玉造の里は綺理が受け継ぐことになった。

財産の引き継ぎにあたって煩雑な手続きに追われ、王都での日々は目まぐるしく過ぎていく。綺理はその間姉夫婦の屋敷に身を寄せ、少数ながら玉造の里から馴染みの侍女や家人を呼んで暮らしていた。

王宮へ行く機会は少なく、行っても冬惺と会えることはほとんどなかった。その姿を遠くに見るだけか、会えても人前なので他人行儀を貫くかで、きちんと向き合うことはできないまま。そして、かつて玉造軍侵攻の危機にさらされた王都の目は、綺理に対して決して穏やかとは言いがたかった。王宮ではさらに、冬惺の妻の座を狙う多くの姫が綺理を敵視している。冬惺が綺理を従妹として気遣うことにさえ、勘繰りのまなざしが向けられ、ますます冬惺に会うことができなくなる。

そうこうするうちに財産の引き継ぎ処置も終わり、王都に居残る理由をなくした綺理は、玉造の里へと去ることになった。

綺理が玉造の里へと発つ朝、翔波は西山門に見送りに来ていた。

かつて婚約式のために里に向かったときとは比べ物にならない小さな行列が、開門の時刻を待って門前広場の片隅にひっそりとたたずんでいる。

翔波が近づくと、小さな屋形車のそばにいた綺理がこちらに気づいた。
「翔波！　来てくれたんだ」
駆け寄ってきた彼女の目が、一瞬もう一人の姿を探すようにさまよう。翔波はそれを見て、用意していた嘘をついた。
「うん。……冬惺も見送りに出たがっていたけど、仕事でどうしても来られなくなったんだ」
――本当は違う。冬惺は仕事にかこつけて、見送りに出ることを拒んだのだ。
（あの、馬鹿。綺理を取り戻したら、告白して求婚するんじゃなかったのか）
内心で罵倒する。再会以来、冬惺が綺理に会うのを躊躇しているのは翔波も知っているが、それでも冬惺を引きずってこられなかった自分が腹立たしい。
けれど翔波は、冬惺がもう綺理に想いを告げるつもりがないのだということもわかっていた。それどころか冬惺は、すべての戦いが終わった今、その瞳から生気を失ってしまったようにさえ見える。まるで、『さらいに行く』というあの約束だけが彼を支えていて、約束を果たし終えた途端にその先の未来を描けなくなってしまったかのように。
（僕も真羅も、君たちのこんな行く末を見守りたかったわけじゃないのに）
思っていると、綺理がぽんと手のひらを合わせた。
「そうだ。おめでとう、翔波。鏡作家の所領と当主権、もうすぐ返還されることになったんだって？　戦功が認められて、所領もずいぶん加増されるって聞いたわ」

「ああ、うん。じきに授与式があって正式に鏡作家当主になるから、そうしたら閣下の従者からも外れることになる。これからも閣下の下に仕えることには変わりないけどね」

翔波は一連の内乱の中で、千紗王女救出も含めて気づけば数々の手柄を立てていた。加えて、朔秋捕縛に関しても功があったことが認められたため、没落前の鏡作家の旧領をほとんど回復するほどの加増が行われることになったのだ。そのためその報奨の付与にともなって、成人を待たずに所領と当主権が返還されることに決まったのである。

「貴族の当主以上には文武両官の兼任が認められるから、文官の籍を持ちつつ軍府でも官職を得られることになったんだ。閣下は軍府は掌握しているけど、文官とのつながりは薄いからさ。僕が橋渡し役になるってところかな」

ちなみに翔波は、軍府で諜報を担うことになった。鏡作の間者たちを従えているのに加え、王都の情報屋ともつながりを持っている点が評価されたためだ。

「僕もしばらくは王都にいるけど、落ち着いたら王都と所領を行ったり来たりすることになると思う。そのうち鏡作の里に行くから……そうしたら隣の玉造の里にも訪ねていくよ」

言ってから、翔波は不意に気づいた。

――きっと冬惺が玉造の里へ行くことはないだろう。冬惺が自分から綺理に会いに行くことはもうないだろう。それならばこれからは、翔波のほうが冬惺よりも彼女に近くなるのだ。

「うん、ありがと。私も時々鏡作の里に遊びに行っていい？」

微笑む綺理に、ひどく利己的な夢想が脳裏に浮かぶ。――冬惺は綺理に会いに行かない。翔波は傷心の綺理を訪ねて、彼女の寂しさを紛らわせてあげることができる。隣り合った領地を互いに行ったり来たりして、だんだん翔波のほうが綺理との時を重ねていく。

（そうして、いつか）

綺麗な碧玉の瞳を見つめて、思う。

いつか――、と裏切りに似た思いが胸をかすめる。

そのとき、綺理の微笑みがふっと切なげなものに変わった。

「翔波。……冬惺のこと、お願いね。遠くから見てても、ずっと元気なかったから」

碧玉の瞳に頼るような表情が浮かび、翔波は胸をつかれた。

翔波だから頼めると言わんばかりのそのまなざしは、いつもはとても嬉しくて誇らしいのに、今だけは少し切ない。切なさを胸の奥に押し込めて、安心させるように笑顔で請け合う。

「ありがとう。それとこれ。手紙を書いたから、冬惺に渡してくれる？」

差し出された手紙に、翔波ははっと綺理を見返した。彼女が淡く笑う。

「……いつかまた会おうねって手紙。今日、冬惺は来られないかもしれないから」

（――――）

では。冬惺が見送りに来ないことも、このままでは彼が玉造の里を訪ねる日が来ないであろうことも、彼女はわかっていたのだ。

翔波は神妙に手紙を受け取ってから、言った。

「君も、困ったことがあったらすぐに相談してよ。――変な男に言い寄られたりしたら、僕らがなんとかするからさ」

綺理が受け継いだのは、解体された玉造家の財産のほんの一部だ。それでも玉造の里を中心としたその領地は、財産目当ての中下級貴族が群がるほどのものはある。国王の従妹姫という高貴な血筋ゆえに引け目を感じていた者たちも、綺理が謀反人の娘となった今、これなら手が届くと思っても不思議ではない。

綺理が王都から遠い里にいる間に、よからぬ貴族に強引に縁談を推し進められるような事態にならねばよいが――と危惧していると、綺理が苦笑した。

「それは大丈夫のはずよ。冬惺が、私の後見権の一部を持つことになったから」

「――って、まさか結婚承認権!?」

翔波は声を裏返した。

――それは、冬惺の許可を得ない限り誰も綺理と結婚できないことを意味する。

「そう。だから私に来る縁談は、まず冬惺のところに回されるはず。それにこうしておけば、たとえ春怜陛下でも私に政略結婚を強いることはできなくなるからって」

「……冬惺、あの馬鹿」

口をついて出た小さなつぶやきは、開門を告げる銅鑼の音にかき消された。

姫さま、と桂鈴が声をかけて出発を告げる。
「……じゃ、行くね。次会うときまでに、正式に鏡作家領を継いだお祝いを考えておくから」
屋形車へ向かおうとした綺理を、翔波は思わず肩をつかんで引き止めた。
彼女の両肩に手をのせて、しばらく会えなくなるその姿を目に焼き付けるようにじっと見つめる。少女から女性へと変わりつつある幼なじみの、その美しく長い金髪を。動乱をこえて大人びた綺麗な面差しを。――そして、ここにいない誰かのために翳った瞳を。
（――綺理。僕は、『冬惺が駄目なら、じゃあ翔波』でもいいんだよ？）
少し切ないけれど、それでも綺理の『一番』が常に冬惺であることは昔からわかっている。綺理の心の一番の座を求めるつもりはないけれど、それでもいつか――、と思ってしまう。
焦がれるように見つめて、ゆっくりと身をかがませる。
「……翔波？」
近づいてきた顔に、綺理がきょとんとした顔になる。
（綺理。――僕は、君が好きだよ）
心の中でささやいて、翔波はそのままこつんと額と額を合わせた。
「――元気で。会いに行くから」
道中の無事を祈るまじないに、綺理がくすりと笑う気配がした。
「うん。待ってる。――またね」

からからと車輪の回る音がして、王都がだんだん遠ざかる。
翔波の姿はすぐに見えなくなり、物見窓から見やる王都が小さくなっていく。その様に、綺理は視界がじわりとにじむのを感じた。
（冬惺……。最後にひと目でも見たかったな）
『どうか、再会を約束して』
前日の真夜中に書いた手紙の、最後の文を思い出す。
離れ離れになっていた間ずっと冬惺の約束で心を支えていたように、再会の約束があると思いたくて、あんな手紙で一方的に約束を押し付けてしまった。
（でも、王都の市を回って髪結い紐を選んで交換する約束も、まだ果たせていないんだし）
言い訳するように思ってから、すぐに自分で否定する。――違う。自分はたぶんあの約束を残しておきたかったのだ。約束が全部なくなってしまうのが、怖かったから。
（そういえばあの手紙、翔波は恋文とでも思ったのかな）
だから彼は、綺理が冬惺に告白できずじまいだったことに触れなかったのだろうか。
――けれど綺理はもう、冬惺に想いを伝えるつもりはない。

もともと綺理と冬惺の結婚の可能性は、完全になくなっている。綺理が謀反人の娘で紅楓の朔秋の婚約者だった事実は変えられないし、もう莫大な富と所領の半分を受け継ぐ相続人というわけでもない。名実共に、冬惺の結婚相手にはなりえない。

（でも、もし私が冬惺に告白したら、冬惺は私と結婚しようとするかもしれない。――私に負い目があるから、償いの代わりに私の気持ちに応えようとするかもしれない）

そうとわかっていながら冬惺に想いを伝えるのは卑怯だし、どちらも幸せにはなれない。

それにそうして冬惺が綺理との結婚を望んでも、春怜王は難色を示すはずだ。結婚が叶わなければ、冬惺はまた綺理に対して負い目を増やすことになる。

（私はこの想いを、決して冬惺に伝えちゃいけない――）

胸に納めた組み紐のお守りを、上衣の上から押さえて、綺理はあふれた涙をぬぐった。

振り切るように物見窓を閉め、前を向く。

（里に帰ったら、お父さまの墓所に参ろう。埋めておいた秘蔵の毒薬を掘り出して、薬房を再建して、思う存分毒薬調合をしよう。翔波へのお祝いを考えて、それからそれから……）

これから綺理は北の玉造の地で、冬惺は南の王都で、そして翔波は北と南を行ったりきたりしながら生きていくのだろう。時々真羅がそれぞれのもとに現れて、互いの話をするだろう。

そしていずれは、冬惺が王都で結婚したという報せが届く日が来る。

綺理もいつかどこかの誰かと結婚するときがくるかもしれない。そのときは、それは冬惺が

認めて勧めた縁談ということだ。あるいは冬惺は、北の里で一人で暮らす従妹によかれと思って、自ら縁談を調えるかもしれない。それを思うと胸が苦しくなる。

――それでも、と綺理は車輪の回り続ける音を聞きながら、こぼれる涙をまたぬぐう。

（それでも再会の約束があるなら、私は――）

約束の日を遥かに望んで、永遠に彼を想っているだろう――。

翔波は、出立した一行が見える限り見送ろうと、櫓門の階段を上っていた。

輪瑛五大門の櫓門の上には、そうした人の門出を見送るための露台が設けられているのだ。軍の出陣や凱旋の折には人で一杯になっていた露台だが、今は無人だろう。そう思いながら静かな露台に出た翔波は、そこに先客の人影があるのを見て瞠目した。

そしてその人影が誰かわかった途端、頭にかっと血が上る。

「――冬惺！」

駆け寄ると、北を眺めていた冬惺が振り返った。

「君、行かないと言い張っておきながら来ていたのか！　だったらこんなところからこっそり見てないで、ちゃんと綺理に会えばよかっただろ！」

怒りのままに叫んだ翔波に、冬惺は翳った瞳で首を横に振る。
「……会ったら、手を伸ばしたくなる」
（伸ばせばいいだろう!?）
翔波は怒鳴りつけたくなったが、危うく手にしていた手紙にしわをつけそうになって我に返った。託されたその手紙を、いささか乱暴に突きつける。
「……綺理から君に、手紙だよ」
「！　綺理から？」
ずっと暗かった冬惺の双眸に、一瞬生気の光が戻ったのが見えた。
冬惺が弾かれたように翔波に向き直り、壊れ物を扱うような手つきで手紙を受け取る。「冬惺へ」と記された宛名の筆跡を目でなぞり、彼女の名をつぶやく。
綺理、と。
そのたった二つの音を、これほどの愛しさを込めて口にできる者を、翔波は他に知らない。
冬惺は最初急いで読みたそうにして、それからあとで一人で大事に読もうと思い直したのか、封を切りかけた手を止めた。そして今度は、これを読んでしまったらもう綺理のくれた言葉で新しいものはなくなってしまうのだと、もったいながるようなまなざしで宛名を見つめる。
（……ああもう、どうしてこんなにわかっちゃうんだよ、僕は）
苛々しながら見ていた翔波は、ふと露台の高さと視界の関係に思い至った。

（あれ？　ひょっとしてこの上から見たら……）

「あのさ、冬惺。君、門の内側も……僕が綺理を見送っていたところも見ていたのかい？」

おそるおそる聞くと、冬惺は手紙から顔を上げて当然のようにうなずいた。指で自分の額をとんと叩き、懐かしそうに言う。

「おまえ、この歳になってもまだやるんだな」

「……ああ、うん。ちょっと思い出して、懐かしくなって」

額と額を合わせて道中の無事を祈るまじないは、幼い子ども同士がするものだ。しかしこの露台から見下ろしていたら、角度の関係で口づけに見えかねない――と焦ったのだが、誤解されておらずほっとする。

（いや、でも、誤解されてもそんなに問題ないのかな？）

翔波にとって、綺理はもう主人の事実上の婚約者ではない。冬惺も、想いを伝え合っていない以上は綺理の恋人とはいえないわけで、口を出す筋合いはないといえる。

「……そういえばさ、冬惺。君、このまま綺理に告白も求婚もしないつもりなのかい？」

単刀直入に問えば、冬惺は一瞬動きを止めた。

「――俺にはもう、その資格がない」

「そのくせ、裏から手を回して綺理の結婚承認権は握ったんだ？」

非難がましい口調に、冬惺がぴくりと表情を動かした。

「あいつがこれ以上意に沿わない結婚を強いられたり、政略の駒として扱われたりするのを防ぐためだ。既にいくつ、身の程知らずの馬鹿どもからの打診があったと思っている」

対する翔波も眉をはね上げ、怒りで声を荒げる。

「ああ、そうやって君は綺理に来る縁談をことごとく握り潰すんだろう？　だけど、自分が綺理とも誰とも結婚しないからって、綺理にも一生独り身でいさせるっていうのかい!?　自分勝手じゃないのか、それは！」

「勝手に曲解するな、馬鹿が！　俺はただ綺理を守りたいだけだ。おまえだって、綺理があいつを大事に思っていない男などと結婚したら不幸になると思うだろう！　綺理を幸せにできる男が現れない限り、あいつを不幸にする縁談を排除し続けるだけだ！」

「それを決めるのは君の主観なんだろ!?　結局君は、どんな求婚者が来ようと難癖つけて追い返すに決まってる！　本音は君は、綺理は自分のものだと思っているんじゃないのか!?」

「違う！　心から綺理を大切にしている男で、綺理もそいつとの結婚を望むというのなら、俺は祝福して承認するさ！　俺ができない分、そいつが綺理を幸せにしてやれるなら――」

瞬間、翔波は頭の中でなにかが切れる音を聞いた。

「――ふざけるな!!」

ドガッ、と鈍い音を立てて、翔波の拳が冬惺の頬に決まった。

翔波自身、自分の衝動的な行動に驚いたが、冬惺も完全に予想外だったのだろう。冬惺は渾

身の力を込めた一撃によろめき、露台の石床にしりもちをつく。
唖然とした顔でこちらを見上げる冬惺を、翔波はきっと睨んだ。
「――だったら、僕が綺理に求婚してもいいのか」
琥珀の双眸を静かに見開いた冬惺に、言ってやったという思いと、言ってしまったという思いが同時に湧き上がる。だがとにかく、言ってしまったのなら後には引けない。
「――僕は綺理が好きだよ。僕が綺理を心から大事に思っていることは、君も知っているはずだ。僕は必ず綺理を大切にする。綺理だって気心知れた僕ならまだ安心だろ。幸い所領も隣同士だし、鏡作家も再興してきたし、僕も今度晴れて当主になるから、綺理を娶る要件は揃ってる。あとは綺理の返事だけだ」
勢いに任せて言って、挑むように続ける。
「綺理は僕がもらう。――綺理に求婚する許可をくれよ」
「翔波、おまえ……」
冬惺は座り込んだまま呆然と翔波を見上げ、やがてゆるゆると前を向いた。
「そう、か。……そうだったのか」
虚脱した声で独り言のようにつぶやいてから、目を閉じて言う。
「――わかった」
(!?)

その瞬間翔波の胸に訪れたのは、喜びでも安堵でも勝利感でもなかった。怒りのような熱い感情ですらない。むしろ冷たいものを胸に落とされたように、すっと心が冷えた。

――その程度か、と。

そんな悟ったような顔で、恋敵の手に渡せる程度の想いなのか――という失望だった。

だが失望が翔波の胸を満たす間際、冬惺が勢いよく立ち上がった。

「やっとわかった！」

「は？」

ぽかんとした翔波に、冬惺はなにか自分の中で納得したような顔で言う。

「やっと自分の気持ちがわかった。悪いな、翔波。世話かけて」

嫌味のかけらもないすっきりした声だった。冬惺は礼を言うように翔波の肩を軽く叩くと、露台から慌ただしく駆け去っていく。

「……え？」

残された翔波はだいぶ遅れて間抜けなつぶやきを漏らし、首をめぐらせた。

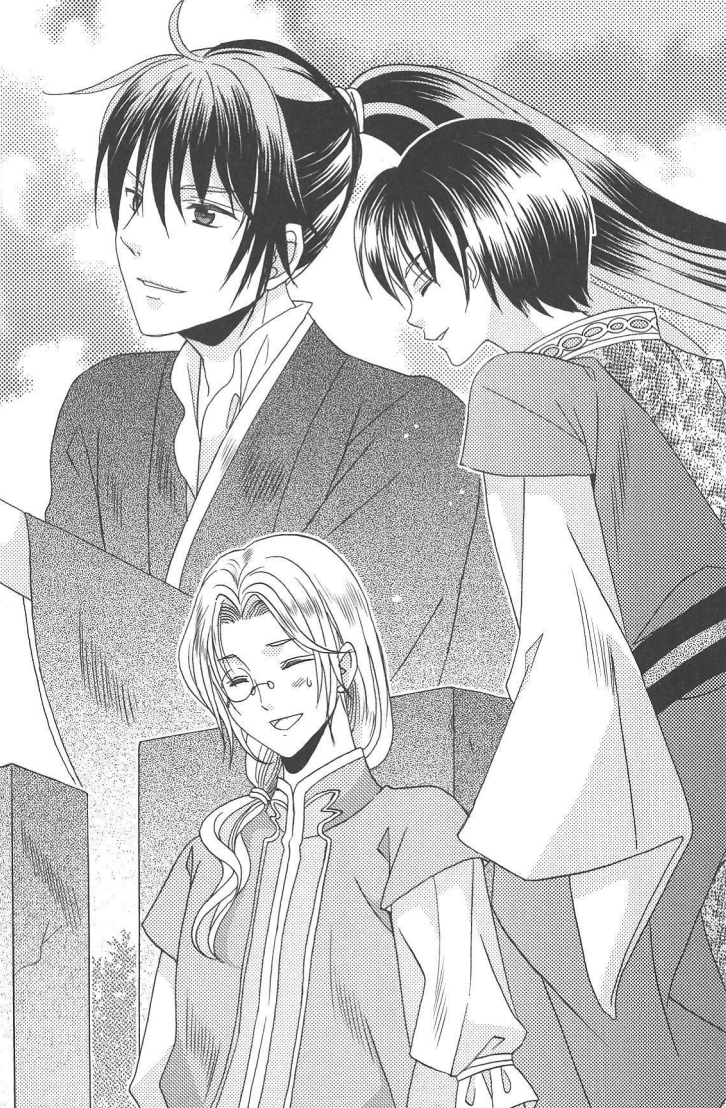
露台から見下ろせば、冬惺が綺理の一行を追って西山道を走っていくところだった。

「……ひょっとして、今ので後押しした？」

「……そのようだね」

どうせ真羅も近くで見ていただろうと思って言うと、案の定隣に忽然と真羅が現れる。

翔波は全身から力が抜けて、ずるずると座り込んだ。
「ああ……。しかも冬惺、絶対に僕が冬惺に発破かけるために言ったと思ってるよ……」
長年の横恋慕を知られたらもう後戻りできないと思っていたのに、つくづくなんなのだ、あの鈍さは。自分が間男だったらどうするのだと、逆に心配になる。
真羅が無言で翔波の肩にぽんと手を置いた。
その手の重みをありがたく思いつつも、翔波は手をひらひらと振る。
「……真羅。あの方向音痴馬鹿が綺理に追いつけるように、見守りを頼んでいいかい。これで万が一あの馬鹿閣下に一本道で迷子になれる超能力を発揮されたら、僕があきらめつかない」
「少年の手助けはいいが……君はいいのかね？」
気遣わしげな声に、いいよと答える代わりに手を振り続ける。すると真羅は宙で一回転して翡翠の瞳の鷹に変化し、ばさりと露台から飛び立っていった。
翔波は飛んでいく鷹の行く先を見やって、やれやれと肩で息をつく。
瞳に焼き付けた綺理の姿を思い浮かべ、その言葉を口にしてみる。
「――よかったね、綺理」
そうして自然に浮かんだ笑みは、苦笑ではなかった。



走り出したときは、綺理にふられてくるつもりだった。

このまま別れてしまったら、きっと自分は綺理を手放すことすらできないから、と。

――言われて初めて気づいたが、順当に考えて綺理を安心して任せられる一番の相手は翔波だ。だがその翔波に対してさえ、冬惺は綺理を渡せないと強く思ってしまった。

この感情をどうにかしなければ、自分はまさに翔波が指摘した通り、自分勝手な思いで綺理が結婚するのを阻み続けるだろう。だから自分の身勝手な感情から綺理を守るために、この想いに踏ん切りをつけなければと思った。

けれど、追いつく前に読んでおこうと走りながら開いた手紙に、心を変えた。

手紙の文面を、綺理がくれたその言葉を思い出しながら、西山道をひた走る。

（綺理……！）

『冬惺。私はこれから玉造の里へ行くけれど、一つ心配なのはあなたのこと』

白砂を踏みしめて、ほかに人けのない幅広い街道を駆けていく。

『冬惺はまだ知らないかもしれないけど、私はもうお父さまのことを真羅から教えてもらっているの。お父さまが冬惺に最期を頼んだって聞いて、とてもお父さまらしいと思ったわ。頼め

る相手がいて、お父さまもよかったと思う。そして頼まれたことから逃げなかった冬惺も、冬惺らしいと思って、やっとすべてが納得できた。そんなつらそうな顔をして背負い込まなくていいのよって、自信を持ってあなたに言えるんだと思ってほっとした』

　影珀の死体のそばで会ったときも、冬惺に手を伸ばしてくれた綺理。そのときの想いが胸にあふれて、足よ早く動けと叱咤するように速度を上げる。

『だけど、それでもあなたが昔のように、罪悪感に囚われてしまっていそうで心配なの。私が許しても、誰が許しても、冬惺だけが冬惺を許してくれないんじゃないかって』

　思い出す。かつて、自分のせいで綺理と翔波を《契約》に巻き込んだ、と負い目を抱えていたときも、彼女はそんな風に思う必要はないと伝えてくれた。

『でもね、もしも冬惺が私から大切なものを奪ったと思っているなら。私に対して負い目があると思い込んでいるのなら。せめて私の大切な人の幸せを、冬惺の幸せを奪わないで』

　その文を読んだとき、心がどうしようもなく震えた。どうして彼女はこんなにも自分のことを思ってくれるのだろう。心のひだにぴたりと寄り添った言葉をくれるのだろう。

『私の願いはあなたが幸せになることだから。あなたが心からの笑顔でいられることだから。だから、どうかそれを罪とは思わないでほしいの。だけど』

　筆跡はそこで一旦止まり、迷ってから続きを書きつづったように墨の濃さが変わっていた。

『願わくは、あなたの幸せの中に私もいますように』

その一文で、すべての迷いが消え去った。

求めていい、手を伸ばしていいのだと、許された気がした。この想いを告げることにも、求婚をすることにも、「ふられて感情に整理をつけるため」などという言い訳はいらないのだと。

『また必ず、笑顔のあなたに会いたい。だからどうか、再会を約束して』

（綺理――！）

朝日が照らす街道を、引き寄せられるように彼女のほうへ走る。この世界が天上に輝く太陽によって照らされているというのなら、冬惺の人生は綺理によってだ。あの太陽のようにまばゆい金髪の、かけがえのない少女を失って、どうして生きられるなどと思ったのだろう。

（追いついたらなにから話そう）

走りながら、逸る心で考える。

そうだ、まず見送りに顔を出さなかったことを謝って、手紙が本当に嬉しかったと伝えよう。告白して、求婚して、もしも想いを受け入れてもらえたら、この手に綺理を抱きしめて――。

――そんな順番は、綺理の姿を見た途端、頭から吹き飛んだ。

――後ろ髪を引かれたような気がした。

回り続ける車輪が止まったとき、自分の心が映ったのかと思った。
屋形車が泥にはまって動かなくなった、と家人が困惑声で言う。よく整備された西山道は水はけがよいし、乾ノ力の強い王都近くでぬかるみができるなど、まずありえないことだ。
（ひょっとして、真羅？）
胸をかすめた予感に、急いで屋形車を降りる。
屋形車をぬかるみから持ち上げようとする家人たちから離れ、空を仰ぐと、案の定見慣れた鳥影が旋回していた。だが鷹姿で降りてくるのかと思えば、真羅はすいと王都のほうへ飛んでいってしまう。
そして鳥影を目で追って、もと来た道を振り返ったときだ。
（――――！）
走ってくる人影に、目が吸い寄せられた。心が引き寄せられた。気づけば綺理は、走り出していた。
「姫さま!?」
背後で侍女や家人たちが叫ぶのも、ほとんど耳に入らない。ただこちらにやってくる冬惺だけを見つめて、彼のもとへ走る。
「――冬惺！」
「綺理！」

互いに引き寄せられるように駆け寄り、――気がついたときには、綺理は冬惺に嵐のような勢いでかき抱かれていた。

強い腕に抱きしめられて、上気した彼の体温を布越しに感じる。耳元に彼の声が落とされる。

「行くな。そばにいてくれ」

（……冬、惺――？）

夢のような言葉に、綺理は目を見開いた。現実感のない状況に頭も体もふわふわして、冬惺に抱きしめられているこの体が本当に自分のものなのかもわからなくなる。

呆然としていると、冬惺が腕をゆるめた。彼は綺理を腕の中に収めたまま少し身を離し、綺理をまっすぐに見て言う。

「結婚してほしい」

――呼吸と、思考と、時間と、とにかくすべてが止まった。

綺理は熱を帯びた琥珀の瞳に囚われたように、冬惺を見つめていた。自分の願望を凝縮したような一時に酔いしれそうになる。

それからだんだん、全速力で上がった息が元に戻ってくると、現実的な思考が頭に返ってきた。――具体的には、冬惺が綺理の結婚相手を決める権利を持っているというあたり。

「……誰と？」

おそるおそる確認すると、冬惺が半秒ほど固まった。

「俺と。……いったいどういう頭をしたら、この状況でそんな質問が出る？」
「だ、だって……急に、理由がわからないし」
「俺がおまえを好きだから。それでは理由にならないのか？」
「……う。だっ、だから、その『好き』ってどういう意味!?」
冬惺の腕の中で真っ赤になりながら問う。それだけは絶対に確認せねばなるまい。冬惺のことだから、大好きな幼なじみを不憫に思って娶ろうとした——という可能性もありうる。
（そ、そうよ。冬惺は結婚と恋愛を結びつけて考えてなかったはずだし、恋愛がなにかわかっているかも怪しいし、単純に女の子の幸せは結婚だ、とか思ってるのかも。でも『好き』の種類がすれ違ったまま結婚……なんていったら、昔に逆戻りだし）
予防線を張るのに慣れすぎた頭でぐるぐる考えていると、冬惺が呆れ声を出した。
「どういうって、おまえ……」
「だって、私が浮かれてなにか勘違いしてたら嫌なんだもん！　冬惺の『好き』が、私の冬惺への『好き』と同じかどうかわからないと……っ。だから、ちゃんと口で説明して！」
わたわたしながら勢いで叫ぶ。既にもう、これで勘違いだったら冬惺の顔を二度と見られなくなるぐらいの恥ずかしいことを言っている気がする。顔が熱くて火を噴きそうだ。
「……口で、説明……」
微妙に目をそらした冬惺に、「口で」と念を押す。状況でわかれと言われて、また自分の勘

違いだったら立ち直れない気がする。じっと見つめていると、冬惺が観念したように言った。
「……わかった。だが、そんなに見られていたら無理だ」
「あ、はい」
綺理は素直に目をつぶった。
いったいなにを言われるのだろうと、期待と不安でどきどきしながら待つ。
――と、不意に唇にやわらかいものが触れた。
重なって、すぐに離れた、そのぬくもりは。
(――え!?)
ぱちっと目を開けると、視界一杯に冬惺の顔がある。不意打ちに心臓がひっくり返り、次いで口づけをされたのだと気づいて、顔から首筋からすべてがかっと熱を持った。
「と、とうせ、今……」
あたふたする綺理に、冬惺は顔を離して目をそらす。
「……おまえが、口で説明しろって言ったから」
(――はい!?)
「綺理も前に、いきなりしただろう」
だからおあいこだと言わんばかりの台詞に、綺理は以前自分が彼の唇を奪ったことを思い出した。冬惺の腕に閉じ込められていなければ、恥ずかしさで逃げ出していたかもしれない。

（あ、あれ？　でも今のが『説明』って、つまり……）

大混乱に陥りながら思ったとき、冬惺が意を決したように口を開いた。

「いや、悪い。本当はおまえがすぐ近くで急に目を閉じるから、つい抑えられなくなったんだ。……嫌だったか？」

悔やむように問われて、綺理は急いで首を横に振る。冬惺に触れられて嫌なはずがない。嬉しかった。……けど、実のところ短すぎてよくわからなかった。

（って、今なに考えたの私――！）

もう一度、もっと――、なんて思ってしまった自分に、今すぐ穴を掘って埋まりたくなる。

そのとき、冬惺が再び綺理を抱き寄せた。

その動きは性急なのに、抱きしめる腕は壊れ物を扱っているかのように優しい。互いの熱や鼓動が溶け合うような感覚の中で、冬惺の熱っぽい吐息が綺理の耳朶に触れた。

「――おまえといると、俺はおかしくなる。おまえの言葉やちょっとしたしぐさで馬鹿みたいに動揺するし、抑えていないと触れたくて体が勝手に動く。気がつけば自分の想いだけでおまえを独占しようとしていて、おまえを傷つけかねない自分の感情が怖くなる。だけどおまえがいなかったら、俺は生き方すら忘れそうだ」

あふれる想いが堰を切ったように語る冬惺に、綺理は胸が一杯になる。

「綺理。俺はおまえが好きだ。愛してる。恋してる。溺れてる。心を奪われている。誰よりも

大切で、守りたくて、俺の手でおまえを幸せにしたくて……ああ、もう、こんな言葉を並べるだけじゃ説明しきれない。こんな『好き』ではおまえに求婚する理由にはならないか？」

（冬惺――）

綺理は幸せの洪水にさらわれそうになりながら、小さく首を横に振った。

「でも……でも、私はもう冬惺にふさわしい相手じゃ」

「関係ない。俺は綺理じゃないと駄目なんだ。綺理しかいらないんだ。出陣の前にも春怜兄上にそう伝えて許可を得ている。――もう一度言う。結婚してくれ」

腕を解かれて見つめられ、綺理はもう自分の想いを封じ込めるなどできなかった。

「――はい」

しっかりと返事をしてから、そんな言葉だけでは全然足りないことに気づいて続ける。

「すごく嬉しい。私も冬惺のことがずっとずっと好きで、だから、だから……！」

「――待て。おまえの言う『好き』は、どういう意味だ？」

嬉し涙をにじませて言った綺理は、唐突に聞き返されて固まった。この期に及んでそれを確認するのか、と自分を棚に上げて思ったが、冬惺は本当の本気で不安に思っているらしい。

「俺の言う『好き』と同じなのか、違うのか――きちんと教えてほしい」

「……」

綺理は極限まで赤くなると、口をぱくぱくさせた。声が出なくてどうしようもなくて、――

意を決して背伸びして、彼の唇に『口で説明』する。
突然重ねられた唇に、冬惺が驚く気配がした。直後、彼の大きな手が綺理の頭の後ろに回り、深く深く、すべてを奪うように口づけられる。
互いの吐息と熱が混じり合う。もう離さないと言うように強く抱きしめられて、髪に差し入れられた指にいとおしむように頭をなでられる。角度を変えて何度も唇が重ねられ、求められる。
めまいがするほどの幸せに包まれて、綺理は長い口づけに身をゆだねていた。

――抱き合って口づけを交わす二人を、玉造の侍女や家人たちは半ば呆れて見守っていた。
「お二方とも、私たちがいるのをすっかり忘れているんじゃないですか……？」
「いちゃつくのに飽きたら思い出すでしょう。……屋形車、反転させておきましょうか」
一行を取りしきる家令がため息混じりに言うと、桂鈴がうなずく。
「そうですわねえ。玉造公のことを思えば皆も複雑でしょうけれど……あれだけ見せつけられたあとで綺理さまのお幸せを奪うなど、心苦しくてできませんもの」

綺理を連れて王都に戻ったあと、冬惺は春怜のもとに改めて結婚の許可を願い出に行った。
「求婚の返事をもらいました。兄上、俺は綺理と結婚します」
許可を求めるというより確定事項を報告する口調で言った冬惺に、春怜はやはりこうなったかという顔で執務机の上で指を組んだ。
「約束だからな、止めはせん。――だがなあ、冬惺。わかっているのか？　おまえと結婚すれば綺理は……言いたくはないが、婚約者が破滅した途端その敵に取り入ったたいした女よと、陰口を叩かれることになるぞ」
事実、それこそが綺理と冬惺がずっと会えなかった理由でもある。
「特に王弟妃の座を狙っていた姫たちは、こぞって綺理を悪しざまに言うだろう。いくら私でも、綺理を心ない中傷から守ってやることはできんのだぞ？」
春怜は危ぶむように末弟を見上げたが、冬惺は晴れやかに笑った。
「それなら問題ありません。要するに綺理が俺をたぶらかしたと思われなければいいんです。――俺が嫌がる綺理に結婚を無理強いしたことにすればいい」
「！　冬惺、おまえなにをする気だ！」

がたんと椅子を立った春怜に、冬惺はさらりと続ける。
「次の殿上会議で、領地目当てに綺理を娶るという発言をします。その上で、強欲な俺が領地目当てに悪辣なやり方で綺理に結婚を迫った、という噂を広めればいい」
「それでは、せっかくのおまえの声望に傷がつくことになる」
「そうですね。一人の王弟への声望が高まりすぎて危ぶんでいる貴族もいますし、このあたりで評判を落としておくくらいがちょうどいいでしょう。そうしたら俺も綺理も、ほとぼりが冷めるまで玉造の里に引っ込んでいますよ」
幸い冬惺は出陣前に、自分が戻らなかったときのための仕事の引き継ぎ準備を行っていた。あのときの準備を生かせば、冬惺が恒常的に王都を空けるようになっても支障はない。
春怜は唖然として冬惺を見つめ、やがてあきらめたように椅子に腰を下ろした。
「……おまえがもう決めているなら仕方あるまい。いずれおまえに北部を掌握させたかったのも事実だしな。ただし条件が二つある。一つ、婚礼には必ず私を呼べ」
「ええ。もともと婚礼は、身内だけで目立たないように挙げるつもりですし」
「もう一つ。――幸せになれ」
さりげなさを装いつつも真剣さを秘めた声で続けられ、冬惺は目を丸くした。
妹を嫁に出す兄でもあるまいに、と呆れたが、皮肉を言おうとした口元は結局そのままほころんで、冬惺は歳相応の少年のような照れ笑いを浮かべた。

「ありがとうございます、春怜兄上。――必ず幸せになりますよ。綺理と一緒に」

――かつての大家の残影に執着する王弟が、玉造の里を手に入れるために綺理に強引に結婚を迫った。綺理は玉造家の仇からの求婚を厭ってひそかに王都を出ようとしたが、冬惺は綺理の結婚承認権を握った上で彼女を無理やり連れ戻し、結婚を承諾させた。

やがてそんな筋書きが王都中に広まり、女性をものにするのになんと卑劣なやり方を、と、うなぎ上りだった冬惺の評判はがた落ちした。その代わり綺理に対しては、「父や従兄の政略に翻弄され続けた非運の姫」と、同情の声が集まるようになっていった。

――そして初夏のある日、綺理と冬惺は身内に祝福されてひそかに婚礼を挙げ、玉造の里へと発った。

その日の夜――。

翔波は真羅を相手に、盛大に管をまいていた。

「結局さあ、僕は冬惺が綺理のことをあきらめたら嫌だったんだよ」

ここは当主権返還に際して、翔波が王都に新しく構えた鏡作邸の自室だ。卓の上には、この

日のために真羅が取っておいた最高級の名酒、『斎乃寒桜』の入ったひょうたん水筒がある。
そのひょうたん水筒を抱えて、翔波の差し出した杯にこぼこぼと注いでいるのは、子狐姿の真羅だ。初めは普通に童子姿で酒を酌み交わしていたのだが、途中で据わった目になった翔波から「もふもふさせろ」と所望され、変化したのである。
「僕は冬惺のことが好きな綺理が好きで、綺理を誰よりも大事に想っている冬惺が好きで……ああもう、結局僕が一番貧乏くじなんじゃないか！」
酒杯をあおって卓に突っ伏した翔波の頭を、子狐真羅が前脚でぽふぽふなでる。
「まあまあショウハ。私はそんな君が好きだよ」
すると翔波ががばっと顔を上げ、真剣な目つきで翡翠の瞳を見た。
「本当に？　君は本当にそう思っているのかい？」
「……え。まあ、改めて聞かれると答えにくいが、認めるにやぶさかでないよ」
真羅が答えると、翔波は再び卓に突っ伏す。
「やっぱり真羅も僕が貧乏くじだと思ってるんだ――！」
「え、そっちなのかね……？」
つぶやいた子狐真羅の尻尾を、翔波はふさふさいじりながら続ける。
「冬惺なんてさ、僕が恋敵だってことに最後まで気づかなかったんだよ。なんだよもう、幸せに酔っちゃって。『おまえも結婚したい相手ができたら言えよ。たとえ障害があっても俺が味

方してやるからな』だよ？……あー、腹が立ってきた！」

翔波は真羅にまた酒を注がせ、酒杯を掲げて叫ぶ。

「こうなったら復讐だよ。二人に子どもが生まれたら、冬惺に復讐してやるーっ」

「はあ、復讐」

「そうだよ！　綺理と冬惺の子どもなら可愛いに決まっているんだから、思いっきり可愛がって『お父さまと翔波のどっちが好きー？』『翔波おじさんー』って言ってもらって、冬惺をいじけさせてやる――！」

「ああ、うん。是非やりたまえよ、復讐。……というか君、だいぶ酔っているね？」

真羅は相槌を打ちながら、翔波の目を盗んでこそこそ水で酒を薄める。

管をまきながら杯を重ねていると、やがて翔波は卓にうつぶせてうとうとしはじめた。

「風邪を引くよ、ショウハ。……まったく、私の友人たちは世話が焼ける」

子狐真羅は苦笑して、掛布をくわえて取ってくる。

そうして、椅子に座ったまま眠ってしまった翔波によいせよいせと掛布をかけてやっていると、彼が寝言でつぶやくのが漏れ聞こえてきた。

「……綺理、冬惺。おめでとう……」

最終章　約束の日は遥かに

綺理と冬惺が玉造の里へ発ってから半年ほどが過ぎた頃――。

よく晴れた冬の昼下がり。王都輪瑛の王宮で、翔波は千紗と二人で茶の卓についていた。

「冬惺公閣下も綺理も元気でしたよ。相変わらず仲良く幸せそうにじゃれあっていて」

綺理たちに遅れて北部へ発った翔波は、秋の間を自らの鏡作家領で過ごし、新年祭の季節に合わせてまた王都に戻ってきていた。

そして叔父夫妻の様子を聞きたがる千紗王女に、私的な茶の席に招かれたのである。

北部みやげの茶菓子を嬉しそうに頬張っている千紗に、翔波は茶を飲みながら言う。

「閣下が領地目当てに綺理を無理やり娶った、という噂が届いていたせいで、最初は玉造の里人も閣下に反感を持っていたらしいですけどね。実際に二人の様子を見て、すぐに噂が間違いだとわかったようです。私が玉造の里を訪ねたときには、閣下が綺理を熱愛していてむしろ尻に敷かれていることは、もう里の常識になっていました。――閣下も頑張って善政を敷いているようで、今では玉造の民からの評判も悪くないそうです」

それには冬惺がかつて影珀の葬儀に多大な便宜をはかったことや、玉造軍の捕虜に寛大な処置を行っていたことも効いたようだ。

「他にも閣下は、北部領主たちの取りまとめ役として南部との折衝にも努めていますね。綺理は綺理で薬師の養成所や施薬院の設立に意気込んでいて、どちらも生き生きしていましたよ」

翔波が笑顔で語ると、千紗が安心したように笑った。

それから千紗は、茶杯を両手で持ったまま上目遣いに翔波を見る。

「……翔波は、鏡作の里でどうしてた？」

問われて、翔波は改めて思い返す。正式に当主になったとはいえ、所領の統治にはすぐに慣れるものではない。佐鏡家の補佐に頼ったり冬惺に相談したり奏珠に罵倒されたりしながら、どうにかこうにか頑張っていた。現在その奏珠は、鏡作の間者衆の筆頭として当主付きになっている。

「……そういえば、気の早い里の者に、当主はまだ結婚しないのかと聞かれましたね」

ふと、綺理たちの話題から連想して思い出す。じきに成人になれば、ますます鏡作の血筋を残すようにとせっつかれそうだ——と思っていると、千紗が眉を曇らせた。

「……翔波もそのうち結婚しちゃうの？」

不安げに問い返されて、翔波は茶を吹き冷ましながら目を伏せた。

「——当分、そんな気にはなれないです」

揺れる水面を見ながら、つぶやく。

幸せそうにしている二人を見て、嬉しかったのも安心したのも確か。けれど翔波が綺理をま

だ恋しく想っていることも、同じくらい確かなことだ。この想いを抱えたまま誰かと結婚するのも、忘れるために結婚するのもしたくない。忘れるための新しい恋を探すつもりもない。

そこでふと目を上げて、千紗がそれはそれはほっとした表情になっているのに気づく。

（ああ、そうか。冬惺が結婚して玉造の里で暮らすようになったから、お寂しいに決まってる。それで僕も結婚したら王都に来なくなると思って……）

「――千紗さまがお小さいうちは、誰とも結婚しませんよ」

翔波は寂しがり屋の王女を安心させるように、にこりと笑った。

――千紗はこの初夏で九歳になったところだ。彼女が大人になる頃には、綺理も母親になっているだろう。翔波の胸にあるこの想いも、その頃までには彼ら一家への穏やかな愛情へと昇華されているだろう。そうなるまでは、どうせ結婚という気分にはなれやしない。

すると、不意に千紗がぱあっと輝くような笑顔になった。

「本当に？　本当に翔波は、私が大人になるまで待っててくれるの？」

「？　はい。私は千紗さまに嘘は言いませんよ」

卓に身を乗り出して琥珀の瞳を輝かせる千紗に、翔波は目をぱちくりさせる。

（気のせいかな。今の、なにか微妙にずれていたような……？）

よくわからないままの翔波に、千紗が小指を立てて「約束よ！」とやけに真剣な顔で言った。翔波がその小指に自分の小指を絡めると、彼女は真摯な声で指きりの文言を唱える。

小さな王女と約束を交わしながら、翔波はやはり内心で首を傾げていた。

そしてまた一つ季節が廻り、玉造の里に春がやってきていた。

綺理は満開の桜の下、玉造邸の露台に長椅子を出して座っていた。組み紐のぎっしり入った箱を膝にのせて一本一本色を見ていると、少し湿った北部の風が綺理の金髪を揺らした。顔を上げると桜吹雪が視界を埋める。風にくるくると舞う花びらを目を細めて見ていると、後ろから優しい手にさらりと髪をなでられた。

「冬惺」

振り返って微笑むと、冬惺が綺理の髪に絡んだ花びらを取りながら、戯れるように金髪を指で梳いた。彼はそのひと房をすくい上げて口づけてから、頬を染めた綺理の隣に座る。

「綺理。南からの便りがまとめて届いた。今、読むか？」

綺理はうなずいて、組み紐の箱を脇に置いた。

手紙の束の一番上を取り、その封印に捺された玉造の紋――姉の紋に口元をほころばせる。

『あなたが冬惺がいいと言うならいいわ。――幸せになりなさい』

玻璃にとってみれば、綺理と冬惺の結婚は、妹が父の仇と結婚するということ。それでもあ

の姉は、婚礼の日、そう言って婚礼装束姿の綺理の髪に玉のかんざしを挿してくれたのだ。
「冬惺。お姉さまね、ご懐妊だって。夏憬殿下が浮かれてうるさいって書いてる」
嬉しい報せに綺理が隣を見ると、冬惺がやたら厚みのある手紙を片手に額を押さえていた。
「？　誰からの手紙？」
「……明花から。宛名が俺とおまえの連名なんだが、なぜだか目が滑って読めない」
解読してくれ、と手渡され、綺理は怪訝な顔でかつての恋敵からの手紙を読んでいく。
「……要約すると、『わたくしは冬惺さまよりずっと素敵な方を新しく好きになったので、綺理さま方はどうぞお幸せに』かな？」
新しく好きになった相手は琅公国の青年貴族で、冬惺と違って穏やかでとても優しく、髪は亜麻色、瞳は藍色、背の高さは――と、ほとばしるような筆跡で延々とのろけ話が続いている。
綺理も目が滑ってきたのでひとまず横においた。冬惺が次の手紙を手に取る。
「これは春怜兄上からだ。王宮でも俺たちの噂はだんだん下火になってきているから、狩占祭の頃にでも一旦顔を出せと――」
「――ああっ、やった！　師匠、ありがとう。続き待ってたの！　うわあ、前の話の最後に使われた毒って妙翅草だと思ったんだけど、合ってるかなあ！」
一番下にあった包みを開いた綺理は、思わず冬惺をさえぎって声を上げた。薬師の師匠、悠蓮から届いたその包みの中身は、綺理が愛読する草子本の続刊だ。

「……それは、例の連続毒殺物語か？　なぜ悠蓮が……」
「そう、これ、実は師匠が作者だったの！　道理で毒に詳しいと思った！」
「……っ、悠蓮が書いているのか！　あいつはもう、いったいなんなんだ!?」
綺理が心ここにあらずで草子本の表紙の毒草の絵を見ていると、冬惺は放っておかれて面白くないのか、組み紐の箱に目を留めて話題を変えた。
「綺理。これは？」
「あ、それね。組み紐商人から色見本を取り寄せたの。真羅にあげる髪結い紐の色を選ぼうと思って。真羅の髪も、そろそろ結える長さになってくるでしょ」
「ああ……。あいつの髪を結ってやる約束か」
冬惺が穏やかに目を細め、綺理も笑顔でうなずいた。
「うん。それでね、その話をこの前火雷明王にしたら、ちょっぴり羨ましそうな顔をしてたから、火雷明王にもあげようかと思ってるの。火雷明王の髪には何色が合うと思う？」
「……鳥のより、俺のは？」
「？　冬惺とは、いつかまた王都の市で組み紐のお店を回る約束でしょ？」
冬惺が微妙に不満顔になる。だがそのとき、綺理は手にした草子本の間からひらりと紙片が落ちるのを見て、下を向いていた。
「師匠からの手紙だ。……ええと、そのうち玉造の里を訪ねるって。私が子どもを産むときは

産婆をするから、臨月になったら押しかけるって言ってる」
「臨月って……当分はまだだろう」
冬惺が呆れ顔になったが、綺理はちょっと考えてから指を折った。
「……秋の終わり頃、かな？」
――冬惺がその言葉の意味に気づくまで、三秒ほどかかった。彼の琥珀の瞳が大きく見開かれるのを見て、綺理は頬に指を一本当てて「えへ」と小首を傾げる。
「今日、あとで言うつもりだったんだけど、実はね――きゃっ!?」
「やった！　ありがとう！」
満面の笑みの冬惺に抱き上げられてくるくる回されて、綺理は思わず声を立てて笑った。
やがてすとんと下ろされたとき、顔の近さにどちらからともなく目をつぶる。そして桜吹雪の舞う中で、二人はそっと唇を重ねた。

そんな二人を桜の樹の上から見ていた真羅は、微笑して立ち上がった。
（めでたい話だが、お祝いを言うのはあとにしておこうか。今邪魔をしたらトウセイが拗ねそうだ）
身を翻し、一旦鷹の姿に変化して飛び立つ。

高く舞い上がると、緑なす豊かな森と山に囲まれた玉造の里が眼下に見える。森の向こうに閉じた泥の海、内淵海があるのが見える。真羅はその内淵海のほうへ羽ばたいた。

——何百年何千年先かはわからないが、この世界は孵化を待っている。

冬惺の夢の通りなら、この地上はだんだんと広がってゆく。それにつれて二つの島の間にある塩水の海、水海も広がっていき、代わりに少しずつ淵海が引いていくのだろう。

そしていつか淵海と地上が分かたれるときがくる。

そうなったらもう、地上では淵妖や乾ノ術もおとぎ話の存在になるのかもしれない。

(私はその様を見守ってゆこう。地上との別れを迎え、湿ノ神と再び相まみえる日まで——)

真羅は内淵海のほとりに降りると、童子姿に戻った。

そこはかつて綺理たち三人が、翡翠の勾玉で真羅を淵海から釣り上げ、《契約》をした場所。

そのはじまりの約束の場所に立つと、真羅は再会の約束の日を遥かに見るように、春爛漫の地上をまぶしく見つめた。

そのそばでは世界の淵源の海が、太陽に照らされて穏やかな薄青に揺らめいていた。



あとがき

こんにちは、薙野ゆいらです。

おかげさまで『金蘭の王国』も最終巻を迎えました。シリーズを通して成長したり変化したりしてきた登場人物たちが、それぞれたどりつくべきところに行きついたかなと思います。

物語の終着点はここだろうと当初から決めていましたが、私の綴るお話が終わったあとも彼らの未来は続いていきます。×年後の彼らはどうなっているかな、などと、ちらりとでも想像していただけたら幸いです。

そして無事完結してほっとしたところで、この物語の舞台裏について少し種明かしをしようと思います。ここから先はネタバレを含みますので、本編未読の方はご注意ください。

今巻のプロフィール欄でも触れましたが、この『金蘭の王国』という物語は、イギリス中世末期・薔薇戦争（の中頃の時期）をひそかにベースにしております。私がこの物語を書こうと思ったそもそものきっかけは、私が薔薇戦争と、その時代のとある幼なじみカップルにはまったこと。そんなわけで、実は登場人物たちも歴史上にモデルがいたりいなかったりします。

綺理のモデルは、北部の二大貴族の一であり「王造り」と呼ばれた伯爵の次女。白薔薇方と

して育ったけれど、父伯爵の離反によって赤薔薇方の王太子と婚約させられた人です。
冬惺のモデルは、彼女のいとこであり、幼なじみであり、赤薔薇方が敗れた後に夫となった人物。金髪美形の漁色家で知られた国王（白薔薇方）の、十歳違いの末弟でもあります。
この二人を中心に、モデルのいる登場人物は他にもちらほらいます。興味のある方は薔薇戦争期の人物を調べてみると面白いかもしれません。探すヒントは一巻のプロフィール欄（笑）。
もっともモデルといっても性格等は基本的に別人です。そして書けば書くほどずれていっているので、モデルとなった人物のその後と『金蘭』のキャラたちのその後は関係ありません。

さて、そろそろあとがきも最後です。イラストレーターの香坂ゆう様。毎回華麗で素敵なイラストをありがとうございます。イラストのイメージから話が膨らんだり、イラストを鼻先のニンジンに修羅場を乗り切ったりと、執筆の上でもずいぶん助けていただきました。毎度お世話になり通しの担当様。修羅場記録を大更新しつつも最終巻をお届けできたのは、あなたのおかげです。香坂ゆう様、担当様、私、の三人四脚であってこその『金蘭』だったと思います。
そして最後までおつきあいしてくださった読者の皆様に、心からの感謝を捧げます。本当にありがとうございます。願わくは、また別の物語でお会いできますように。

薙野　ゆいら

BEANS BUNKO

「金蘭の王国 約束の日は遥かに」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「薙野ゆいら」先生・「香坂ゆう」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

金蘭の王国
約束の日は遥かに
薙野ゆいら

角川ビーンズ文庫　BB62-8　16265

平成22年5月1日　初版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――暁印刷　製本所――BBC
装幀者――micro fish

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-452708-2 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Yuira NAGINO 2010 Printed in Japan

9784044527082

ISBN978-4-04-452708-2
C0193 ¥514E

定価：本体514円（税別）

1920193005141

BEANS BUNKO

金蘭の王国
約束の日は遥かに

薙野ゆいら

やむを得ない事情で仇同士となってしまった綺理と冬惺。（俺にはもう、綺理に好きだと告げる資格はない）そう思い悩みながらも、冬惺は綺理を救い出すため、紅楓家と決着をつけるため、出陣する。一方、綺理は紅楓家将軍・空騅が、妖王万宵と手を組んだことを知る。しかも、戦いに乗じて万宵が淵妖の大群を送り込んできて……!?　綺理は淵妖の手から愛する王国を守ることができるのか、そして冬惺との絆の行方は!?　感動の完結巻!!